

第 1 部

千崎古墳群第 4 次調査報告



維和中学校への現地説明会風景

一 位置と環境

1. 地理的環境（第1・2図）

天草諸島は熊本県の西の海上に位置し、上島、下島をはじめ大小120余りの島々からなる一大群島である。天草諸島は、四方を八代海、有明海、天草灘に囲まれ九州西岸のほぼ中央に位置していることから、かつては熊本のみならず九州における海上交通の要衝となっていた。

千崎古墳群の所在する維和島は、天草諸島の北端に位置する南北約5.5km、東西約2.5km、面積約6.4km²の菱形の島である。東は八代海に面し、北東に戸馳島を挟んで宇土半島、南西に上島、西に大矢野島がある。維和島には西岸の大鷲浦古墳（73：番号は第2図に対応）、南端の広浦古墳（85）、東岸の越路北古墳（67）・越路南古墳（68）などの古墳が多く所在している。また、これらの古墳には箱式石棺を有するものが多いという特徴もある。

さて、千崎古墳群は熊本県上天草市大矢野町維和千崎3080・3081番地他に所在する。当古墳群は維和島北端の千崎丘陵に位置し、北に宇土半島を望む。また、寺島、戸馳島など古墳群が存在する島々と相対している。

（平野）

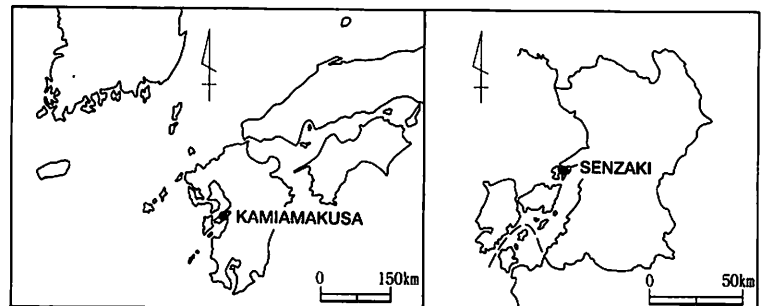
2. 熊本県・鹿児島県所在の箱式石棺を有する古墳（第3図）

箱式石棺とは、数枚の板石で構成された箱形の石棺のことである。弥生時代に朝鮮半島から伝わり、古墳時代を通じて用いられた。箱式石棺は全国的に広く分布し、大規模な墳丘を有する首長墓にもその存在が確認されている。しかし、その多くは小古墳や無墳丘墓の主体部として用いられている。このことから、箱式石棺は首長よりも下位に位置する人々の埋葬施設として、比較的多く用いられたことが指摘されている（清家2001）。また箱式石棺の中でも、熊本県と鹿児島県の石棺には共通性が指摘されている（橋本2005）。そこで、熊本県と鹿児島県の箱式石棺の関係性について古墳の立地や石棺材、石棺構造などから検討を加えたい。

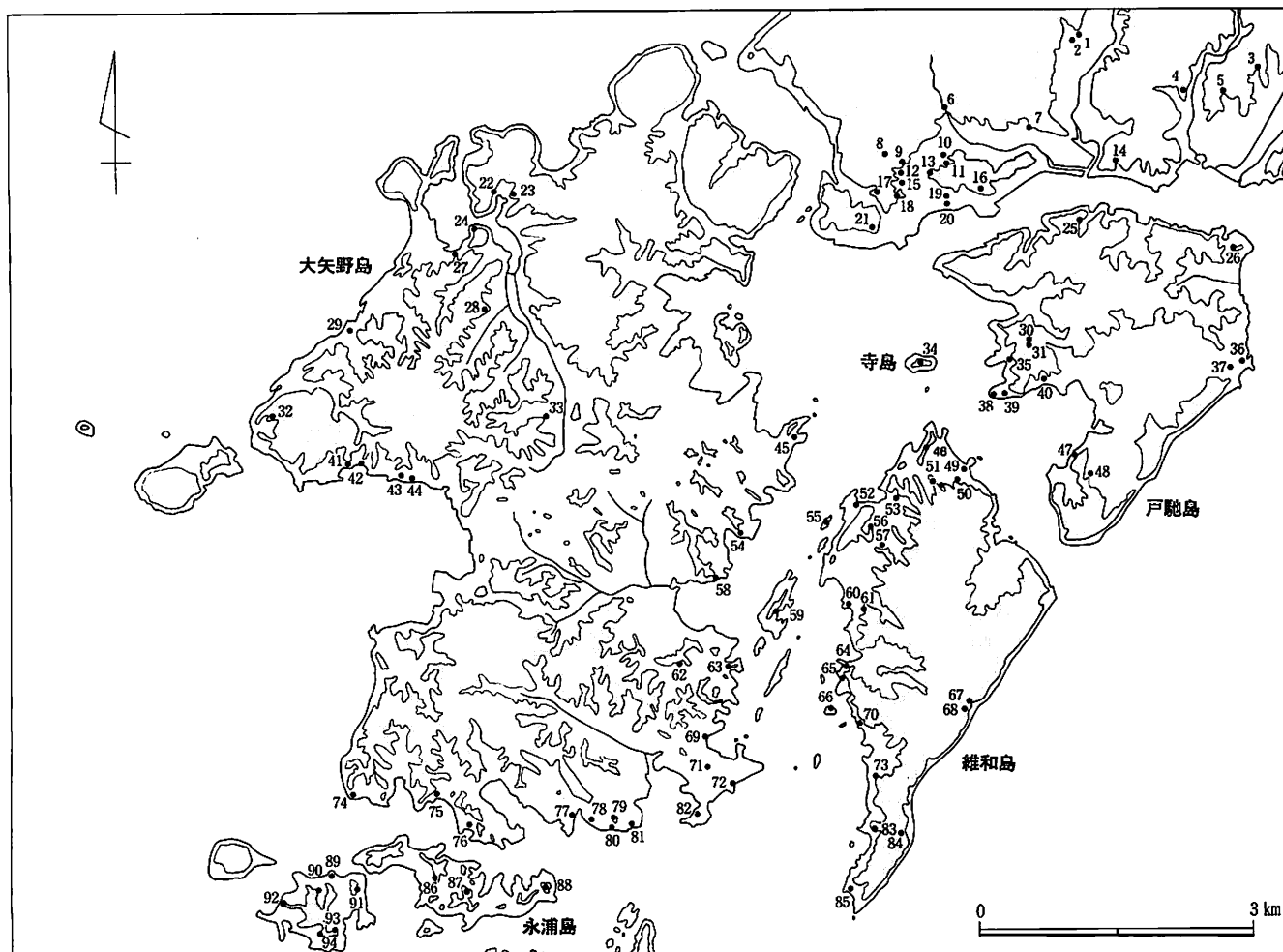
熊本県において箱式石棺を有する古墳の分布は、梅木古墳（小国町）を北限、北園石棺（106：番号は第3図、第1～4表に対応）を南限とする。その中でも、菊池川下流域、白川下流域、緑川流域、阿蘇地域、宇土半島基部から天草諸島にかけての地域に分布が集中している（岩崎編1990）。ここでは、特に分布の集中がみられる熊本平野、緑川流域、宇土半島基部地域、宇土半島、八代周辺地域、水俣地域、天草諸島の箱式石棺を概観する。

熊本平野で箱式石棺を有する古墳の多くは丘陵上に位置している。墳丘を有するものは少ない。石棺材には安山岩が多く用いられている。小口の構造はすべてH字形タイプで、長側石は重ね継ぎが多い（以下、箱式石棺の型式名は清家2001による）。そのような中で、櫛崎山古墳群1号石棺（7）が長側石1枚タイプである点は注目される。長側石1枚タイプの箱式石棺は技術的にも労力的にも製作が困難であることから、このタイプの石棺は、長側石複数枚タイプのものより相対的に上位に位置すると指摘されている（清家2001）。

緑川流域で箱式石棺を有する古墳は、城南地域と御船地域を中心に分布する。墳丘を有

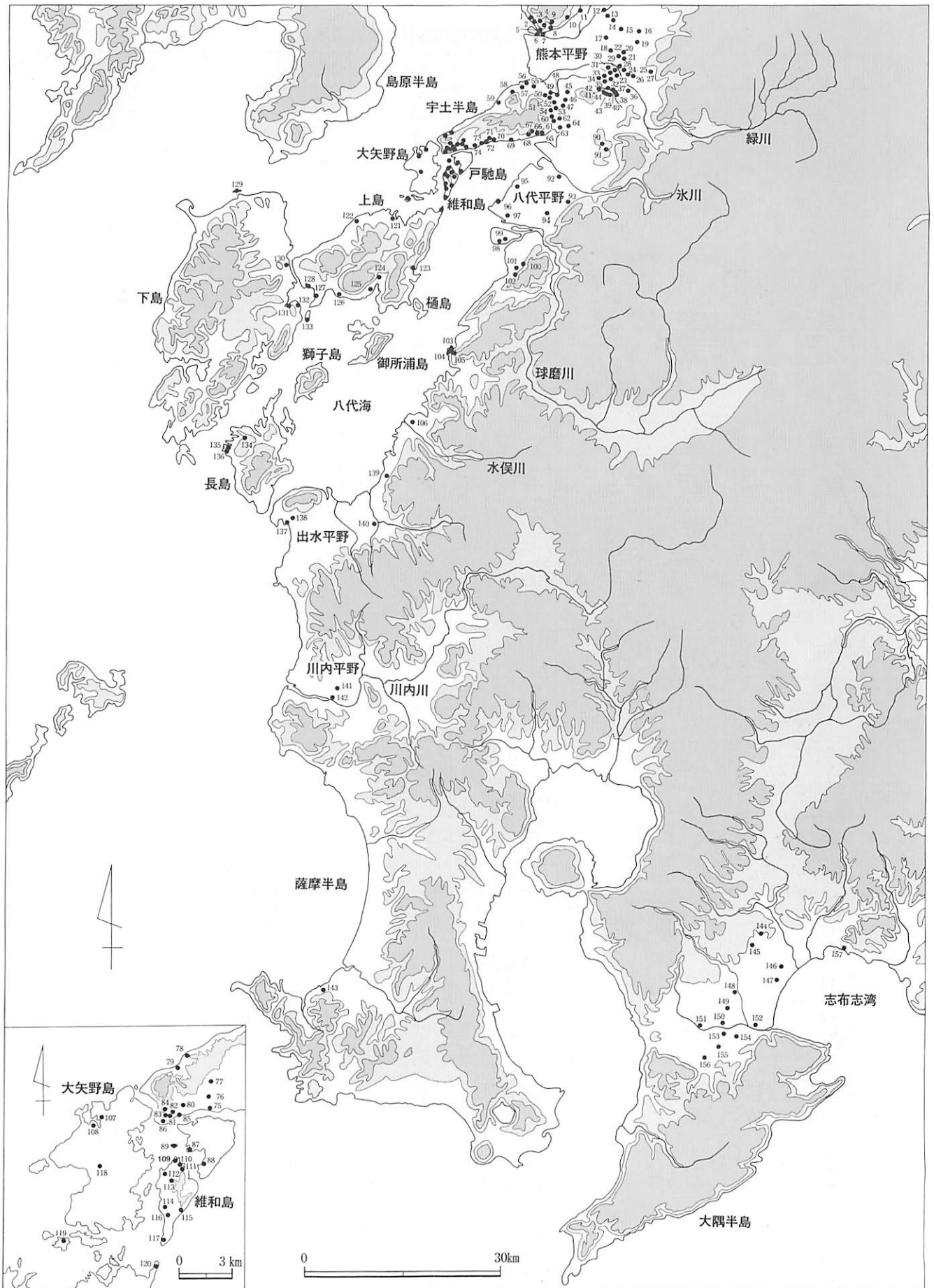


第1図 千崎古墳群の位置



- | | | |
|-----------------|---------------|----------------|
| 1 洲の上貝塚 | 33 田端横穴群 | 65 仙十瀬長瀬古墳 2 号 |
| 2 オサキ古墳 | 34 寺島箱式石棺墓群 | 66 和田島遺跡 |
| 3 くのさご貝塚 | 35 小崎貝塚 | 67 越路北古墳 |
| 4 金術古墳群 | 36 浜の洲貝塚 | 68 越路南古墳 |
| 5 鬼塚古墳 | 37 道の峯貝塚 | 69 小瀬戸遺跡 |
| 6 古氷貝塚 | 38 辺田遺跡 | 70 北ヶ島古墳 |
| 7 塩田浦製塩遺跡 | 39 大崎箱式石棺墓群 | 71 長砂連古墳 |
| 8 うすくぼ遺跡 | 40 辺田貝塚 | 72 貝場遺跡 |
| 9 際崎古墳群 | 41 犬飼横穴群 | 73 大鷲浦古墳 |
| 10 陣の内 A 遺跡 | 42 犬飼海岸遺跡 | 74 小泊遺跡 |
| 11 陣の内遺跡 | 43 小波戸遺跡 | 75 満越遺跡 |
| 12 際崎貝塚 | 44 江樋戸遺跡 | 76 五杷浦遺跡 |
| 13 越路古墳群 | 45 大湯遺跡 | 77 終が浦古墳群 |
| 14 黒崎石棺 | 46 千崎古墳群 | 78 西小柳古墳 |
| 15 三角船員保険保養所内石棺 | 47 丸子島古墳 | 79 柳の石棺 |
| 16 重盛山古墳群 | 48 犬櫓遺跡 | 80 柳貝塚 |
| 17 三角小学校内石棺 | 49 千崎住吉祠古墳 | 81 小柳遺跡 |
| 18 際崎窯跡遺跡 | 50 桐ノ木墓地古墳 | 82 前原遺跡 |
| 19 陣の内 B 遺跡 | 51 桐ノ木尾ばね古墳 | 83 白須古墳 |
| 20 島崎古墳群 | 52 梅ノ木遺跡 | 84 上大戸古墳 |
| 21 磯山古墳群 | 53 梅ノ木貝塚 | 85 広浦古墳 |
| 22 成合津遺跡 | 54 治郎田遺跡 | 86 永浦支石墓 |
| 23 成合津古墳群 | 55 禿島遺跡 | 87 もへ山古墳 |
| 24 女鹿串古墳群 | 56 浮無田北古墳 | 88 カミノハナ古墳群 |
| 25 田井の浦古墳 | 57 浮牟田南古墳 | 89 瀬崎古墳群 |
| 26 鬼塚古墳 | 58 荒木浜遺跡 | 90 樋合島塚大明神古墳 |
| 27 串遺跡 | 59 野牛島遺跡 | 91 樋合島遺跡 |
| 28 賤之女遺跡 | 60 弓田貝塚 | 92 梅ノ木古墳群 |
| 29 諏訪原横穴 | 61 弓田古墳 | 93 山見古墳 |
| 30 鬼塚原遺跡 | 62 野米貝塚 | 94 保ヶ島古墳 |
| 31 鬼塚古墳 | 63 野米遺跡 | |
| 32 鳩之釜遺跡 | 64 仙十長瀬古墳 1 号 | |

第 2 図 大矢野島・和和島周辺の遺跡分布図（アミは標高20m以上を示す。）



第3図 熊本県・鹿児島県所在の箱式石棺を有する古墳分布図

(拡大図は千崎古墳群周辺を示す。アミは標高100m以上および200m以上を示す。番号は第1～4表に対応する。)

第1表 熊本県所在の箱式石棺を有する古墳地名表(1)

No.	遺跡名	所在地	墳丘	石材	床面	小口 ¹⁾	石壁 ²⁾	長方形 ³⁾	加工 ⁴⁾	副葬品・出土遺物	備考	文献
1	小林2号石棺	熊本市松尾橋洞				H	重B	複	×	鉄剣	小林石棺群	7
	小林3号石棺					H		複	×	鉄剣、刀子	小林石棺群	7
	小林4号石棺										小林石棺群、破壊	7
2	二本松古墳群	熊本市上高橋		安山岩								1
3	西竹洞石棺	熊本市上松尾西竹洞										1
4	松尾島石棺群	熊本市上松尾										1
5	要江石棺群	熊本市上松尾湯ノ谷										1
6	高城山古墳群	熊本市小島町高城山	円墳	安山岩							人骨1体、消滅	7
7	檜崎山古墳4号墳	熊本市小島町榎現平	円墳								檜崎山古墳群、赤色顔料塗布	7
	檜崎山古墳1号石棺					H		単	×	鉄剣、直刀、刀子	檜崎山古墳群、赤色顔料塗布	7
	檜崎山古墳2号石棺										檜崎山古墳群	7
	檜崎山古墳3号石棺										檜崎山古墳群	7
8	高橋稲荷石棺群	熊本市城山上代町無田脇								滑石製勾玉、内行花文鏡		7
9	城山古墳群	熊本市高橋町										7
10	花岡山石棺群7号石棺	熊本市花岡山		安山岩	板石	H	重A	複		土師器、碧玉製勾玉、碧玉製管玉、ガラス玉	人骨2体	7
11	名義尾塚古墳	熊本市清水町高平打出屋敷	○									1
12	中牧郷石棺	熊本市竜田町中牧郷		凝灰岩				複	×			1
13	陣内石棺	熊本市水源一丁目								方格規矩鏡	赤色顔料塗布	7
14	広木遺跡	熊本市水源一丁目				H	重B	複	×		人骨1体	7
15	若殿塚遺跡	熊本市竜田町弓削										1
16	中山石棺	熊本市小山町中山		安山岩								1
17	木原石棺	下益城郡富合町木原										1
18	宮の本遺跡	上益城郡嘉島町下六嘉宮の本										1
19	上陳遺跡	上益城郡益城町上陳										1
20	飯田溝石棺	上益城郡益城町北甘木飯田溝										1
21	塔ノ木遺跡	上益城郡嘉島町塔ノ木豆坂										1
22	上官塚遺跡	上益城郡嘉島町井寺上官塚										1
23	剣原遺跡	上益城郡嘉島町北甘木剣原								鉄剣、刀子		1
24	豊秋石棺群	上益城郡嘉島町豊秋										1
25	久保遺跡	上益城郡御船町秋久保		安山岩						剣、刀子、管玉、貝類		1
26	秋只古墳群	上益城郡御船町小坂久保ほか										2
27	木倉西原石棺	上益城郡御船町木倉西原										1
28	城塚石棺	上益城郡御船町豊秋東原								刀子		1
29	迫甲古墳	下益城郡城南町坂野迫										1
30	迫乙古墳	下益城郡城南町坂野迫										1
31	東天神原乙古墳	下益城郡城南町坂野東天神原										2
32	東天神原丙古墳	下益城郡城南町坂野東天神原								土製管玉、土師		1
33	橋口石棺	下益城郡城南町宮地橋口										1
34	城ノ鼻古墳	下益城郡城南町隈庄古城										1
35	上の山石棺	下益城郡城南町隈庄上の山										1
36	大塚山西古墳	下益城郡城南町坂野東天神原	○							須恵器、直刀、刀子、鉄鏃		1
37	岸甲古墳	下益城郡城南町東阿高岸	○							剣、貝類		1
38	岸乙古墳	下益城郡城南町東阿高岸										1
39	影熊石棺	下益城郡城南町阿高影熊	○									1
40	丸山古墳	下益城郡城南町塚原丸山		凝灰岩								1
41	塚原石棺	下益城郡城南町塚原北原		凝灰岩						鉄剣、鉄刀、鉄鏃、鉄鏃		1
42	北原甲古墳	下益城郡城南町塚原北原	○									1
43	北原乙古墳	下益城郡城南町塚原北原										1
44	丸尾古墳	下益城郡城南町塚原丸尾								鉄剣		1
45	檜崎古墳5号石棺	宇土市花園檜崎	前方後円墳			H	平	複				6
46	城ノ越古墳	宇土市栗崎町城ノ越	○								板石の一部残存	10
47	西潤野古墳	宇土市立岡西潤野				H	平	複				6
48	境目1号石棺	宇土市境目西原			粘土床(赤色顔料)	H	重A	複	×	鉄鏃	境目石棺群人骨1体	10
	境目2号石棺				粘土床(赤色顔料)	H	重A	複	×		境目石棺群人骨2体	10
	境目3号石棺				粘土床(赤色顔料)	H	重A	複	×		境目石棺群	10
	境目4号石棺				粘土床	H	重A	複	×		境目石棺群	10
	境目5号石棺				粘土床(赤色顔料)						境目石棺群	10
	境目6号石棺				粘土床(赤色顔料)	口	重A	複	×		境目石棺群人骨3体	10
	境目8号石棺				割石(赤色顔料)	H	重A	複	×		境目石棺群	10
49	古保里1号石棺	宇土市古保里町南五器田		安山岩				複	×		古保里箱式石棺群	10
	古保里2号石棺			砂岩	粘土床			複	×	短剣、鉈、硬玉製勾玉、珠文鏡	古保里箱式石棺群	10
	古保里3号石棺			安山岩	粘土床	H	重B	複	×	鉄剣、鉄鏃、鉈	古保里箱式石棺群人骨3体	10
50	西岡台遺跡	宇土市神馬町千疊敷				口	重A	複				10
51	平原石棺	宇土市境目平原										1
52	上松山遺跡4号方形周溝墓	宇土市松山町居屋敷										1
53	南山内1号石棺	宇土市松山南山内		安山岩	粘土床	口		複	×		南山内箱式石棺群	6

第2表 熊本県所在の箱式石棺を有する古墳地名表(2)

No.	遺跡名	所在地	墳丘	石材	床面	小口 ¹⁾	石壁 ²⁾	長岡石 ³⁾	加工 ⁴⁾	副葬品・出土遺物	備考	文献
53	南山内2号石棺	宇土市松山南山内		安山岩	粘土床	H	重A	複	×		南山内箱式石棺群	6
	南山内3号石棺			安山岩	粘土床	口	平	複	×	鉄製刀子	南山内箱式石棺群	6
54	久保2号墳	宇土市伊無田町北受	円墳									10
55	梅崎箱式石棺群	宇土市箕原町梅崎										10
56	小部田石棺	宇土市住吉町堤上										10
57	御殿山箱式石棺	宇土市笠岩堤の上										2
58	長浜1号石棺	宇土市長浜牧の道				H	平	複	×		長浜箱式石棺群	10
	長浜2号石棺					H	平	複	×		長浜箱式石棺群	10
59	マブシ1号石棺	宇土市下綱田堀屋			礫床 (赤色顔料)						マブシ古墳群 人骨片	10
	マブシ2号石棺			砂岩	礫床 (赤色顔料)	H	平	複	○	鉄鍬	マブシ古墳群	10
	マブシ4号石棺										マブシ古墳群	10
	マブシ6号石棺										マブシ古墳群	10
60	八久保古墳	宇城市不知火町長崎八久保	○	砂岩						直刀		3
61	十五社石棺	宇城市不知火町十五社										2
62	御領石棺	宇城市不知火町御領御手洗										2
63	東塩屋浦古墳	宇城市不知火町東塩屋浦		砂岩						直刀	人骨、二段床	3
64	久具古墳	宇城市松橋町久具										2
65	弁天山石棺	宇城市不知火町御領出町長崎弁天山										3
66	二本松石棺	宇城市不知火町御領二本松										3
67	於呂口東箱式石棺	宇城市不知火町永尾東		砂岩								3
68	於呂口西箱式石棺	宇城市不知火町永尾		砂岩								3
69	大見観音崎古墳	宇城市不知火町大見観音崎		凝灰岩	粘土床	H		単	○		赤色顔料塗布 蓋に把手	3
70	要3号石棺	宇城市三角町大口		砂岩	礫床						要古墳群	8
	要4号石棺			凝灰岩	礫床	H	平	複	×	刀子	要古墳群 赤色顔料塗布	8
	要5号石棺			砂岩				複	×	碧玉製管玉	要古墳群 赤色顔料塗布	8
71	大口地神社石棺	宇城市三角町大口										1
72	底江崎古墳	宇城市三角町御船		砂岩		H	平	複	○		人骨	8
73	御船石棺群	宇城市三角町御船										8
74	西木浦古墳群	宇城市三角町前越西木浦										8
75	子鹿里石棺	宇城市三角町新地子鹿里										8
76	金術古墳群1号墳	宇城市三角町中村前田		砂岩						直刀	人骨5体	8
77	平松1号墳	宇城市三角町波多平松	円墳		粘土床					鉄剣	平松古墳群	8
	平松2号墳		円墳	砂岩				複	×	土師器	平松古墳群	8
	平松1号石棺			砂岩				複	×	長剣	平松古墳群	8
	平松2号石棺			砂岩	粘土床			複	×	鉄片	平松古墳群	8
	平松3号石棺			砂岩		口	平	複	×	長剣、短剣、玻璃小玉	平松古墳群	8
	平松4号石棺			砂岩				複	×	短剣、玻璃小玉	平松古墳群	8
	平松5号石棺			砂岩				複	×	土師器片	平松古墳群	8
	平松6号石棺			頁岩				複	×		平松古墳群	8
	平松7号石棺			砂岩		H	平	複	○	短剣、鉄鍬、貝銅	平松古墳群 装飾文様	8
	平松8号石棺			砂岩						鉄鍬、鉄剣	平松古墳群	8
	平松9号石棺			砂岩						玻璃小玉	平松古墳群	8
	平松12号石棺			砂岩				複	×		平松古墳群	8
	平松14号石棺			砂岩				複	×	孔雀石製管玉	平松古墳群	8
78	矢耆石棺	宇城市三角町太田尾矢耆									消滅	8
79	塚神社石棺	宇城市三角町太田尾										1
80	陳内古墳群3号墳	宇城市三角町		砂岩								8
81	三角船員保険保養所内石棺	宇城市三角町際崎										1
82	重盛山石棺	宇城市三角町波多重盛山										8
83	三角小学校石棺	宇城市三角町本町										1
84	際崎石棺	宇城市三角町波多・際崎・磯山										8
85	越路古墳群	宇城市三角町際崎										8
86	磯山A号石棺	宇城市三角町志水		砂岩		H	平	複			磯山古墳群	8
	磯山B号石棺			砂岩		H	平	複	○	鉄刀、筒形銅器	磯山古墳群	8
87	大崎箱式石棺墓	宇城市三角町戸馳島内沼		安山岩								8
88	丸子島石棺群	宇城市三角町片島										1
89	寺島古墳群5号箱式石棺	宇城市三角町寺島		砂岩	石灰床	H	重B	複	○	鉄剣	人骨 ノミによる整形痕	8
90	豊原箱式石棺墓	宇城市豊野町南崎豊原								土師器完形品		2
91	下郷・北原石棺	宇城市豊野町下郷北原										2
92	室の山古墳	八代郡永川町今	○	砂岩						鉄剣、刀子、鉄鍬、鉄 斧、鏃、鉈		1
93	飛石石棺	八代郡永川町大野飛石		砂岩								1
94	用七古墳	八代市長田町用七	○							刀子		2
95	産島1号墳	八代市古閑浜町産島									産島古墳群、人骨	2
	産島2号墳										産島古墳群	2
	産島3号墳										産島古墳群、人骨	2
96	大島古墳	八代市大島町前鼻	○							直刀		2
97	高島古墳	八代市高島町高島	○									2
98	大泉蔵古墳群南東	八代市泉蔵町大島辺									大泉蔵古墳群	2
	大泉蔵南東1号墳										大泉蔵古墳群	2
	大泉蔵南東2号墳									土師器	大泉蔵古墳群 人骨5体	2
	大泉蔵南東6号墳									鉄鍬、刀子	大泉蔵古墳群 人骨	2

第3表 熊本県所在の箱式石棺を有する古墳地名表(3)

No.	遺跡名	所在地	墳丘	石材	床面	小口*	石壁き**	長御石数**	加工**	副葬品・出土遺物	備考	文献
98	大鼠蔵古墳群北東	八代市鼠蔵町大島辺									大鼠蔵古墳群	2
	大鼠蔵北東1号墳										大鼠蔵古墳群	2
	大鼠蔵北東2号墳										大鼠蔵古墳群	2
	大鼠蔵北東3号墳										大鼠蔵古墳群	2
	大鼠蔵古墳群北西										大鼠蔵古墳群	2
	大鼠蔵1号墳北西										大鼠蔵古墳群	2
	大鼠蔵2号墳北西								土師器		大鼠蔵古墳群	2
	大鼠蔵3号墳北西										大鼠蔵古墳群	2
	大鼠蔵4号墳北西										大鼠蔵古墳群	2
99	小鼠蔵山1号墳	八代市鼠蔵町小島辺									小鼠蔵山古墳群	2
	小鼠蔵山2号墳										小鼠蔵山古墳群	2
	小鼠蔵山3号墳										小鼠蔵山古墳群	2
	小鼠蔵山4号墳										小鼠蔵山古墳群	2
	小鼠蔵山5号墳								土師器		小鼠蔵山古墳群	2
100	塩釜山古墳群第2号墳	八代市日奈久大坪町塩釜上										2
101	田ノ川内2号墳	八代市日奈久新田町田川内									田ノ川内古墳群 円形刻文	2
	田ノ川内3号墳										田ノ川内古墳群 円形刻文	2
102	竹ノ内古墳	八代市日奈久町竹ノ内町										2
103	鬼塚古墳	葦北郡芦北町海浦堂本										2
104	太田古墳	葦北郡芦北町田浦太田										2
105	セベツ古墳群	葦北郡芦北町海浦京泊										2
106	北園石棺	水俣市陳内町北園								剣、鉄鏃、刀子		2
107	成合津2号墳	上天草市大矢野町成合津		砂岩			重B	複	×		成合津古墳	4
108	女鹿串古墳	上天草市大矢野町女鹿串									土中埋没	4
109	千崎古墳8号墳	上天草市大矢野町維和千崎		砂岩		H	カギ状	複	○		千崎古墳群	9
	千崎古墳9号墳			砂岩		H	カギ状	複	○		千崎古墳群	9
	千崎古墳10号墳			砂岩		H	カギ状?	複	○?		千崎古墳群 人骨4体	9
	千崎古墳13号墳			砂岩		H	カギ状	複	○	鉄剣、刀子、ガラス小玉		9
	千崎古墳15号墳			砂岩		H	重A	複	○		千崎古墳群	9
	千崎古墳16号墳			砂岩		H					千崎古墳群	9
	千崎古墳17号墳			砂岩							千崎古墳群	9
	千崎古墳20号墳			砂岩				複	○		千崎古墳群	9
	千崎古墳21号墳			砂岩							千崎古墳群	9
	千崎古墳22号墳			砂岩		北:コ 南:H		単	○		千崎古墳群	9
	千崎古墳25号墳			砂岩				複	×		千崎古墳群	9
	千崎古墳26号墳			砂岩		北:H 南:井		複	×		千崎古墳群	9
110	千崎住吉祠古墳	上天草市大矢野町維和千崎						複	×			2
111	棚ノ木墓地古墳	上天草市大矢野町維和棚ノ木		砂岩					×		板石露出	2
112	浮無田北古墳	上天草市大矢野町維和浮無田		砂岩							蓋・板石露出	2
113	浮無田南古墳	上天草市大矢野町維和浮無田		砂岩					×			2
114	仙十長瀬古墳1号	上天草市大矢野町維和仙十									蓋露出	2
115	越路北古墳	上天草市大矢野町維和越路		砂岩		H	平	複			赤色顔料塗布 土中埋没	4
116	大鷲浦古墳	上天草市大矢野町維和大鷲浦		砂岩						鉄刀	破壊	2
117	広浦古墳	上天草市大矢野町千束広浦	円墳	砂岩							板石に装飾	5
118	一本松古墳	上天草市大矢野町新田		砂岩		H	平	複	×			9
119	樋合島塚大明神古墳	上天草市松島町合津樋合島										2
120	大戸鼻古墳群1号墳	上天草市松島町阿村大戸鼻・小葉山								勾玉		2
	大戸鼻古墳群2号墳					H	重A	複				2
121	新地石棺	天草市有明町										1
123	竹島古墳	天草市有明町竹島										4
124	名瀬石棺墓群	天草市倉岳町名瀬										1
125	宮崎古墳群(宮崎石棺群)	天草市倉岳町棚底宮崎一五社宮上		砂岩						土師器、鉄剣、鉄鏃		1
126	稚見崎古墳群	天草市橋本町稚見崎瀬崎										4
127	先尾串古墳群	天草市下浦町先尾串										2
128	尾串古墳群	天草市下浦竹島										1
129	通詞島北古墳	天草市五和町二江島頭										5
130	妻の鼻古墳群	天草市亀川妻の鼻									箱式石棺?	2
131	樫ノ浦古墳群	天草市新和町上大多尾										2
132	天附古墳群	天草市新和町大多尾天附										2
133	横島金比羅古墳	天草市新和町横島										2
134	梅六古墳	天草市有明町下津浦梅六										1

※1「H」はH字形タイプ、「II」はII字形タイプ、「ロ」はロ字形タイプ、「コ」はコ字形タイプ、「井」は井桁状タイプを示す。

※2「平」は平壁、「重A」は重ね壁A、「重B」は重ね壁Bを示す。

※3「単」は長御石1枚タイプ、「複」は複数枚タイプを示す。

※4「加工」は石棺材を組み合わせたための加工の有無を示す。

参考文献

- 岩崎光宏編 1990『宮崎石棺墓群』宮崎石棺墓群調査団
- 熊本県教育委員会 1998『熊本県遺跡地図』熊本県教育委員会
- 坂本純純 1972『古墳時代』『不知火町史』不知火町
- 坂本純純・坂本純昌 1971『天草の古代』私家版
- 島津義昭 1987『古墳時代』『松島町史』松島町
- 富樫卯三郎・高木恭二・木下洋介 1987『古墳解説』『宇土半島基部古墳群』宇土市教育委員会
- 松本健郎・網田龍生・美濃口雅明 1996『古墳時代』『新熊本市史』史料編第1巻 考古資料 熊本市
- 三角町史編纂協議会専門委員会編 1987『古墳時代』『三角町史』三角町
- 森幸一郎編 2005『千崎古墳群第2次・第3次調査』『上天草市史大矢野町編資料集』1 上天草市
- 古城史雄・高木恭二・木下洋介・杉井健・藤本貴仁・中原幹彦 2002『古墳時代』『新宇土市史』資料編第2巻 考古資料・金石文・建築物・民俗 宇土市

第4表 鹿児島県所在の箱式石棺を有する古墳地名表

No.	遺跡名	所在地	墳丘	石材	床面	小口 ^{※1}	石継ぎ ^{※2}	長岡石数 ^{※3}	加工 ^{※4}	副葬品・出土遺物	備考	文献
135	立神遺跡	出水郡長島町平尾萩之牟礼								土師器		2
136	明神下岡遺跡	出水郡長島町明神								土師器、須恵器、鉄剣、鉄片		1
137	鬼塚古墳	出水郡長島町蔵ノ元鬼塚									小浜崎古墳群 石室上左右に2基の箱式石棺	4
138	新田ヶ丘古墳4号墳	阿久根市臨本新田ヶ丘		砂岩	粘土床	Ⅱ	重B	複	×	刀子、鉄鏃	臨本古墳群	1
	糸洞瀬古墳1号墳	阿久根市臨本新田ヶ丘			粘土床	H		複	×	鉄剣、刀子、鉄鏃	臨本古墳群	1
	糸洞瀬古墳2号墳			安山岩	粘土床					直刀、鉄鏃	臨本古墳群	1
139	切通遺跡	出水市境町切通										4
140	成願寺古墳	出水市中央町八坊								土師器、須恵器		4
141	横岡古墳	薩摩川内市上川内町釜口								土師器、須恵器、鉄剣、小刀、蛇行剣、刀子、鉄鏃、銅製品	箱式石棺?	4
142	若宮古墳	薩摩川内市五代町若宮										4
143	奥山(六堂会)古墳	南さつま市小湊奥山	円墳	外:凝灰岩 内:安山岩	赤色土	H	重B	複	○	土師器、鉄剣、刀子、ガラス玉		8
144	岩屋古墳群	志布志市野神河内・井出元	円墳									4
145	原田地下式横穴	志布志市原田大塚		軽石	軽石屑	口	平	複	×	刀子	人骨	2
146	飯隈地下式横穴1号	曾於郡大崎町飯隈								刀子		2
	飯隈地下式横穴4号											2
147	神領6号墳	曾於郡大崎町神領	前方後円墳	花崗岩						鉄剣、鉄刀	神領古墳群	3
	神領8号墳		○	軽石							神領古墳群	3
	神領古墳天子岡土14号墳		○	軽石							神領古墳群	3
148	岡崎13号墳	鹿屋市串良町岡崎北田上	円墳								岡崎古墳群	4
	岡崎15号墳		前方後円墳	花崗岩						土師器、鉄剣、勾玉、管玉、長方板革綴短甲、頸甲片、肩甲片	岡崎古墳群	4
	岡崎18号墳1号地下式横穴			花崗岩		H	重A	複	×	鉄剣、刀子、鉄斧、鐏子、鉄鋌、U字形鉄鋤先、ガラス玉	岡崎古墳群	9
	岡崎18号墳2号地下式横穴			花崗岩		H	重B	複	×	鉄剣、刀子、鉄斧、方形鉄鋤先、イモガイ製腕輪	岡崎古墳群	9
149	フノ山地下式横穴	鹿屋市串良町下小原白寒水								直刀		6
150	上小原1号墳	鹿屋市串良町上小原下方限瀬戸	円墳	軽石							上小原古墳群	6
	上小原3号墳			軽石	軽石粘土床						上小原古墳群	6
	上小原9号墳		円墳								上小原古墳群、散在	6
151	天神原地下式横穴1号	鹿屋市吾平町下名川北天神原			粘土床	口	平	複	×	刀子	人骨	7
152	唐仁10号墳	肝属郡東串良町新川西小村	円墳	軽石							唐仁古墳群	4
	唐仁28号墳		円墳	軽石							唐仁古墳群	4
	唐仁66号墳	肝属郡東串良町新川小村	円墳	軽石							唐仁古墳群	4
	唐仁67号墳		円墳								唐仁古墳群、露出	4
	唐仁76号墳		円墳								唐仁古墳群、露出	4
	唐仁93号墳	肝属郡東串良町大塚	円墳								唐仁古墳群、散在	4
	唐仁116号墳	肝属郡東串良町新地後	円墳								唐仁古墳群	4
	唐仁130号墳	肝属郡東串良町惣の下	円墳								唐仁古墳群、石棺片	4
153	上ノ原古墳	肝属郡肝付町前田上ノ原	円墳	凝灰岩						鉄剣、直刀、刀子、鉄斧、佑製鏡	朱塗り	4
	上ノ原地下式横穴11号				軽石屑	口	平	複		土師器、刀子		3
154	横岡古墳群1号	肝属郡肝付町新富	円墳	軽石		口	平	複	×	土師器、刀子		3
155	北後田古地下式横穴1号	肝属郡肝付町後田検見崎		軽石		口	平	複	×	鉄剣、刀子、鉄鏃、鉄斧		2
156	宮ノ上地下式横穴10号	鹿屋市吾平町宮ノ上			粘土床	口	平	複	×	直刀、鉄鏃、鉾	宮ノ上地下式横穴群、人骨	2
	宮ノ上地下式横穴11号				軽石屑	口	平	複	×	鉄鏃	宮ノ上地下式横穴群、人骨	2
157	夏井古墳	志布志市夏井堀内										4

※1 「H」はH字形タイプ、「Ⅱ」はⅡ字形タイプ、「口」は口字形タイプ、「コ」はコ字形タイプを示す。

※2 「平」は平継ぎ、「重A」は重ね継ぎA、「重B」は重ね継ぎBを示す。

※3 「単」は長岡石1枚タイプ、「複」は複数枚タイプを示す。

※4 「加工」は石棺材を組み合わせるための加工の有無を示す。

参考文献

- 1 池水寛治 1982『長島の古墳』長島町教育委員会
- 2 大西智和・川口雅之・中村耕治・中村直子・榎渡将太郎・松本信光編 2001『薩摩・大隈の地下式横穴墓』『九州の横穴墓と地下式横穴墓』第Ⅱ分冊 九州前方後円墳研究会
- 3 鹿児島県教育委員会編 2005『先史・古代の鹿児島』鹿児島県教育委員会
- 4 鹿児島県埋蔵文化財情報データベース (<http://www2.jomon-no-mori.jp/gis/>)
- 5 立神次郎・中村耕治編 1980『大隈地区埋蔵文化財分布調査概報』鹿児島県教育委員会
- 6 出口浩・立神次郎・池畑耕一・中村耕治編 1977『大隈地区埋蔵文化財分布調査概報』鹿児島県教育委員会
- 7 中村耕治編 1989『天神原地下式横穴群』吾平町教育委員会
- 8 橋本達也 2005『加世田市「六堂会」古墳の調査』鹿児島県考古学会研究発表会資料 鹿児島県考古学会
- 9 橋本達也編 2005『大隅串良岡崎古墳群』鹿児島大学総合研究博物館

するものは少なく、石棺の構造は不明なものが多い。

宇土半島基
部地域

宇土半島基部地域で箱式石棺を有する古墳の多くは丘陵上に位置している。墳丘を有するものは少ない。石棺材には安山岩を用いるものが大半である。小口の構造はH字形タイプが多く、次いでⅡ字形タイプがみられる。長側石の継ぎ方には重ね継ぎと平継ぎがあり、両タイプともほぼ同じ割合で存在する。長側石1枚タイプの箱式石棺は確認されていない。また当地域では、境目石棺群（48）や南山内箱式石棺群（53）などのように複数の箱式石棺がまとまり、集団墓を形成している例が多い。

宇土半島

宇土半島で箱式石棺を有する古墳の多くは、海岸付近の丘陵上に位置している。当地域においても墳丘を有するものは少ない。石棺材には砂岩が多く用いられている。小口の構造はH字形タイプが多く、長側石は平継ぎのものが多い。また、当地域の箱式石棺には、非常に丁寧な加工や細工が施されているという特徴がある。このことから、当地域の箱式石棺製作に関わった工人は、高い技術をもっていたと考えられる。また、複数の箱式石棺がまとまり、集団墓を形成している例が多い。

八代周辺地
域

八代周辺地域で箱式石棺を有する古墳は、八代海に面した丘陵上に位置している。墳丘を有するものは少なく、石棺の構造は不明なものが多い。しかし、複数の箱式石棺がまとまり、集団墓を形成しているものが多い。

水俣地域

水俣地域で箱式石棺を有する古墳は、前述した水俣川流域にある北園石棺（106）の1例のみである。箱式石棺の構造は不明である。

天草諸島

天草諸島で箱式石棺を有する古墳は、海岸付近の丘陵上、とりわけ八代海側に位置している。その中でも特に、千崎古墳群（109）の位置する維和島に古墳の多くが分布している。墳丘を有する古墳は少ない。石棺材には砂岩が多く用いられている。当地域の箱式石棺には、宇土半島と同じように石材に加工を施したものが多い。例えば、千崎古墳群の箱式石棺は、長側石の継ぎ目をカギ状に加工することによって石材同士をより密に組み合わせている（森編2005）。また、千崎22号墳の箱式石棺は、長側石1枚タイプである。このように、天草諸島の箱式石棺は、高度な技術によって製作されたものが多い。また、複数の箱式石棺がまとまり、集団墓を形成しているものが多い。

熊本県所在
箱式石棺

以上のことから、熊本平野以南に分布する箱式石棺についてまとめておく。まず、箱式石棺を有する古墳は、大半が見晴らしのよい丘陵上に位置し、八代海側に面した所では沿岸部付近の丘陵上に位置する。また、集団墓が多く存在する。墳丘を有する古墳の主体部に箱式石棺が用いられている割合は少なく、全体の1割程度である。石材は沿岸部では砂岩を、内陸部では安山岩を使用する傾向がある。小口の構造はほぼH字形タイプである。長側石は複数枚タイプが主流で、1枚タイプは少ない。長側石複数枚タイプの継ぎ方には、平継ぎと重ね継ぎが多くみられる。副葬品には、土師器・須恵器のほか、鏡、剣・刀子・鉄鏃・斧・鎌・鉈などの鉄製品、勾玉・管玉・貝釧などの装飾品がある。鏡の出土は少ないが、熊本平野の高橋稻荷石棺群（8）からは内行花文鏡、陣内石棺（13）からは方格規矩鏡が出土している。また、宇土半島西端にある磯山古墳群B号石棺（86）からは筒形銅器が出土している。これは、熊本県唯一の事例であり、注目に値する。筒形銅器は、古墳時代前期後半における奈良盆地北部勢力との密接な関係を示す遺物と考えられ（福永1998）、そのような遺物が首長墓ではなく箱式石棺から出土したことの意味は検討されるべきであろう。

鹿児島県において箱式石棺を有する古墳は熊本県に比べて少なく、長島・薩摩半島北部地域、薩摩半島南部地域、大隅半島地域の3地域に分布する。以下、この3地域の箱式石棺について概観する。

鹿児島県
在箱式石棺
の分布

長島・薩摩半島北部地域で箱式石棺を有する古墳の多くは、海岸付近の丘陵上に分布している。墳丘を有するものは少ない。石棺材には砂岩や安山岩が用いられている。石棺の構造は不明なものが多い。

長島・薩摩
半島北部地
域

薩摩半島南部地域で箱式石棺を有する古墳は奥山（六堂会）古墳（143）のみである。この古墳は丘陵上に位置している。奥山（六堂会）古墳の箱式石棺は、円墳の主体部に用いられている。石棺材は外側石に凝灰岩が、内側石に安山岩が用いられており、非常に特徴的なものである。また、長側石の板石を継ぐために加工が施されている（橋本2005）。

薩摩半島南
部地域

大隅半島地域で箱式石棺を有する古墳の多くは丘陵上に位置している。円墳の主体部に用いられているものが多い。また、当地域の箱式石棺の中には、地下式横穴墓に用いられている例もみられる。石棺材は、大半が軽石である。小口の構造は口字形タイプが主流であり、長側石は平継ぎされるものが多い。

大隅半島

以上のことから、鹿児島県に分布する箱式石棺についてまとめる。長島を含めた薩摩半島にある箱式石棺と大隅半島の箱式石棺には構造上いくつかの相違点がある。まず、使用石材をみると、薩摩半島では安山岩、凝灰岩、砂岩が使用されているのに対し、大隅半島では軽石が多く用いられる。また、大隅半島では墳丘を有する古墳の主体部に箱式石棺が用いられている割合が高いが、薩摩半島では墳丘を伴う箱式石棺は少ない。小口の構造は、大隅半島では口字形タイプが多い。しかし、このタイプは薩摩半島では確認されていない。副葬品では岡崎15号墳（148）が注目される。岡崎15号墳は、近年の調査によって前方後円墳であることが確認された（橋本編2005）。その後円部主体部に箱式石棺が用いられており、長方板革綴短甲・頸甲片・肩甲片などが出土している。これらの副葬品からは、古墳時代中期における大阪平野勢力との密接な関係が推測される。

鹿児島県所
在箱式石棺

熊本県と鹿児島県の箱式石棺を比較すると、薩摩半島地域と熊本平野以南地域の箱式石棺にはいくつかの共通点がみられる。まず、その多くが八代海に面した見晴らしのよい丘陵上に立地する。また、宇土半島や天草諸島、薩摩半島には石材に加工を施して密に組み合わせた箱式石棺が特徴的に分布する。このことは、石棺製作上これらの地域に密接な関係があったことを示している。さらに、長島の新田ヶ丘古墳4号墳（138）では、熊本県と鹿児島県の関連を裏付けるものとして、肥後型横穴式石室に特徴的な石障が確認されている。

熊本県と鹿
児島県の比
較

箱式石棺は墳丘を伴わない古墳に採用されることが多いため、なかなか研究の対象とされない。しかし今後、各地域の箱式石棺を比較し、首長墓やその他の埋葬施設の動向を関連させて検討することによって、古墳時代の社会構造の一端が明らかにされる可能性がある。（高椋）

参考文献

- 岩崎充宏編 1990「箱式石棺分布一覧表」「宮崎石棺墓群」 宮崎石棺墓群調査団：pp.53-57
 鹿児島県教育委員会編 2005「先史・古代の鹿児島」鹿児島県教育委員会
 坂本経堯・坂本経昌 1971「天草の古代」私家版
 清家 章 2001「畿内周辺における箱式石棺の型式と集団」『古代学研究』152 古代学研究會：pp.1-14
 橋本達也 2005「加世田市「六堂会」古墳の調査」『鹿児島県考古学会研究発表会資料』 鹿児島県考古学会：pp.6-7
 橋本達也編 2005「大隅半島 岡崎古墳群」 鹿児島大学総合研究博物館
 福永伸哉 1998「対半島交渉から見た古墳時代倭政権の性格」『青丘学術論集』第12集 （財）韓国文化研究振興財団：pp.7-26
 森幸一郎編 2005「千崎古墳群第2次・第3次調査報告」『上天草市史大矢野町編資料集』1 上天草市：pp.1-38

二 調査経過

1. 過去の調査（第1次～第3次調査）

第1次調査 千崎古墳群に対する初めての調査（第1次調査）は、ほぼ半世紀前の1955年、玉名高等学校考古学部によって実施された。その結果、古墳の分布状況が明らかにされ、また4基の箱式石棺からは鉄剣等の副葬品や人骨が検出された（田辺1955 a・1955 b）。

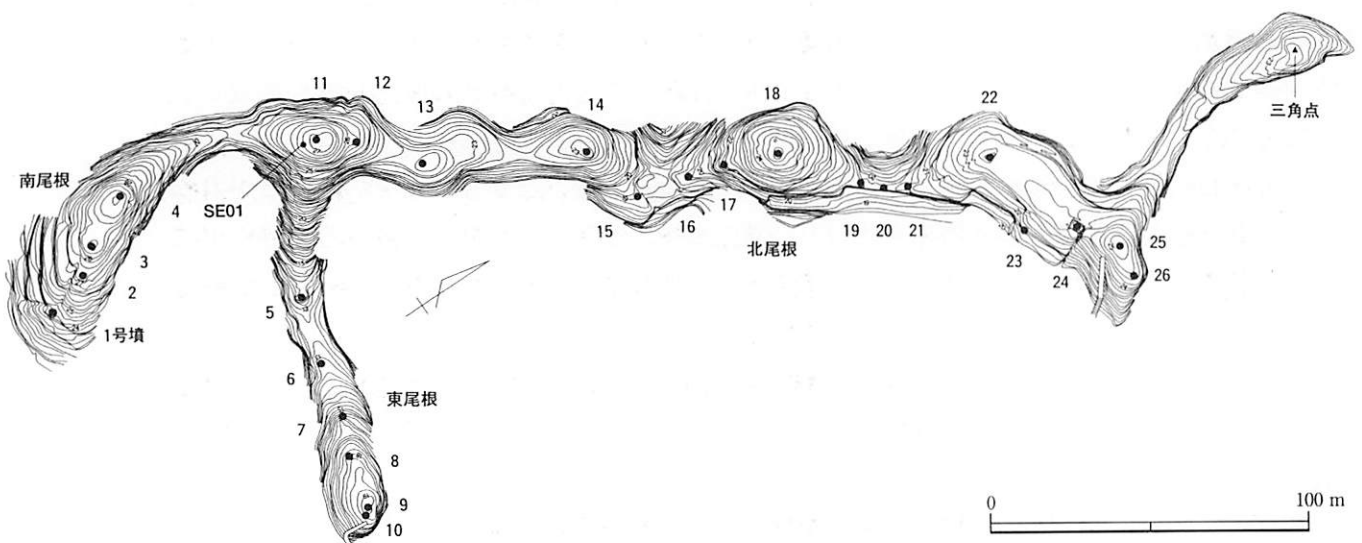
第2次調査 大矢野町（2004年度から上天草市）は2002年度に開始した町史編纂事業の一環として、1955年以来本格的な調査が行われていない千崎古墳群の基礎的資料作成を計画した。そこでまず現状確認調査（2003年4月26日～29日）、および測量調査（2004年3月16日～23日、4月24日～5月1日）を行い、新たな古墳を確認するなどの成果を得た（第2次調査）（第4図）。そして新規に古墳番号を設定し直し、熊本県教育庁に届出を行った（2004年7月22日）（森編2005）。

第3次調査 第3次調査（2004年8月31日～9月16日）では、すべての古墳の現状写真撮影、および露出している箱式石棺の現状実測図作成が行われた。また、積石塚とされている古墳の実体解明を目的に5号墳と6号墳の発掘調査が実施された。その結果、6号墳では徹底的な破壊を受けていることが判明したのみであったが、5号墳では石室下半部が良好に遺存していることが確認された。そのため、積石塚とされてきたものは、破壊された石室石材が散乱した状況を捉えたものと推測された（森編2005）。なお、このときは5号墳の石室を竪穴式石室と判断していたが、第4次調査の結果、ごく狭い羨道をもつ横穴式石室であることが判明した。（杉井）

2. 第4次調査

第4次調査 第3次調査では5号墳の墳丘調査を行っておらず、その石室についても残存部上面までの掘り下げにとどまっていた。また、当古墳群最大規模の7号墳の現状実測図が作成されていなかった。さらに、調査後の整理作業で26号墳の石棺実測図に不備があることが判明した。そこで、5号墳の墳丘・主体部構造の解明、および7号墳・26号墳の現状実測図作成を目的として、第4次調査が実施された。調査期間は2005年9月11日から28日までの18日間である。

実測調査 まず、26号墳では、昨年度設定の測量基準点が使用に耐えることを確認した後、石棺の現状



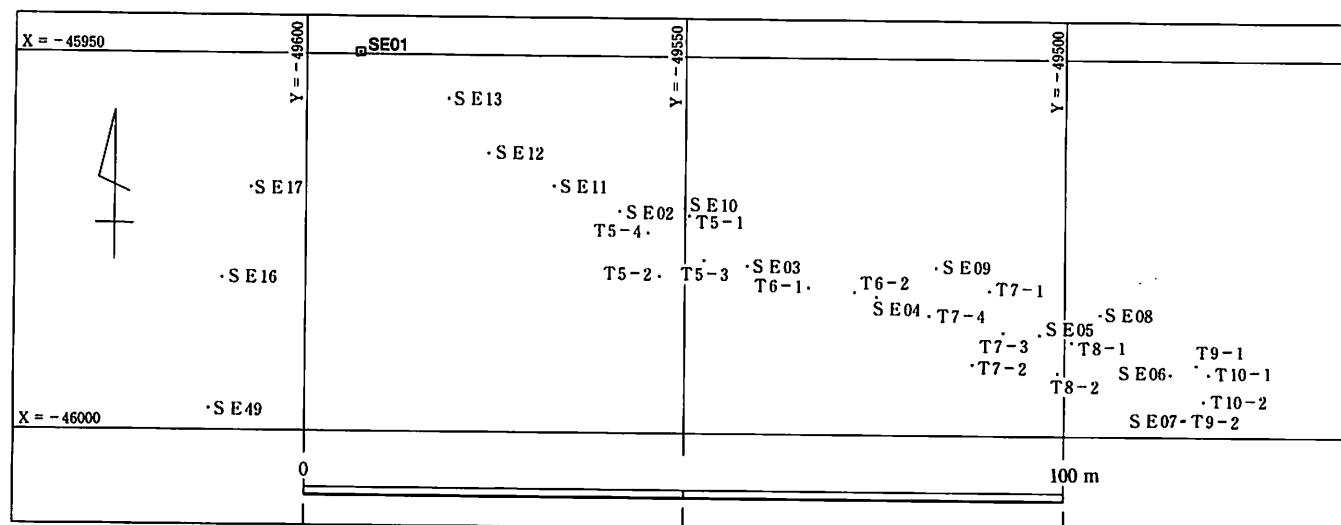
第4図 千崎古墳群の古墳分布図（1／2400）

第5表 2005年設置測量基準点の現場座標

基準点名	X座標 (m)	Y座標 (m)	標高 (m)	備考
SE01	0.000	0.000	26.783	
SE40	312.565	-31.979	23.80	四等三角点汐浜
四等三角点後大潟	-434.134	-1218.440	22.98	
T7-1	16.580	87.434		2005年設置
T7-2	7.092	90.588		〃
T7-3	12.792	91.854		〃
T7-4	9.625	82.364		〃

第6表 2005年設置測量基準点の国土座標

基準点名	X座標 (m)	Y座標 (m)	備考
SE01	-45949.870	-49593.197	
SE40	-45665.753	-49458.995	四等三角点汐浜
四等三角点後大潟	-45691.847	-50860.717	
T7-1	-45980.861	-49509.775	2005年設置
T7-2	-45990.614	-49511.978	〃
T7-3	-45986.388	-49507.949	〃
T7-4	-45984.195	-49517.710	〃



第5図 千崎古墳群東尾根測量基準点の位置関係 (国土座標による)

実測図を作成した。その際、東長側石の外側で墓壙ラインが検出された。また、西長側石南側の石材は、北側の石材と組み合う部分にカギ状加工が施されていることが判明した。他方、7号墳では、新たに測量基準点を設定し (第5・6表、第5図)、石材散布状況図を作成した。このときの観察で、当古墳の主体部は石障をもつ横穴式石室である可能性が指摘された。

5号墳の墳丘調査では、その東西南北4方向にトレンチを設けて掘り下げを行ったところ、西トレンチにおいて墳丘を画すものと思われる溝状遺構を検出した。これに他のトレンチの状況をあわせて判断すると、当古墳は直径約6m程度の円墳であると推定された。一方、主体部調査は、第3次調査の成果をふまえ石室内南東部の埋土除去から開始したが、作業を始めて間もなく、南小口部に横たわる石材が原位置を保っていないことが判明した。そこで、土層観察用の畦を除去し、原位置でない石材を取り除きながら南小口部を精査したところ、そこには幅約28cmのごく狭い羨道が取り付くことが明らかとなった。横穴式石室であったのである。

5号墳発掘調査

千崎古墳群の調査ではその景観を変えないことに留意し、調査に支障がでない限りは原位置でない石材も極力残すという方針を立てていたが、この羨道部分に関しては一定程度の解剖的な発掘調査を行う必要があると判断された。しかし、今回の限られた調査期間の中でそれを行うことは不可能であった。そこで、羨道残存部上面までの掘り下げにとどめ、記録作業を行ったのち、今後の調査再開に備え土嚢を用いて埋め戻した。

なお、9月25日には地元の方々、26日には維和中学校1年生を対象にした現地説明会を開催し、あわせて60名程度の参加者を得ている。

(杉井)

参考文献

- 田辺哲夫 1955 a 「玉名高等学校考古学部の天草郡維和古墳群調査結果について」熊本県立玉名高等学校
 田辺哲夫 1955 b 「天草郡大矢野町維和古墳群調査概要」熊本県立玉名高等学校
 森幸一郎編 2005 「千崎古墳群第2次・第3次調査報告」『上天草市史大矢野町編資料集』1 上天草市：pp. 1-38

三 7号墳・26号墳の構造

第4次調査の成果を述べる前に、千崎古墳群が所在する千崎丘陵について簡単にまとめておく。千崎丘陵は崖下まで含め東西約300m、南北約500mの小規模丘陵であり、11号墳の位置するところから3方向に分岐している。この分岐点を基準として、北東へ伸びる尾根を北尾根、南へ伸びる尾根を南尾根、南東へ伸びる尾根を東尾根と呼称する（第4図）。

さて、昨年度実施した第3次調査では、露出している箱式石棺および5号墳、6号墳の現状を記録するために実測調査を行った。しかし、千崎古墳群の中で最大規模と考えられる7号墳の実測図が作成されておらず、さらに、昨年度の整理作業中、26号墳の箱式石棺実測図に不備がみつきり再実測を必要としていた。そこで、今回の第4次調査では、7号墳、26号墳の実測調査を行った。以下、各古墳の所見を述べる。（前田）

1. 7号墳（第6図、図版1-1）

7号墳は、東尾根東端頂部から西へやや下った傾斜地、8号墳の西12.6mに位置する。現在、7号墳周辺には墳丘西側斜面を中心として直径約5mの範囲に石材が散布している。石材の散布範囲から、7号墳は千崎古墳群最大規模の古墳と考えられる（森編2005）。

今回の調査目的は、石材散布状況を記録することである。現状で推測できる石室の主軸線（T7-1・T7-2ライン）および墳丘中央付近でそれに直交する軸線（T7-3・T7-4ライン）を基準にして実測図を作成した。T7-1・T7-2ラインと方位の関係はN18° Eである。

第6図の石材A・Bは箱式石棺の南小口と考えられていた（森編2005）。しかし、石材A・Bの長さは現状でもあわせて約1mと大きい。また、ピンボールを用いて北小口と考えられる部分の土中を確認したところ、石材Cの東隣に長さ約1.2mの石材が埋まっていることを確認

第7表 千崎古墳群所在箱式石棺の特徴

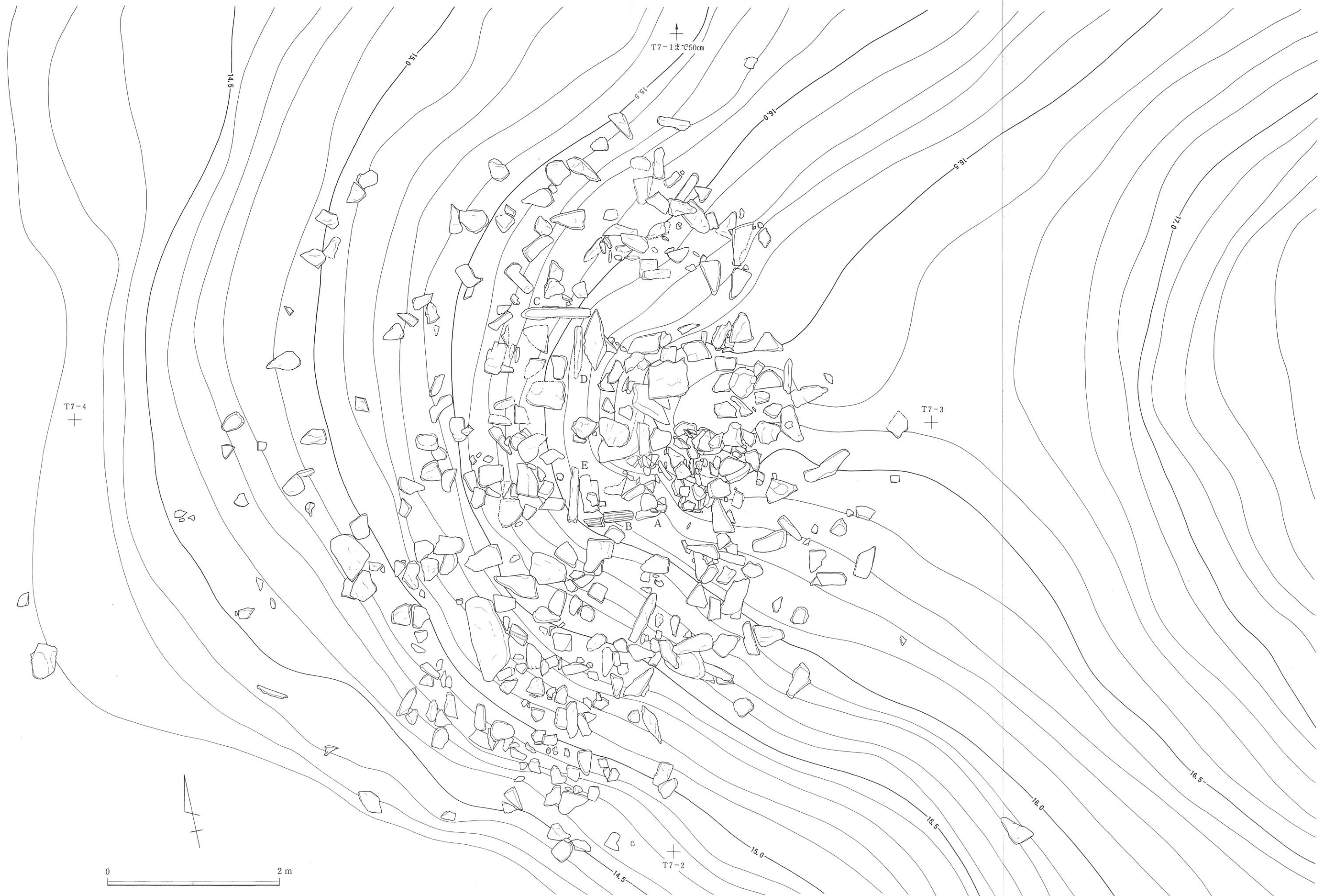
名称	主軸		寸法（内法）（cm）		石材数		小口と長側石の組み合わせ方	長側石*	
	主軸方向	尾根筋との関係	小口* ¹	長さ* ²	小口	長側石		凹状割り込み	2枚の石材の組み合わせ方
8号墳	N22° E	直交	北：65.6 南：60	195	北：1枚 南：1枚	西：2枚 東：1枚	H字形	○	カギ状の加工
9号墳	N11.5° E	直交	北：58 南：54.5	204.5	北：1枚 南：1枚	西：2枚 東：2枚	H字形	○	カギ状の加工
10号墳	N10.5° E	直交	幅：35.5	224.5	北：1枚 南：1枚	西：2枚 東：2枚？	H字形	○？	カギ状の加工？
13号墳	N61.5° W	直交	西：56 東：50	184	西：1枚 東：1枚	北：2枚 南：2枚	H字形	○	カギ状の加工
15号墳	N118.5° W	直交	西：42 東：42	178	西：1枚 東：1枚	北：2枚 南：2枚	H字形	○	重ね継ぎA
16号墳	N96° W	直交	西：70	65	西：1枚	—	H字形	×	—
17号墳	N89.5° W	（直交）	—* ³	—	—	（2枚）	—	—	—
20号墳	N60.5° W	直交	東：40～50	196	—	南：1枚	—	—	—
21号墳	N62.5° W	直交	東：47	163	東：1枚	—	H字形	—	—
22号墳	N142° E	直交	北：60 南：65	173	北：1枚 南：1枚	西：1枚 東：1枚	北：コ字形 南：H字形	○	×
25号墳	N101° E	平行	東：29.5	86.5	（東：1枚）	—	H字形	—	—
26号墳	N20° E	直交	北：51 南：40	176	北：1枚 南：1枚	西：2枚 東：3枚以上	北：H字形 南：井桁状	×	重ね継ぎ （西長側石南側石のみ加工）

※1 10号墳は棺身露出部の幅、20号墳は東断面での推定値、25号墳は露出部の値である。

※2 10号墳は蓋石をされた状態での全長、20号墳は北長側石の長さ、16・25号墳は残存部の最大の長さである。

※3 —は不明もしくは残存していないことを示す。

※4 ○はその要素を持つこと、×はその要素を持たないことを示す。



第6図 7号墳現状実測図

した。このように1mを超えるような小口石は千崎古墳群では確認されていない。そして、南小口とした石材A・Bのように小口部が2枚以上の石材で構成されるものも確認されていない。さらに、西長側石と考えられていた部分の土中をピンポールで探査したところ、石材D・E間に直立した状態で石材が埋没していることが確認された。墳丘東側の状況は石材が密集しているため不明であるが、石材A・B・D・Eおよび今回確認した土中の石材は四角く囲うように配置されていることがわかる。以上のことから、第3次調査で箱式石棺材と推定した石材は石障石材である可能性が高いといえる。

また、第3次調査では千崎古墳群の造営時期を成合津1号墳・同2号墳との類似性から、熊本県地域に石障系横穴式石室が出現する以前の古墳時代前期後半から中期前半の時期に比定した(森編2005)。しかし、今回の調査で7号墳の主体部が石障をもつ可能性が出てきたため、千崎古墳群の造営時期はさらに慎重に検討される必要がある。(津田)

2. 26号墳(第7・8図、図版1-2)

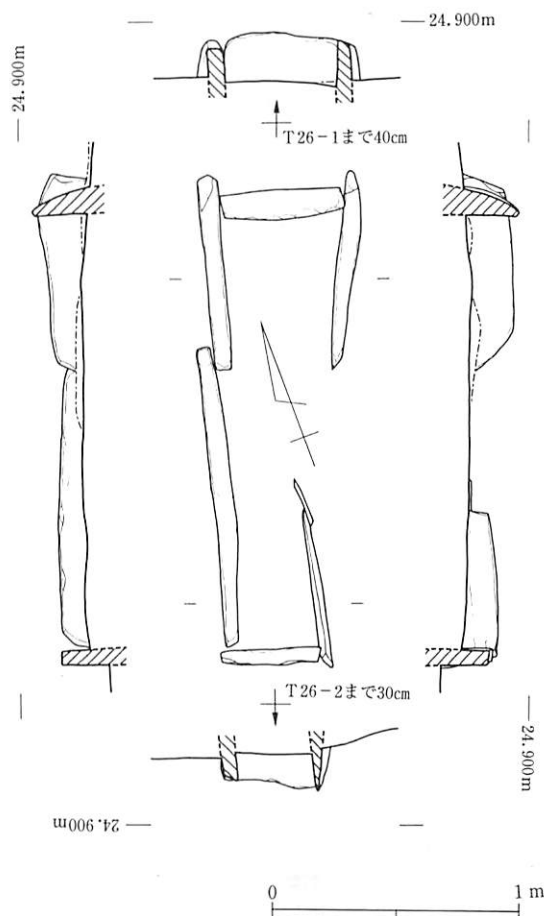
26号墳は北尾根の北端、25号墳の南東10.0mに位置する。現状では、覆土が消失し箱式石棺が露出している。蓋石や石室石材はみられない。主軸方向はN20°Eであり、尾根筋と直交している(森編2005)。

26号墳は、現状で小口石が各1枚、長側石が各2枚残存している。しかし、東長側石に約60cmの隙間があることから本来は3枚以上の石材で構成されていた可能性がある。西長側石では、北側の石材が南側の石材の内側に重ね継ぎされている。西長側石南側石材の端部にはわずかにカギ状の加工が確認できるが、北側石材には加工が施された痕跡はみられない。このように、長側石の片側のみに加工が施された箱式石棺は千崎古墳群内では26号墳のみである。小口石と長側石の組み合わせ方は北側がH字形、南側が井桁状である。大きさは内法で北小口幅51cm、南小口幅40cm、長さ176cmである。

また、26号墳周辺を精査したところ、東長側石外側で墓壇ラインの一部を確認した。さらにピンポールで土中を探査したところ、西長側石のすぐ外側で石棺の形状に沿うように地山面を確認した。26号墳周辺では地山岩盤が露出していることをあわせて考えると、現状では26号墳の墓壇は、20号墳のような二段墓壇を有する構造(森編2005)ではなく、地山が露出している地面を石棺の形状に掘り込んで構築された可能性がある。(荒田)

参考文献

森幸一郎編 2005「千崎古墳群第2次・第3次調査報告」『上天草市史大矢野町編資料集』
1 上天草市：pp. 1-38



第7図 26号墳箱式石棺現状実測図



第8図 26号墳箱式石棺西長側石組み合わせ状況

四 5号墳の調査成果

1. 墳丘の構造

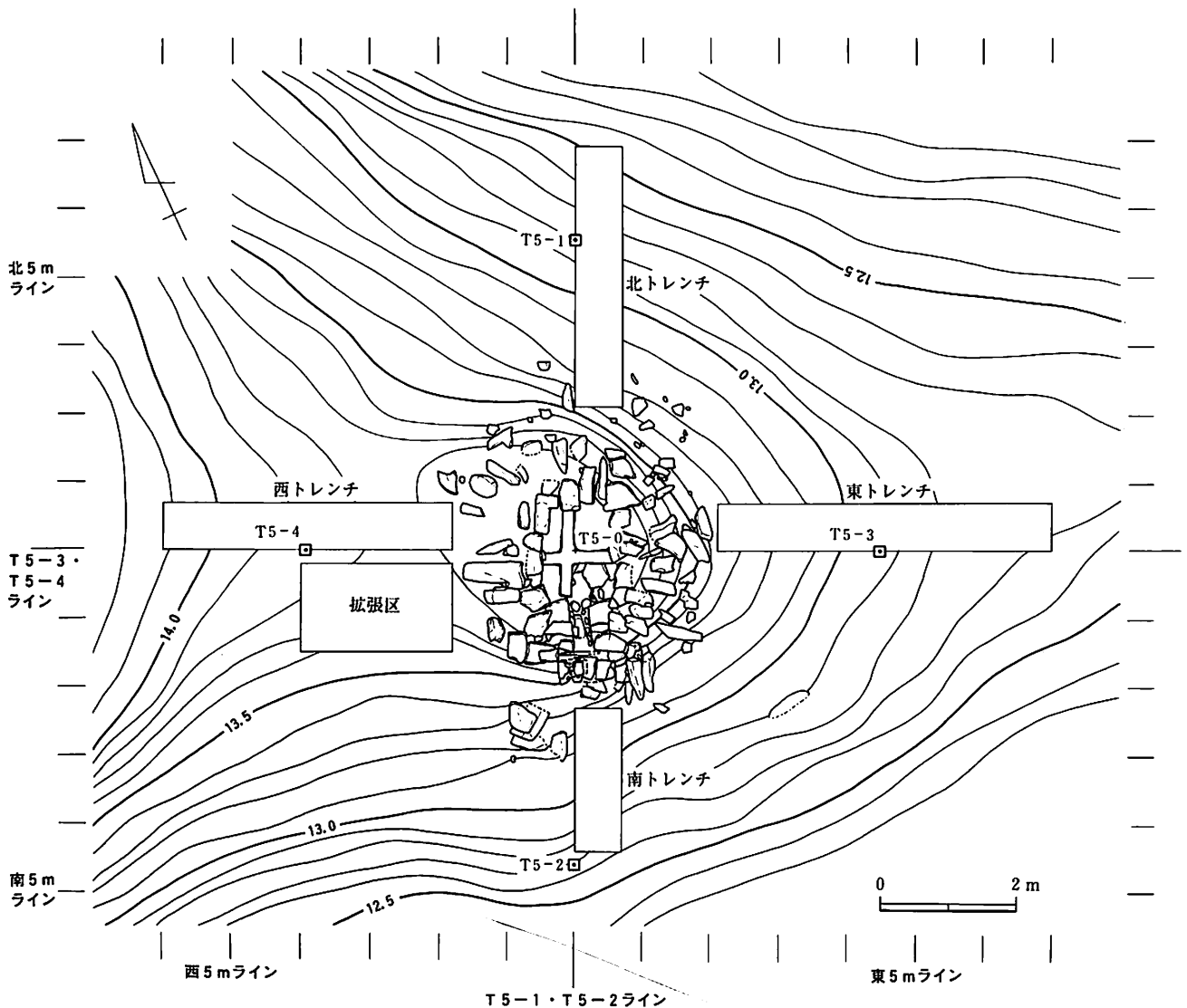
(1) 墳丘の現状

墳丘の現状 5号墳は、11号墳から斜面を南東に50m下った所に位置する。そこは、傾斜がなだらかに変化し始めた東尾根のほぼ中央地点である。現在、5号墳は高さ1m程度の低い円丘状の高まりとなっており、その高まりの上面南北約7m、東西約4mの範囲に多くの石材が散布している(森編2005)。(平野)

(2) トレンチの設定 (第9図)

調査の目的 昨年度実施した第3次調査では、石材散布状況や石室の構造把握に主眼が置かれた。そのため、墳丘については実測図を作成するにとどまっていた。そこで今回の調査では、墳丘の形態および規模を確認することを目的にトレンチを設定した。

トレンチの設定 トレンチは、第3次調査で定めた現状で推測できる石室の主軸線(T5-1・T5-2ライン)および石室中央でそれに直交する軸線(T5-3・T5-4ライン)とその交点T5-0を基準にし



第9図 5号墳トレンチ配置図

て石材が散布する円丘の四方に設定した。トレンチは、それぞれ北トレンチ、南トレンチ、東トレンチ、西トレンチと呼称する。各トレンチは南・北トレンチが尾根筋直交方向、東・西トレンチが尾根筋方向にあたる。

また、西トレンチで検出された溝状遺構の広がりを確認するために、西トレンチ南側に拡張区を設けている。(平野)

(3) 調査成果

i) 北トレンチ (第10図上、図版2-1・3-1)

墳丘の北側、尾根筋に直交する方向に設定されたトレンチである。トレンチの南側(墳丘側)では、調査以前にすでに地山岩盤が露出していた。トレンチ北側では地山面のレベルが急激に下がっており、その上にはしまりの悪い砂質土が厚く堆積していた。これは、山砂と思われる。したがって、北トレンチでは墳丘盛土の存在は確認できない。地山面をみると、T5-0から北2.55mの位置で傾斜が緩やかとなり、そこから幅40cm程の水平面を形成した後、再びレベルが下がっていく。地山の岩盤を整形して墳丘下半部を形成しているとすれば、T5-0から北2.55mの位置が墳丘北側の墳端である可能性が高い。なお、遺物は出土していない。(倉元)

土層堆積

ii) 南トレンチ (第10図下、図版2-2)

墳丘の南側、尾根筋に直交する方向に設定されたトレンチである。トレンチの北側(墳丘側)では調査前から地山岩盤が露出していた。トレンチ南側では地表下12.5cmで地山の岩盤層が検出された。地山上には、トレンチ北側では表土層のみ、南側では表土層およびしまりの悪い砂質土などが堆積していた。これらは、墳丘盛土と判断できるものではない。地山面をみると、T5-0から南2.8mの位置で傾斜に変化がみられ、そこから南に1.1mの範囲で不明瞭ながらも平坦面が確認できる。さらにトレンチ南側では地山面が再び緩やかに下っていく。こうした地山面の傾斜変化を重視し、T5-0から南2.8mの位置が墳丘南側の墳端であると判断した。なお、遺物は出土していない。(清水)

iii) 東トレンチ (第11図下、図版2-3)

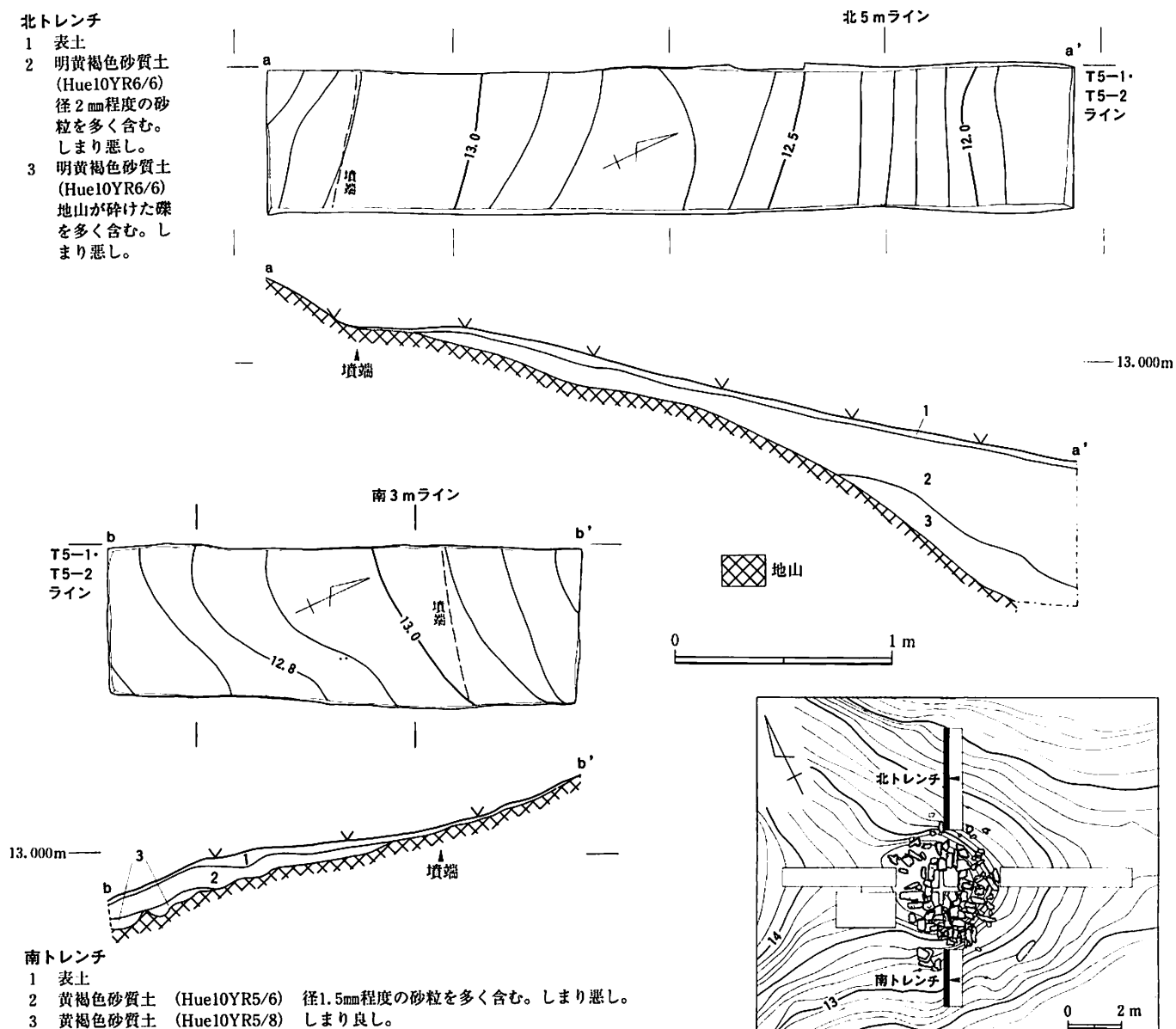
墳丘の東側、尾根筋のレベルが下がっていく側に設定されたトレンチである。表土層を除去したところ、トレンチ西側では地表下1cm、東側では地表下3cmで地山の岩盤層が検出された。地山上の堆積の大半は表土層で、地山層と表土層の間にはしまりのない砂質土がわずかにみられるのみであった。これは、墳丘盛土と判断できるものではない。地山面をみると、T5-0から東3.4mの位置で傾斜にわずかな変化がみられ、そこから東に1.2mの範囲で不明瞭ながら平坦面が観察できる。こうした地山面の傾斜の変化を重視し、T5-0から東3.4mの位置が墳丘東側の墳端であると判断した。なお、遺物は出土していない。(小濱)

iv) 西トレンチ (第11図上、図版2-4・3-2)

墳丘の西側、尾根筋のレベルが上がっていく側に設定されたトレンチである。表土層を除去したところ、トレンチの東半部で、尾根筋に直交する方向に伸びる溝状遺構が検出された。検出面での溝状遺構の幅は2.03mである。溝状遺構は、T5-0から西1.92mの位置より緩やかな傾斜面をなしながらレベルが下がり、T5-0から西2.57mの位置で最下部に達する。そこから西へはやや凹凸のある平坦面が1.25m形成されたのち、T5-0から西3.82mの位置で溝状遺構の西端に至る。その場所は、地山岩盤が急激に掘り込まれたような形状を呈している。また、トレンチ拡張区では、溝状遺構が墳丘南側に弧を描くように伸びた後、拡張区南端付近で消滅

溝状遺構

四 5号墳の調査成果



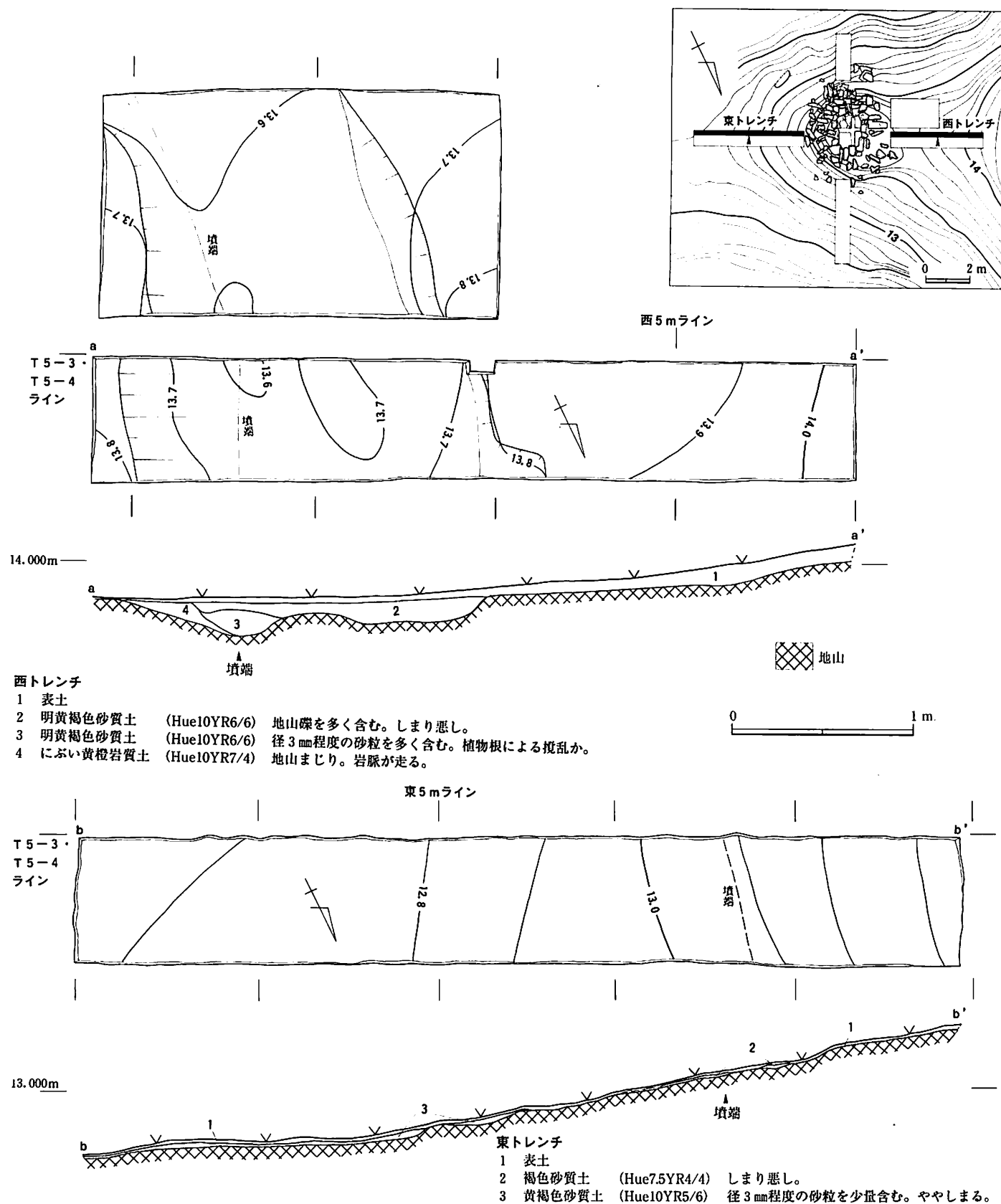
第10図 北・南トレンチ平面図・断面図 (上：北トレンチ、下：南トレンチ)

する様子が観察された。墳丘北側の様子は確認していないが、おそらくこの溝状遺構は墳丘の西半部を取り囲む形で曲線状に存在するものと考えられる。

さて、溝状遺構が検出された場所以外の地山面は、丘陵の形状に沿った傾斜をなしているため、それを掘り込んだ形で形成される溝状遺構の存在はきわめて不自然である。溝状遺構の埋土から遺物が出土していないため不確定な要素を残すが、5号墳の西側を画するために人為的に掘り込まれた溝であると判断しておくことが妥当であろう。したがって、溝状遺構の墳丘側最下部、T5-0から西2.57mの位置を墳丘西側の墳端と判断する。(清水)

(4) 墳丘の形態と構築 (第12図、図版3-3・4)

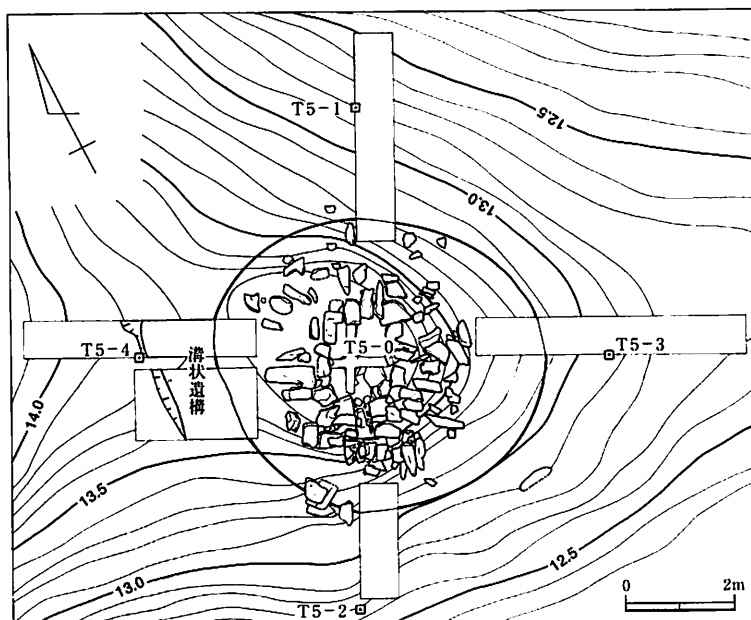
各トレンチで確認された地山面の様相から判断すれば、5号墳は地山を削り出すことによって墳丘下半部が形成されていると考えられる。すなわち、地山面にみられる平坦面および溝状遺構をもって墳丘を画していると考えられる。今回の調査では、平坦面が北・南・東トレンチで、溝状遺構が西トレンチおよびその拡張区で確認された。特に、北トレンチで認められた明瞭な平坦面 (図版3-3) と西トレンチおよびその拡張区で検出された溝状遺構 (図版3-



第11図 西・東トレンチ平面図・断面図 (上：西トレンチ、下：東トレンチ)

4) は重要であろう。以下、これらの所見をもとに5号墳の墳丘の復元を試みる (第12図)。

まず、西トレンチおよびその拡張区で検出された溝状遺構は、弧を描くように墳丘南側に伸びている。北側へどのように溝状遺構が続いているのかは未確認であるが、それは墳丘西側を



第12図 5号墳墳端ライン想定図

現状では盛土の存在を確認できなかった。

2. 主体部の構造

(1) 昨年度の調査成果

第3次調査 の成果

第3次調査では、現状で推測できる石室主軸線（T5-1・T5-2ライン）および石室中央部でそれと直交する軸線（T5-3・T5-4ライン）を基準にして南北2.4m、東西1.65mの調査区を設定した。調査の結果、従来積石塚と考えられていた5号墳は、竪穴式石室であると判断された。したがって、5号墳にみられる石材の散布は石室の上半部が破壊された状態であると推定された（森編2005）。

（前田）

(2) 調査目的と調査区の設定

調査の目的

第3次調査では石室上面を検出するにとどまっていた。そのため、今回実施した第4次調査では石室内部構造の解明を目的とした。

調査区の設定

調査は、第3次調査時に設定した断面畦をそのまま利用するかたちで行い、石室内埋土の掘り下げに重点を置いた。今回の調査区の大きさは南北1.5m、東西1mである。調査区内の区画ごとにそれぞれ北東区、南東区、北西区、南西区と呼称する。

（前田）

(3) 調査成果（第13図、図版4-1・2）

調査経過

石室の構造を把握するために、石室内南東区に転落している石材を取り上げながら掘り下げを行った。しかし、掘り下げを開始して間もなく、石室石材と考えられていた南東区南側の石材が原位置を保っていないことが判明した。そのため、石室内の掘り下げを一時停止し、石室南側の精査を行った。その結果、石室南側に羨道が付設されていることが判明し、これが横穴式石室であると確定した。調査期間等の関係で、石室内埋土の掘り下げはこの時点で中断し、現状での記録作業を行った後、土嚢を用いて埋め戻した。以下、今回の調査で得られた所見を含め、現状で推測される5号墳の石室構造について述べる。

横穴式石室

5号墳の主体部は、南に開口する横穴式石室である。石室上部は、後世に破壊されている。現状で推測される石室の主軸方向はN25.5°Eで、尾根筋に対して直交する。石室の大きさは検出面で全長約2.10m、玄室長約1.40m、同幅0.95m、羨道長0.70m、同幅約0.28mである。

囲むように存在していると推測できる。これを根拠とすれば、5号墳は円墳である可能性が最も高い。また、この溝状遺構最下部と東・北・南トレンチで確認した墳端推定位置から墳形を復元すると南北5.46m、東西6.02mの東西にやや長い円形を復元できる。

したがって、墳丘は、墳丘斜面の上側では溝を掘り込むことによって、一方墳丘斜面の下側および尾根筋直交方向では平坦面を造り出すことによって構築されたと考えられる。そして、おそらく地山を削り出すことによって形成された墳丘の中央に墓壙を掘り込み、後述する石室を築いた後、盛土を行うことによって円丘を形成したと思われる。しかし、

（清水）

しかし、石室北東区では壁体の石材が持ち送り式に積まれている状況が確認できることから、玄室床面での規模は幾分大きくなると考えられる。玄室の平面形は、石室主軸方向に長い長方形を呈している。壁体は、幅50cm程度の板石を小口積みにして形成されている。石材の中にはL字型に加工されたものもみられる。

羨道は、石室中心から少し東側にずれた位置で玄室とつながる。羨道の壁体も、幅50cm程度の石材を小口積みにしているが、玄室とは違い持ち送りの存在は確認できない。そのため、羨道床面でも現状の大きさに変化はないと思われる。羨道内部には隙間を埋めるように大きさ20～30cm程度の石材が詰め込まれている。また、羨道の入口には幅約60cm、厚さ約4cmの閉塞石が確認できる。さらに、閉塞石の外側には石室石材よりも小ぶりの石材を積み上げている状況が観察できる。墓道や前庭部の存在は確認できない。

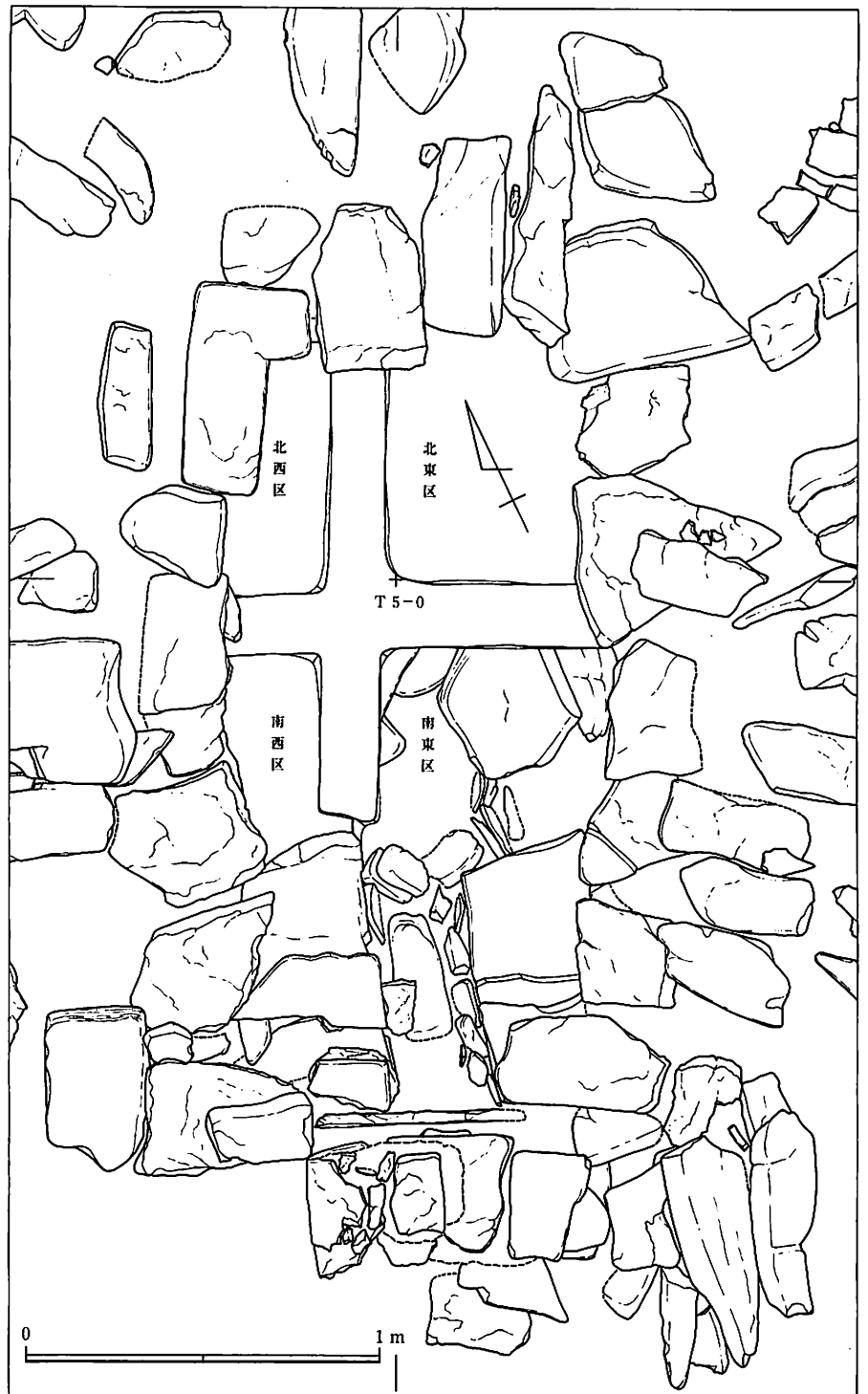
羨道幅がきわめて小さいため、この羨道は通路として利用できないと思われる。このことから、当石室は竪穴式石室のように使用された可能性がある。(前田)

(4) 今後の課題

今回の調査では、第3次調査で竪穴式石室と判断していた5号墳の主体部が横穴式石室であることを確認できた。しかし、調査期間の関係上、石室残存面を検出したところで掘り下げを中断している。そのため、現状で得られる情報は少ない。今後、石室内部や棺の構造を明らかにするためにさらなる調査を行う必要がある。(前田)

参考文献

森幸一郎編 2005「千崎古墳群第2次・第3次調査報告」「上天草市史大矢野町編資料集」1
上天草市：pp.1-38



第13図 5号墳横穴式石室残存面検出状況

五 まとめ

今年度実施した千崎古墳群の第4次調査は、第2・3次調査と同様、上天草市史大矢野町編纂事業の一環となるものである。以下、今年度の調査で得た所見をまとめておく。

1. 7号墳・26号墳の構造

(1) 7号墳

7号墳の現状

7号墳周辺には墳丘西側斜面を中心に直径約5mの範囲で石材が散布している。7号墳は石材の散布範囲から考えて千崎古墳群最大規模の古墳と考えられる。しかし、これまで石材散布状況の記録がとられていなかった。

石障の可能性

そのため、今回の調査では現状での石材散布状況の記録を目的とし、その実測調査を行った。その作業と並行して第3次調査時の観察で石棺材と考えられていた石材周辺の精査を行った。その結果、①小口部と考えられていた部分の幅が1mを超えること、②その部分に2枚の石材があること、③第6図の石材A・B・D・Eおよび今回ピンポールで確認した土中の石材が四角く囲うように配置されていることが確認された。これらのことから、7号墳の主体部は箱式石棺ではなく、石障を有する石室である可能性が高くなった。

(2) 26号墳

西長側石の継ぎ方

26号墳は箱式石棺で、小口石が各1枚、長側石が各2枚残存している。そのうち2枚の東長側石の間には約60cmの隙間があることから、本来、東長側石は3枚以上の石材で形成されていた可能性がある。一方の西長側石には重ね継ぎが観察できる。その重ね継ぎ部分の南側石材端部にはわずかなカギ状の加工がみられるが、北側石材端部には加工がみられない。このように、重ね継ぎ部分の片側石材のみにカギ状の加工が施された箱式石棺は千崎古墳群内では26号墳のものだけである。なお、小口石と長側石の組み合わせ方は北側がH字形、南側が井桁状である。

墓壇の確認

ところで、26号墳の箱式石棺周囲を精査したところ、東長側石のすぐ外側で墓壇ラインの一部を確認した。さらに、ピンポールで西長側石外側の土中を探索したところ、石棺の形状に沿って地山面が確認された。石棺周辺には地山岩盤が露出していることを考えると、26号墳は前回報告した20号墳のような二段墓壇を有する構造（森編2005）とは考えにくく、地山を石棺の形状に掘り込んで構築されたと考えられる。

(3) 千崎古墳群所在箱式石棺の構造（第7表）

千崎古墳群所在箱式石棺

ここで、千崎古墳群に所在する箱式石棺の特徴をまとめておく。千崎古墳群には現在、12基の箱式石棺がみられ、そのほとんどの主軸が尾根筋に直交する。石棺材には砂岩が用いられる。小口の構造はH字形が大半を占め、長側石と小口石が組み合わさる部分には凹状の削り込みを施しているものが大半である。また、石棺は長側石複数枚タイプが多く、カギ状の加工を施して継ぐという手法がとられる。そうした中であって、長側石1枚タイプかつ副室構造をなす22号墳は特異な存在といえるだろう。階層的に上位にあるものである可能性がある。（前田）

22号墳

2. 5号墳の構造

(1) 墳丘の構造

5号墳の現状

現在5号墳は、高さ1m程度の円丘状の高まりとなっており、その南北約7m、東西約4mの範囲に石材が散布している（森編2005）。第3次調査では、その石材散布状況および石室構

造の把握に主眼が置かれたため、墳丘については実測図を作成しただけであった。そこで今回の調査では、墳丘の形態・規模の確認を目的として、墳丘の四方にトレンチを設定した。

墳丘の形態
と規模

その結果、全てのトレンチで墳端を確認した。特に、明瞭な平坦面が確認できる北トレンチと溝状遺構が検出された西トレンチおよびその拡張区は墳丘の復元に大きな意味をもつ。まず、西トレンチおよびその拡張区で検出された溝状遺構は、弧を描くように墳丘南側に伸び、拡張区南端付近で消滅する。北トレンチ側へどのように溝状遺構が続いているのかは未確認であるが、それが弧を描いていることから判断すれば、墳丘西側を囲むような形で存在していると考えられる。このことを根拠とすると、5号墳は円墳である可能性が高い。この溝状遺構の墳丘側最下部と北トレンチおよび東・南トレンチで確認した墳端推定位置を根拠にすると、南北5.42m、東西6.02mの東西にやや長い円形に墳丘を復元できる。

墳丘の構築

5号墳の墳端は、墳丘斜面の上側では溝を掘り込むことによって、一方墳丘斜面の下側および尾根筋直交方向では平坦面を造り出すことによって形成されたと考えられる。そして、おそらく地山を削り出すことによって墳丘下半部を構築した後、その中央に墓壙を掘り込んで石室を築き、さらに盛土を行って円丘を形成したと思われる。ただし、現状の墳丘には盛土は残存していない。

(2) 主体部の構造

第3次調査

昨年度実施した第3次調査では、残存する石室上面の輪郭が調査区全体で検出され、これが堅穴式石室であると判断されていた（森編2005）。

横穴式石室

第4次調査では石室内部構造の解明を目的とした。調査の結果、5号墳の主体部は、堅穴式石室ではなく南に開口する横穴式石室であることが明らかとなった。石室の大きさは全長約2.10m、玄室長約1.40m、同幅0.95m、羨道長0.70m、同幅約0.28mである。玄室壁体を観察できるところでは持ち送りの存在が確認できることから、玄室の大きさは床面では幾分大きくなると考えられる。玄室の平面形は、石室主軸方向に長い長方形を呈する。

羨道の構造

羨道は、石室中軸より東側に少しずれた位置で玄室とつながっている。羨道内部には、隙間を埋めるように最大36cmの大きさの石材が詰め込まれている。また、羨道の入口には幅約60cm、厚さ約4cmの閉塞石の板石が立てられている。さらに、閉塞石の外側には、石室石材よりも小ぶりの石材を積み上げている状況が観察できる。墓道や前庭部は確認できなかった。

5号墳の横穴式石室は羨道をもつものの、その羨道幅はきわめて狭い。そのため、羨道が実際に通路として用いられたとは考え難く、石室自体は堅穴式石室のように使用された可能性が高い。（前田）

3. 5号墳の主体部について

千崎5号墳
羨道の特徴

第4次調査最大の成果は、千崎古墳群で初めて横穴式石室の存在が確認されたことである。しかし、千崎5号墳の横穴式石室の羨道には大きさや構造に特異な点がみられる。すなわち、その羨道幅がきわめて狭く通路として用をなさないと思われる点、羨道内に石材が詰め込まれている点、閉塞石の前面にさらに石材を積み上げている点などである。そこで以下、周辺地域の古墳の中でも羨道の構造が明らかになっている城2号墳やカミノハナ古墳群内の各古墳と比較することによって、千崎5号墳の横穴式石室の性格を考えてみたい。

羨道の大きさ

まず、羨道の大きさに注目すると、千崎5号墳は長さ70cm、幅28cm、城2号墳は長さ40cm、幅44～50cm、カミノハナ1号墳は長さ120cm、幅90cm、カミノハナ3号墳は長さ約100cm、幅約

90cm、カミノハナ4号墳は長さ85cm、幅90cmである。いずれも羨道幅が1mを超えることはなく、狭いという特徴がある。その中でも千崎5号墳の羨道幅は30cmにも満たない点でその狭さが際立っている。

羨道の構造

次に羨道の構造をみていく。千崎5号墳の羨道は割石を小口積みにしていると考えられ、羨道内部には小石材が隙間を埋めるように詰め込まれている。また、羨道の入口には閉塞石が直立した状態で置かれており、さらに、その外側に石室石材よりも小さい石材を積み上げ二重に入口を塞いでいる状況が観察できる。墓道や前庭部は確認できない。城2号墳の羨道は割石を小口積みにしている。羨道の入口には1枚の閉塞石を斜めに立てかけ、その外側をさらに厚い粘土で覆っている。しかし、羨道に墓道が連結していることから横から入ろうとする意図はあったと考えられている（城2号墳発掘調査団編1981）。羨道の外側には前庭部がラッパ状に広がりながら続いている。カミノハナ古墳群の各古墳にみられる横穴式石室の羨道は、直立させた板石の上に石材を小口積みにするものが多い。羨道の入口に閉塞石は確認できないが、玄門に1～3枚の板石を立てかけて入口を塞いでいる。千崎5号墳や城2号墳のように入口が二重に閉塞されているわけではない。しかし、カミノハナ3号墳は玄門と羨道側壁の間に墳丘に埋め込まれた石材が伸び出しているため、墳丘の一部を破壊しないと石室内には入れない構造となっている。さらに、羨道の天井が低いことや羨道幅が狭いことから、通路としての役割は果たしていなかったと考えられている（米倉編1982）。このように羨道の構造をみると、どの古墳も容易に玄室には入れないという共通点がある。特に、千崎5号墳とカミノハナ3号墳の羨道は小さいなどの理由から通路としての役割自体を果たしていなかったと考えられる。

千崎5号墳 横穴式石室 の性格

以上、城2号墳とカミノハナ古墳群との比較を通して千崎5号墳の横穴式石室羨道の構造を明らかにしてきた。ここで明らかになったことは、その他の古墳に比べても千崎5号墳の羨道がきわめて小さいこと、玄室には容易に入れない構造をもっていることである。このことから、この石室は天草諸島に横穴式石室の概念が入ってきた時期に形態を真似て築造されたものの、実際は竪穴式石室のように使用されたと考えられる。しかし、今回の調査では横穴式石室の上面を検出したに過ぎないため、現状で得られる情報は少なく、石室構造について深く言及することはできない。次年度以降の調査に、より詳細な石室構造の解明を委ねたい。（前田）

4. 今後の課題

今後の課題

今回実施した第4次調査は、7号墳および26号墳の現状記録および5号墳の墳丘形態・規模、主体部構造の解明が目的であった。5号墳の発掘調査でも遺物が出土しなかったことから、現状では千崎古墳群の築造時期や性格に関して深く言及することはできない。しかし、5号墳の調査から千崎古墳群には横穴式石室が存在することを確認できた。このことは千崎古墳群の造営時期を考えるひとつの目安となると考えられる。今後、継続して調査を行うことによって、千崎古墳群の性格をさらに明らかにしていきたい。（前田）

参考文献

- 城2号墳発掘調査団編 1981「城2号墳」『宇土市埋蔵文化財調査報告書』第3集 城2号墳発掘調査団・宇土市教育委員会：pp.1-76
 清家 章 2001「畿内周辺における箱式石棺の型式と集団」『古代学研究』152 古代学研究会：pp.1-14
 土生田純之 1991『日本横穴式石室の系譜』学生社
 藤本貴仁 2003「横穴式石室の導入」『新宇土市史』通史編第1巻 自然・原始古代 宇土市：pp.502-507
 森幸一郎編 2005「千崎古墳群第2次・第3次調査報告」『上天草市史大矢野町編資料集』1 上天草市：pp.1-38
 柳沢一男 2002「4 横穴式石室の検討」『千崎古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第730集 福岡市教育委員会：pp.110-114
 米倉秀紀編 1982「カミノハナ古墳群2」『研究室活動報告』14 熊本大学文学部考古学研究室：pp.1-30

第2部

広浦古墳測量・実測調査報告



墳丘実測調査風景

一 位置と環境

1. 地理的環境

広浦古墳（213：番号は第16図、第8～10表に対応）は、熊本県上天草市大矢野町維和広浦に所在した装飾古墳である。そこは、天草諸島の最北端である大矢野島から海を隔てた東方約1kmに存在する維和島の南端にあたる。広浦古墳が所在した場所は、非常に見晴らしのよい舌状丘陵地である。この丘陵上からは、海を隔てた上島に位置する大戸鼻古墳群（214～216）や、大矢野島に位置する長砂連古墳（212）を望むことができる。広浦古墳は1918年（大正7年）の工事に伴って発見されたが、その際に破壊されてしまい、現在はその原形を保っていない。本来の墳丘は小型の円墳で、主体部は砂岩製の箱式石棺であったと推定される。（高濱）

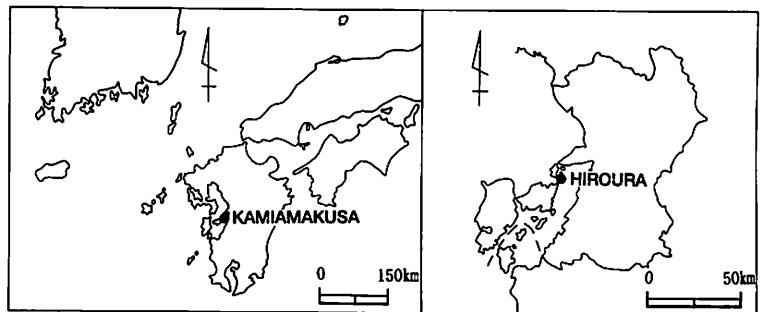
広浦古墳の
位置

2. 歴史的環境

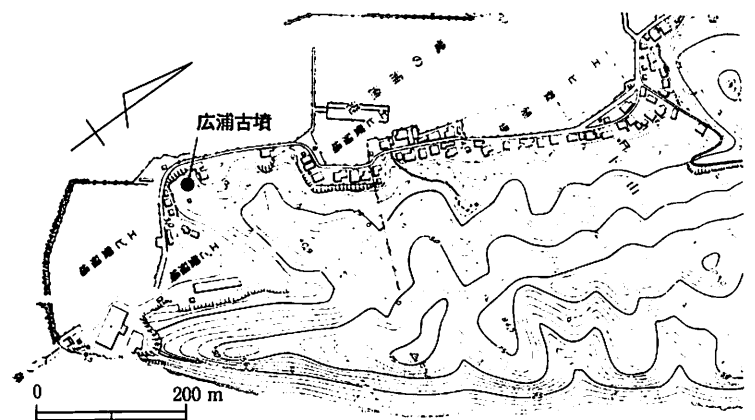
小林行雄は装飾古墳を埋葬施設の形態によって、石棺系、石障系、壁画系、横穴系の4つに分類している（小林1964）。石棺系は、石室内に安置した石棺の外側、あるいは内面に装飾が施されたものであり、石障系は、玄室の四方に立て並べた板状の石材（石障）に装飾が施されたものである。壁画系は、装飾の範囲が石室の壁面にまで広がったものであり、塚坊主古墳（167）にその初現を見出すことができる（藏富士1997）。初期装飾をもつ古墳が肥後南部に多く存在するのに対して、壁画系の装飾古墳は肥後北部に分布しており、分布範囲が重ならないことから、それらの性格には大きな違いがあったと考えられている（藏富士1997）。

装飾古墳の
分類

広浦古墳は、箱式石棺の内面に施文された石棺系の装飾古墳である。石棺系の装飾古墳の多くは熊本県に所在している。特に箱式石棺の内面に装飾をもつものは、大戸鼻南古墳（215）や大鼠蔵東麓1号墳（224）など、熊本県南部の八代海沿岸に多く分布している。一方、緑川・氷川流域では石棺外側に装飾をもつ家形石棺が多い。石障系の装飾古墳は熊本平野に集中している。彩色による壁画系装飾をもつものは、福岡県を中心として佐賀県、大分県、熊本県北部に分布しているが、特に筑後川流域に多くみられる。装飾をもつ横穴は福岡県や宮崎県、大分県にも存在するが、外壁に装飾をもつものは熊本県に限定され、特に菊池川流域や球磨川流域に集中して分布する。（高濱）



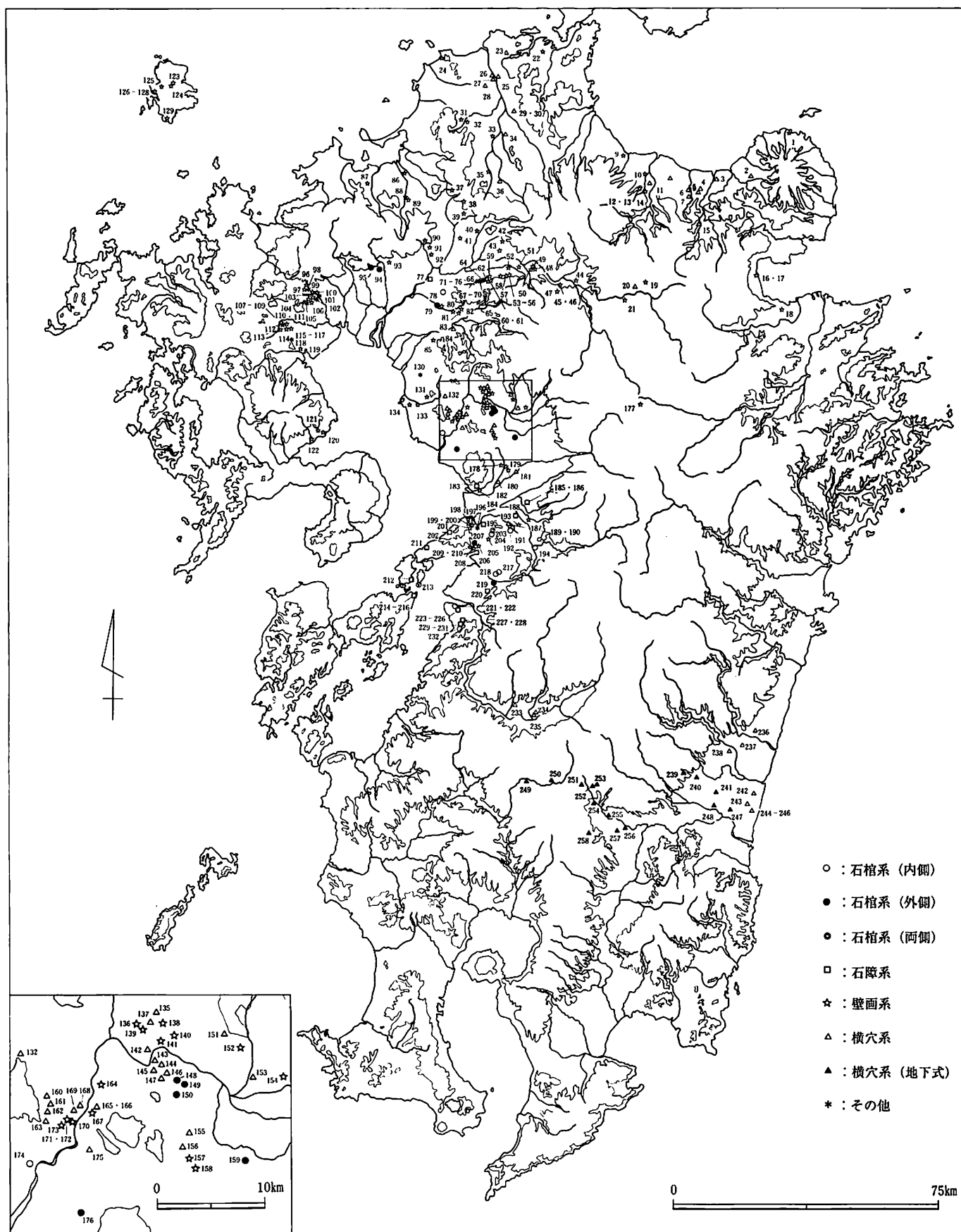
第14図 広浦古墳の位置



第15図 広浦古墳周辺地形

参考文献

- 藏富士寛 1997「石屋形考」『先史学・考古学論究』Ⅱ 龍田考古会
：pp.133-166
国立歴史民俗博物館編 1993「装飾古墳の世界」朝日新聞社
小林行雄 1964「装飾古墳」平凡社
斎藤 忠 1966「装飾古墳の諸問題」『古代学研究』45 古代学研究
会：pp.9-14
高木正文 1999「肥後における装飾古墳の展開」『国立歴史民俗博物
館研究報告』第80集 国立歴史民俗博物館：pp.97-150



第16図 九州装飾古墳分布図

(アミは標高200m 以上を示す。番号は第8～10表に対応する。)

第8表 九州装飾古墳地名表(1)

No.	古墳名	市町村名	墳丘形態	装飾タイプ	装飾の方法
1	伊美鬼塚古墳	大分県国東市国見町	円墳	壁面	線刻
2	穴瀬横穴墓群	大分県豊後高田市	横穴墓	横穴	彩色
3	一鬼手1号横穴墓	大分県宇佐市	横穴墓	横穴	彩色
4	加賀山横穴墓群	大分県宇佐市	横穴墓	横穴	彩色
5	四日市横穴墓群	大分県宇佐市	横穴墓	横穴	彩色
6	観音山横穴墓群	大分県宇佐市	横穴墓	横穴	彩色
7	貴船平下の裏山横穴墓群	大分県宇佐市	横穴墓	横穴	彩色
8	城山装飾横穴墓	大分県中津市	横穴墓	横穴	彩色
9	黒部6号墳	福岡県豊前市	円墳	壁面	線刻
10	山田1号墳	福岡県築上郡上毛町	円墳?	壁面	線刻
11	百留横穴墓群	福岡県築上郡上毛町	横穴墓	横穴	彩色
12	穴ヶ藁山1号墳	福岡県築上郡上毛町	円墳	壁面	線刻
13	穴ヶ藁山3号墳	福岡県築上郡上毛町	円墳	壁面	線刻
14	穴ヶ藁山南3号墳	福岡県築上郡上毛町	円墳	壁面	線刻
15	水雲横穴墓群	大分県宇佐市院内町	横穴墓	横穴	彩色
16	鬼の岩屋1号墳	大分県別府市	円墳	壁面	彩色
17	鬼の岩屋2号墳	大分県別府市	円墳	壁面	彩色
18	千代丸古墳	大分県大分市	円墳	壁面	線刻
19	鬼ヶ城古墳	大分県玖珠郡玖珠町	円墳	壁面	線刻
20	藤巣4号横穴墓	大分県玖珠郡玖珠町	横穴墓	横穴	彩色
21	鬼塚古墳	大分県玖珠郡玖珠町	円墳	壁面	彩色
22	日明一本松塚古墳	福岡県北九州市	円墳	壁面	彩色
23	相坂14・15号横穴墓	福岡県北九州市	横穴墓	横穴	線刻
24	桜京2号墳	福岡県宗像市	前方後円墳	壁面	線刻後彩色
25	土手の内横穴墓群	福岡県中間市	横穴墓	横穴	線刻
26	埴生羅漢山ⅢA-1号横穴墓	福岡県中間市	横穴墓	横穴	線刻
27	瀬戸14号横穴墓	福岡県中間市	横穴墓	横穴	彩色
28	古月横穴2・6・9号墓	福岡県鞍手郡鞍手町	横穴墓	横穴	線刻、彩色
29	水町A13-1号横穴墓	福岡県直方市	横穴墓	横穴	線刻
30	水町B18-1号横穴墓	福岡県直方市	円墳	横穴	線刻
31	竹原古墳	福岡県宮若市	円墳	壁面	彩色
32	担ヶ篠古墳	福岡県宮若市	円墳	壁面	彩色
33	川島11号墳	福岡県飯塚市	円墳	壁面	彩色
34	城腰1号横穴墓	福岡県飯塚市	円墳	壁面	線刻
35	王塚古墳	福岡県嘉穂郡桂川町	前方後円墳	壁面	彩色(5色)
36	西郷横穴墓	福岡県嘉麻市	横穴墓	横穴	線刻
37	殿様塚古墳群1号墳	福岡県筑紫野市	円墳	壁面	彩色
38	五郎山古墳	福岡県筑紫野市	円墳	壁面	彩色
39	紙上観音塚古墳	福岡県朝倉郡筑前町	円墳	壁面	彩色
40	仙道古墳	福岡県朝倉郡筑前町	円墳	壁面	彩色
41	穴観音古墳	福岡県小郡市	前方後円墳	壁面	線刻
42	湯の殿古墳	福岡県朝倉市	円墳	壁面	彩色
43	狐塚古墳	福岡県朝倉市	円墳	壁面	線刻
44	法恩寺山3号墳	大分県日田市	円墳	壁面	彩色
45	ガランドヤ1号墳	大分県日田市	記載なし	壁面	彩色
46	ガランドヤ2号墳	大分県日田市	円墳	壁面	彩色
47	穴観音古墳	大分県日田市	円墳	壁面	彩色
48	盾古墳	福岡県うきは市	円墳	壁面	浮彫
49	重定古墳	福岡県うきは市	前方後円墳	壁面	彩色
50	塚花塚古墳	福岡県うきは市	円墳	壁面	彩色
51	日岡古墳	福岡県うきは市	前方後円墳	壁面	彩色
52	紋塚古墳	福岡県うきは市	円墳?	壁面	彩色
53	珍敷塚古墳	福岡県うきは市	円墳	壁面	彩色
54	原古墳	福岡県うきは市	円墳	壁面	彩色
55	鳥船塚古墳	福岡県うきは市	円墳	壁面	彩色
56	古畑古墳	福岡県うきは市	円墳	壁面	彩色
57	富永古墳	福岡県うきは市	円墳	壁面	彩色
58	清長橋古墳	福岡県久留米市	円墳	壁面	彩色
59	寺徳古墳	福岡県久留米市	円墳	壁面	彩色
60	益永9号墳	福岡県久留米市	不明	記載なし	不明
61	益生田古墳	福岡県久留米市	円墳	壁面	彩色
62	中原狐塚古墳	福岡県久留米市	円墳	壁面	彩色
63	西館古墳	福岡県久留米市	円墳	壁面	彩色
64	大慶寺古墳	福岡県久留米市	円墳?	記載なし	彩色
65	隈3号墳	福岡県久留米市	円墳	壁面	彩色
66	山ノ下古墳	福岡県久留米市	円墳?	記載なし	彩色
67	鹿毛塚古墳	福岡県久留米市	円墳?	記載なし	彩色
68	前畑古墳	福岡県久留米市	円墳	壁面	彩色
69	薬師下南古墳	福岡県久留米市	円墳?	壁面	彩色
70	薬師下北古墳	福岡県久留米市	円墳?	壁面	彩色
71	上諸富古墳	福岡県久留米市	円墳?	壁面	彩色
72	下馬場古墳	福岡県久留米市	円墳	壁面	彩色
73	森塚古墳	福岡県久留米市	円墳?	壁面?	彩色
74	中馬場古墳	福岡県久留米市	円墳?	壁面?	彩色
75	若宮古墳	福岡県久留米市	円墳?	壁面?	彩色
76	上江下小路古墳	福岡県久留米市	円墳?	壁面?	彩色
77	日輪寺古墳	福岡県久留米市	前方後円墳?	石障	彩色、浮彫
78	浦山古墳	福岡県久留米市	前方後円墳	石棺	線刻(石棺内壁、門)
79	石入山古墳	福岡県八女郡広川町	前方後円墳	石棺	浮彫(家形石棺蓋表面全面、横口部)
80	弘化谷古墳	福岡県八女郡広川町	円墳	壁面	彩色
81	乗場古墳	福岡県八女市	前方後円墳	壁面	彩色
82	釘崎11号墳	福岡県八女市	円墳	壁面	彩色
83	丸山塚古墳	福岡県八女市	円墳	壁面	彩色
84	稲荷山横穴墓群18号墳	福岡県八女郡立花町	横穴墓	横穴	線刻
85	成合寺谷古墳	福岡県山門郡瀬高町	円墳	壁面	彩色
86	東光寺塚古墳	福岡県福岡市	前方後円墳	壁面	線刻
87	吉武K7号墳	福岡県福岡市	円墳	壁面	彩色
88	権現塚古墳	福岡県筑紫郡那珂川町	円墳	壁面	彩色

第9表 九州装飾古墳地名表(2)

No.	古墳名	市町村名	墳丘形態	装飾タイプ	装飾の方法
89	蒲江1号墳	福岡県福岡市	円墳	壁面	彩色
90	黒谷2号墳	佐賀県三養基郡基山町	円墳	壁面	藍きくぼめ
91	ヒャーガンサン古墳	佐賀県島橋市	円墳	壁面	彩色
92	田代太田古墳	佐賀県島橋市	円墳	壁面	彩色
93	伊勢塚古墳	佐賀県神埼市	前方後円墳	壁面	彩色
94	西原古墳	佐賀県佐賀市	円墳	石棺	線刻、彩色(石棺棺身、棺蓋玄室側小口面)
95	西原古墳	佐賀県佐賀市	前方後円墳	石棺	線刻、彩色(石棺)
96	山の14号墳	佐賀県多久市	円墳	壁面	線刻
97	古賀山1号墳	佐賀県多久市	円墳	壁面	線刻
98	池本1号墳	佐賀県多久市	円墳	記載なし	線刻
99	米ノ原1号墳	佐賀県小城市	円墳	壁面	線刻
100	姫御前古墳	佐賀県小城市	円墳	壁面	線刻
101	弁財天古墳	佐賀県小城市	円墳	記載なし	線刻
102	深底籠古墳	佐賀県小城市	円墳	不明	線刻
103	坂井山1号墳	佐賀県小城市	円墳	壁面	線刻
104	天山1号墳	佐賀県多久市	円墳	壁面	線刻
105	天山古墳	佐賀県多久市	不明	不明	線刻
106	北の森古墳	佐賀県多久市	円墳	壁面	線刻
107	勇猛山1号墳	佐賀県武雄市	円墳	壁面	線刻
108	勇猛山4号墳	佐賀県武雄市	円墳	壁面	線刻
109	勇猛山5号墳	佐賀県武雄市	円墳	壁面	線刻
110	箕具崎3号墳	佐賀県武雄市	前方後円墳	壁面	線刻
111	箕具崎4号墳	佐賀県武雄市	円墳	壁面	線刻
112	勇猛寺古墳	佐賀県武雄市	円墳?	壁面	線刻
113	東福寺 ST014古墳	佐賀県武雄市	円墳	壁面	線刻
114	永池古墳	佐賀県武雄市	円墳	壁面	線刻
115	妻山4号墳	佐賀県杵臼郡白石町	円墳	壁面	線刻
116	妻山6号墳	佐賀県杵臼郡白石町	円墳	壁面	線刻
117	妻山7号墳	佐賀県杵臼郡白石町	円墳	壁面	線刻
118	湯崎2号墳	佐賀県杵臼郡白石町	円墳	不明	線刻
119	龍王崎6号墳	佐賀県杵臼郡白石町	円墳	壁面	線刻
120	長戸鬼塚古墳	長崎県諫早市	円墳?	壁面	線刻
121	丸尾古墳	長崎県諫早市	円墳	壁面	線刻
122	善神さん古墳	長崎県諫早市	円墳?	壁面	線刻
123	兵瀬古墳	長崎県老岐市	円墳	壁面	線刻
124	百田原5号墳	長崎県老岐市	円墳?	壁面	線刻
125	双六古墳	長崎県老岐市	前方後円墳	壁面	線刻
126	尾越古墳	長崎県老岐市	記載なし	壁面	線刻
127	鬼屋原古墳	長崎県老岐市	記載なし	壁面	線刻
128	浦安古墳	長崎県老岐市	記載なし	壁面	線刻
129	大木古墳	長崎県老岐市	円墳?	壁面	線刻
130	倉永古墳	福岡県大牟田市	円墳?	記載なし	線刻
131	萩ノ尾古墳	福岡県大牟田市	円墳	壁面	彩色
132	今村岩の下横穴墓群	熊本県玉名郡南関町	横穴墓	横穴	線刻彩色、彩色、線刻
133	三ノ宮古墳	熊本県荒尾市	前方後円墳	壁面	線刻彩色
134	西ツ山古墳	熊本県荒尾市	円墳	壁面	線刻
135	城横穴墓群	熊本県山鹿市	横穴墓	横穴	浮彫彩色
136	オプサン古墳	熊本県山鹿市	円墳	壁面	彩色、線刻?
137	付城横穴墓群	熊本県山鹿市	横穴墓	横穴	彩色、線刻彩色
138	馬塚古墳	熊本県山鹿市	円墳	壁面	線刻、彩色
139	チブサン古墳	熊本県山鹿市	前方後円墳	壁面	線刻、彩色
140	弁慶ガ穴古墳	熊本県山鹿市	円墳	壁面	浮彫、彩色
141	白塚古墳	熊本県山鹿市	円墳	壁面	線刻、彩色
142	鍋田横穴墓群	熊本県山鹿市	横穴墓	横穴	線刻、浮彫彩色、浮彫、線刻彩色
143	小原大塚横穴墓群	熊本県山鹿市	横穴墓	横穴	線刻、浮彫彩色、彩色、陰刻
144	長岩横穴墓群	熊本県山鹿市	横穴墓	横穴	浮彫、線刻彩色、浮彫彩色
145	小原浦田横穴墓群	熊本県山鹿市	横穴墓	横穴	浮彫、線刻、突起、彩色
146	桜ノ上横穴墓群	熊本県山鹿市	横穴墓	横穴	線刻彩色、彩色
147	岩原横穴墓群	熊本県山鹿市	横穴墓	横穴	浮彫線刻、線刻彩色、彩色、浮彫、半浮彫、線刻
148	持松塚古墳	熊本県山鹿市	円墳	石棺	浮彫(棺蓋外面)
149	持松3号石棺	熊本県山鹿市	円墳	石棺	陽刻(棺蓋外面)
150	浦大間4号石棺	熊本県山鹿市	記載なし	石棺	陽刻(棺蓋外面)
151	湯の口175号横穴墓	熊本県山鹿市	横穴墓	横穴	線刻
152	御雲塚古墳	熊本県山鹿市	円墳	壁面	彩色
153	瀬戸149-C号横穴墓	熊本県菊池市	横穴墓	横穴	彩色
154	養婆尾高塚古墳	熊本県菊池市	円墳	壁面	線刻
155	加茂横穴墓群	熊本県鹿本郡植木町	横穴墓	横穴	浮彫突起
156	山日横穴墓群	熊本県鹿本郡植木町	横穴墓	横穴	彩色
157	横山古墳	熊本県鹿本郡植木町	前方後円墳	壁面	彩色
158	石川山4号古墳	熊本県鹿本郡植木町	円墳	壁面	線刻
159	石立石棺	熊本県合志市	不明	石棺	線刻(蓋石外面)
160	石貫穴観音横穴墓群	熊本県玉名市	横穴墓	横穴	彩色、線刻、浮彫彩色、浮彫
161	石貫ナギノ横穴墓群	熊本県玉名市	横穴墓	横穴	線刻彩色、線刻浮彫、線刻、彩色、浮彫
162	古城横穴墓群	熊本県玉名市	横穴墓	横穴	線刻
163	原横穴墓群	熊本県玉名市	横穴墓	横穴	線刻、浮彫、彩色
164	江田穴観音古墳	熊本県玉名市	円墳	壁面	彩色
165	長力1号横穴墓	熊本県玉名郡和水町	横穴墓	横穴	線刻彩色
166	北原3号横穴墓	熊本県玉名郡和水町	横穴墓	横穴	線刻
167	塚坊主古墳	熊本県玉名郡和水町	前方後円墳	壁面	線刻彩色
168	城迫間横穴墓群	熊本県玉名市	横穴墓	横穴	線刻、彩色
169	横岳横穴墓群	熊本県玉名市	横穴墓	横穴	彩色
170	馬出古墳	熊本県玉名市	円墳	壁面	線刻
171	永安寺東古墳	熊本県玉名市	円墳	壁面	線刻彩色
172	永安寺西古墳	熊本県玉名市	円墳	壁面	線刻彩色
173	大坊古墳	熊本県玉名市	前方後円墳	壁面	彩色
174	大原9号墳	熊本県玉名市	記載なし	石棺	線刻(銅石内面)
175	田崎1号横穴墓	熊本県玉名市	横穴墓	横穴	彩色
176	経塚古墳	熊本県玉名市	円墳	石棺	浮彫(棺蓋外面)

第10表 九州装飾古墳地名表(3)

No.	古墳名	市町村名	墳丘形態	装飾タイプ	装飾の方法
177	上御倉古墳	熊本県阿蘇市	円墳	壁面	彩色
178	釜尾古墳	熊本県熊本市	円墳	壁面	彩色
179	宮ノ尾1号墳	熊本県熊本市	円墳	壁面	彩色
180	稲荷山古墳	熊本県熊本市	円墳	壁面	彩色
181	つつじヶ丘横穴墓群	熊本県熊本市	横穴墓	横穴	線刻
182	古城8号横穴墓	熊本県熊本市	横穴墓	横穴	彩色
183	千金甲1号墳	熊本県熊本市	円墳	石障	浮彫、彩色
184	千金甲3号墳	熊本県熊本市	円墳	壁面	線刻、彩色
185	井寺古墳	熊本県上益城郡嘉島町	円墳	石障	線刻、彩色
186	石塚遺跡	熊本県上益城郡嘉島町	円墳	石障	線刻
187	今城大塚古墳	熊本県上益城郡御船町	前方後円墳	壁面	彩色
188	坂本古墳	熊本県下益城郡城南町	円墳	石障	浮彫
189	御領横穴墓群	熊本県下益城郡城南町	横穴墓	横穴	線刻
190	牛頭2号横穴墓	熊本県下益城郡城南町	横穴墓	横穴	線刻
191	北原1号墳	熊本県下益城郡城南町	円墳	壁面	線刻、彩色
192	石之室古墳	熊本県下益城郡城南町	円墳	石棺	線刻、彩色(石棺内壁)
193	長九郎山古墳	熊本県下益城郡城南町	前方後円墳	壁面	彩色
194	中郡古墳	熊本県下益城郡美里町	円墳	石棺	線刻、彩色(石棺内壁)
195	三拾町板碑転用石障材	熊本県宇土市	記載なし	石障	線刻
196	宇土城石垣の石材	熊本県宇土市	記載なし	記載なし	線刻
197	椿原古墳	熊本県宇土市	方墳	壁面	線刻
198	梅崎古墳	熊本県宇土市	不明	壁面	線刻
199	城塚古墳	熊本県宇土市	円墳	壁面	線刻
200	東畑古墳	熊本県宇土市	円墳	壁面	線刻
201	飯又古墳	熊本県宇土市	円墳	壁面	線刻
202	ヤンボシ塚古墳	熊本県宇土市	円墳	石障	陰刻、線刻
203	喚免古墳	熊本県宇土市	円墳	石棺	線刻(石棺蓋、内壁)
204	酒野古墳	熊本県宇土市	円墳	石棺	線刻(石棺内壁)
205	宇賀岳古墳	熊本県宇城市	円墳?	壁面	線刻、彩色
206	不知火塚原1号墳	熊本県宇城市	円墳	壁面	線刻
207	鴨籠古墳	熊本県宇城市	円墳	石棺	線刻、彩色(棺蓋外側)
208	岡越古墳	熊本県宇城市	前方後円墳	壁面	線刻、彩色
209	桂原1号墳	熊本県宇城市	円墳	壁面	線刻、彩色
210	桂原2号墳	熊本県宇城市	不明	壁面	線刻
211	小田良古墳	熊本県宇城市	不明	石障	浮彫
212	長砂連古墳	熊本県上天草市	不明	石障	浮彫
213	広浦古墳	熊本県上天草市	円墳	石棺	浮彫
214	大戸鼻北古墳	熊本県上天草市	円墳	石障	線刻
215	大戸鼻南古墳	熊本県上天草市	円墳?	石棺	線刻(石棺内面)
216	大戸鼻石棺	熊本県上天草市	不明	石棺	彩色(石棺内面)
217	大野村石棺	熊本県八代郡水川町	不明	石棺	浮彫(蓋石内面)
218	竜北高塚古墳	熊本県八代郡水川町	円墳	石棺	浮彫、陰刻(石棺内面)
219	大玉山3号墳	熊本県八代郡水川町	円墳	石棺	彫りくぼめ(棺蓋外面)
220	門前2号墳	熊本県八代市	円墳?	石障	浮彫
221	小嵐蔵1号墳	熊本県八代市	円墳	石棺	線刻(石棺内面)
222	小嵐蔵3号墳	熊本県八代市	記載なし	石棺	線刻(石棺内面)
223	大嵐蔵尾張宮古墳	熊本県八代市	円墳	石障	線刻
224	大嵐蔵東麓1号墳	熊本県八代市	記載なし	石棺	線刻
225	大嵐蔵東北麓2号墳	熊本県八代市	円墳?	石棺	線刻(石棺内面)
226	大嵐蔵西北麓2号墳	熊本県八代市	不明	石障	線刻
227	五反田古墳	熊本県八代市	不明	石障	線刻
228	長迫古墳	熊本県八代市	円墳?	石障	線刻
229	田川内1号墳	熊本県八代市	円墳?	石障	線刻
230	田川内2号墳	熊本県八代市	不明	石棺	線刻
231	田川内3号墳	熊本県八代市	不明	石棺?	線刻
232	竹ノ内古墳	熊本県八代市	不明	石棺	線刻
233	大村横穴墓群	熊本県八代市	横穴墓	横穴	浮彫彩色、浮彫、線刻浮彫、線刻、陰刻彩色
234	小原4号横穴墓	熊本県球磨郡相良村	横穴墓	横穴	線刻彩色
235	京ガ峰1号横穴墓	熊本県球磨郡錦町	横穴墓	横穴	線刻彩色、浮彫
236	岸立60号横穴墓	宮崎県児湯郡本城町	横穴墓	横穴	線刻
237	上徳北横穴墓群	宮崎県西都市	横穴墓	横穴	線刻、浮彫
238	高崎4号横穴墓	宮崎県西都市	横穴墓	横穴	堀込
239	市の瀬地下式横穴墓群	宮崎県東諸県郡国富町	地下式横穴墓	横穴	彩色、浮彫
240	大坪地下式横穴墓	宮崎県東諸県郡国富町	地下式横穴墓	横穴	線刻
241	六野原地下式横穴墓群	宮崎県東諸県郡国富町	地下式横穴墓	横穴	彩色、線刻、浮彫
242	土器田東1号横穴墓	宮崎県宮崎市	横穴墓	横穴	線刻
243	広原横穴墓群	宮崎県宮崎市	横穴墓	横穴	線刻
244	蓮ヶ池横穴墓群	宮崎県宮崎市	横穴墓	横穴	線刻
245	祝田南1号横穴墓	宮崎県宮崎市	横穴墓	横穴	線刻
246	祝田33号横穴墓	宮崎県宮崎市	横穴墓	横穴	線刻
247	柿木原2号地下式横穴墓	宮崎県宮崎市	地下式横穴墓	横穴	彩色、堀込
248	本庄地下式横穴墓群	宮崎県東諸県郡国富町	地下式横穴墓	横穴	彩色
249	島内地下式横穴墓群	宮崎県えびの市	地下式横穴墓	横穴	線刻、彩色
250	広畑6号地下式横穴墓	宮崎県えびの市	地下式横穴墓	横穴	浮彫
251	尾中原地下式横穴墓	宮崎県小林市	地下式横穴墓	横穴	浮彫
252	新田場地下式横穴墓群	宮崎県小林市	地下式横穴墓	横穴	浮彫
253	東二原14号地下式横穴墓	宮崎県小林市	地下式横穴墓	横穴	線刻
254	下の平地下式横穴墓群	宮崎県小林市	地下式横穴墓	横穴	線刻
255	大森地下式横穴墓群	宮崎県西諸県郡野尻町	地下式横穴墓	横穴	浮彫、彩色
256	旭台地下式横穴墓群	宮崎県西諸県郡高原町	地下式横穴墓	横穴	線刻、彩色、浮彫
257	日守地下式横穴墓群	宮崎県都城町	地下式横穴墓	横穴	彩色線文、彩色、浮彫
258	立切地下式横穴墓群	宮崎県西諸県郡高原町	地下式横穴墓	横穴	線刻、彩色、浮彫

参考文献

江島伸彦編 2002『装飾古墳の展開－彩色系装飾古墳を中心に－』第51回埋蔵文化財研究集会資料集 埋蔵文化財研究会

二 調査経過

1. 過去の調査

(1) 広浦古墳の発見

広浦古墳は、1918年（大正7年）に工事によって破壊され、この時墳丘内部より装飾が施された石棺が発見された。発見された石棺材の一部は、平野乍によって島外に持ち出され、学界の注目を浴びることとなった。

古墳の調査

そこで翌年の1919年、梅原末治を中心とした京都帝國大學文學部考古學研究室による調査が行われた。しかし、当時の報告（濱田他1919：以下京大報告）によると、古墳はすでに破壊されており、石材が付近に累積している状況であったという。そのため、装飾文様をもつ石材が発見された古墳の外形や内部構造などを実際に確認することは不可能であったらしい。しかし、発掘調査時の目撃談によって、古墳の様相に関していくつかの推測がなされている。それによると、この地には本来いくつかの古墳が存在しており、そのうちの第3位の古墳、おそらく端から3基目の古墳と思われるが、そこから装飾が施された石棺が発見されたという。前述したように、現在石棺が発見された古墳は完全に破壊されており、現状から当時の状況を把握することは非常に困難である。よって、後述するように、今回調査を行った円丘状の高まりが石棺が発見された古墳であるのかどうかという点に関しては、確定することができない。

(2) 発見時の広浦古墳の様相

主体部の構造

京大報告によると、広浦古墳の墳丘は土饅頭状をなし、上部には円形の石材が累積していたという。このことから、当古墳は円墳であった可能性が高い。石棺は墳丘上部の石材を取り除いたところ、発見されたい。石室や石障の有無ははっきりしない。しかし、京大報告の記述を重視すると、石室の中に石棺が存在するという構造も可能性としては考えられる。

石棺は南側に大型のもの1基、それに相接して北側に同方向の少々小型のもの2基の合計3基が存在していたとされている。このうち、北側の2基に関しては詳細な記載がなく、遺物も発見されていないようである。しかし、南側の大型の石棺に関しては詳細な報告がなされている。この石棺は長さ約6尺3寸（約190.9cm）、幅約2尺（約60.6cm）、高さ2尺内外（約60.6cm）の組合せ式の箱式石棺で、底石はなく石材を直接地中に埋めたものである。側石には砂岩の切石を4枚用いており、両側石の両端に彫り込みが設けられていた。蓋石は3枚からなっており、その上部に扁平な石を積み重ねていたようである。蓋石内面の側石と接する部分にはくぼみが入っていた。このようなくぼみをもつ石棺は天草諸島一帯にみられるものであり、第1部で報告した千崎古墳群の箱式石棺や、対岸の大戸鼻古墳群の箱式石棺にもみられるものである。広浦古墳の石棺も例外ではなく、同様の地域の特徴をもっていたと考えられる。

被葬者・副葬品

石棺内部には、全体に赤色顔料が塗布され、貝殻が敷かれた底部には人骨・歯があったという。濱田耕作によると、人骨は骨格がわかるほどは残されておらず、灰のような状態であったようである。また副葬品として直刀の残欠があり、古墳の破壊後当地の上手に再び埋葬されたとされているが、現在これらの行方はわかっていない。

(3) 装飾の様相

装飾石材

平野乍によって発見された装飾の施された石棺が、上述の石棺3基のいずれであるのかは明

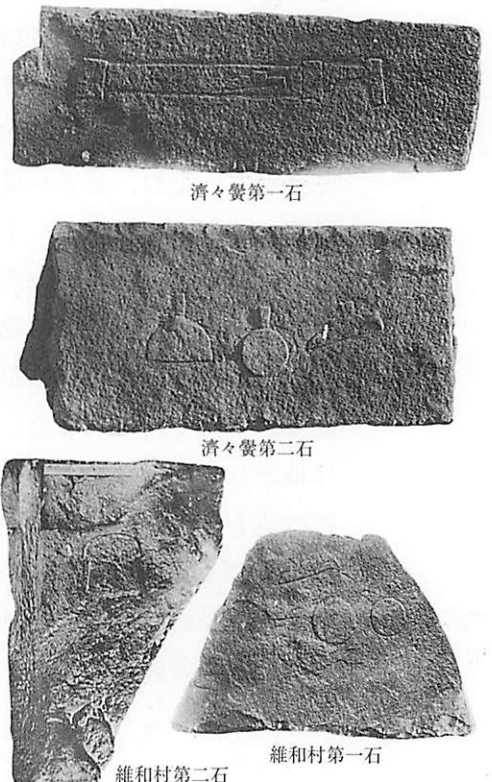
らかになっていないが、諸々の目撃談によると装飾が施されていたのは南側の大型石棺のみであったようである。石棺材は全て砂岩で、施された装飾は浮き彫りの文様であり、その数は4枚であった。

1枚目（第17図：濟々巒第一石）は石棺側石に装飾が施されたもので、平野乍によって上半部の装飾部のみが切断され持ち出された。石材壁面、すなわち石棺内側全体に赤色顔料が塗布されており、その上に刀とおそらく刀子であろう浮き彫りが施されている。刀は全長2尺3寸5分（約71.2cm）、丁字形で鐔がなく、この種のものは石貫ナギノ横穴墓群（161）にもみられる。刀子は全長4寸6分（約13.9cm）で、刀の鞘口に近い鞘上に置かれており、刀同様に丁字形である。鞘の片縁は括れて3段になっており、先端は片刀状になっている。2枚目（濟々巒第二石）は3点の図象をもつもので、1枚目と同様に赤色顔料が塗布されている。図象のうち1点は刀子であり、濟々巒第一石のものと同形状で少々大きい。他の2点の図象は円と半円にそれぞれ柄のようなものが付されており、それらが示すものは不明である。京大報告では鏡と高坏を表したものである可能性が想定されている。3枚目（維和村第一石）も他と同様に赤色顔料が塗布され、刀子を表した図象1点と円形の図象2点を有する。刀子は他の2石と多少異なる形状であるが、石製模造品の刀子にもみられる形状である。円形の図象の示すものはやはり不明だが、京大報告では鏡、あるいは坏のような土器を平面的に表したものではないかと考えられている。4枚目（維和村第二石）にも赤色顔料が塗布されており、一端が半円、他端が方形をなす図象が施されている。この図象は短甲を表したものと考えられる。石材の一端には溝が彫られており、他の石棺材と組み合わせられる構造である。しかし、この石材の行方はわかっておらず、おそらく墳丘の累積石材中に残存していると考えられる。（神川）

2. 今回の調査目的

広浦古墳では、前項で述べた1919年の京大調査以降、本格的な考古学調査が行われていない。発見当時の古墳の状況や装飾石材に関しては、京大報告や各種の書物によって紹介されているものの、現在の墳丘周辺の地形と墳丘の残存状況についてはほとんど記載されていない。

そこで上天草市は、上天草市史大矢野町編纂事業に伴う基礎資料収集の一環として、広浦古墳が存在した場所の地形、残存する墳丘や石材の現状を把握することを目的として、周辺の地形測量および墳丘・石材の実測調査の実施を計画した。調査は、2005年9月11日から28日までの18日間で実施した。累積している石材を詳細に観察した結果、累積石材中に石棺材が存在することを確認している。今回確認された石材に関しては、調査成果の項であわせて述べ、図版に写真を掲載している。なお、9月25日には地元の方々を対象にして現地説明会を実施した。（神川）



第17図 広浦古墳発見装飾石材
樋口編1976（初出：濱田他1919）より

参考文献

- 浜田青陵 1969『百済観音』平凡社
樋口隆康編 1976『京都帝国大学文学部考古学研究报告』第3冊 九州に於ける装飾ある古墳
臨川書店：（初出：濱田耕作・島田貞彦・梅原末治 1919『京都帝国大学文学部考古学研究报告』第3冊 九州に於ける装飾ある古墳 京都帝国大学）

三 調査成果

1. 古墳の立地（第18図）

広浦古墳の立地

維和島中央には南北に伸びる尾根筋があり、島の西側にはその尾根筋から派生した多くの岬がある。一方、東側は急峻な崖地形をなしているため、特に島の南東海岸には集落が形成されていない。広浦古墳は、維和島南端の西方へ突き出した岬上に位置する。その西側に狭い海峡を挟んで、大矢野島南東端の長砂連古墳（212）、上島北端の大戸鼻古墳（214～216）と対峙する。また、維和島中央の尾根上からは、その東側に八代海を隔てて八代平野を望むことができる。八代平野に位置する大鼠蔵東麓1号墳（224）の装飾は、広浦古墳の装飾と類似したものであるが、広浦古墳からは直接八代平野方面を望むことはできない。こうした広浦古墳の立地は、大矢野島と維和島、上島に挟まれた狭い海域を意識したものといえよう。

基準点の設定

今回の測量調査ではまず、三等三角点下山（標高84.02m）を基準とした水準測量を行い、古墳近くに設置した基準点の標高を求めた。その後、残存する墳丘の墳頂部に基準点Oを設定し、その地点から直交方向に4点の基準点E5、S5、W5、N6を設けた。そのほかにも補助的な基準点を適宜設置し、平板測量を行った。そして縮尺100分の1、25cm間隔の等高線を描いた。各測量基準点の世界測地系データを第11表に示す。

墳丘周辺地形

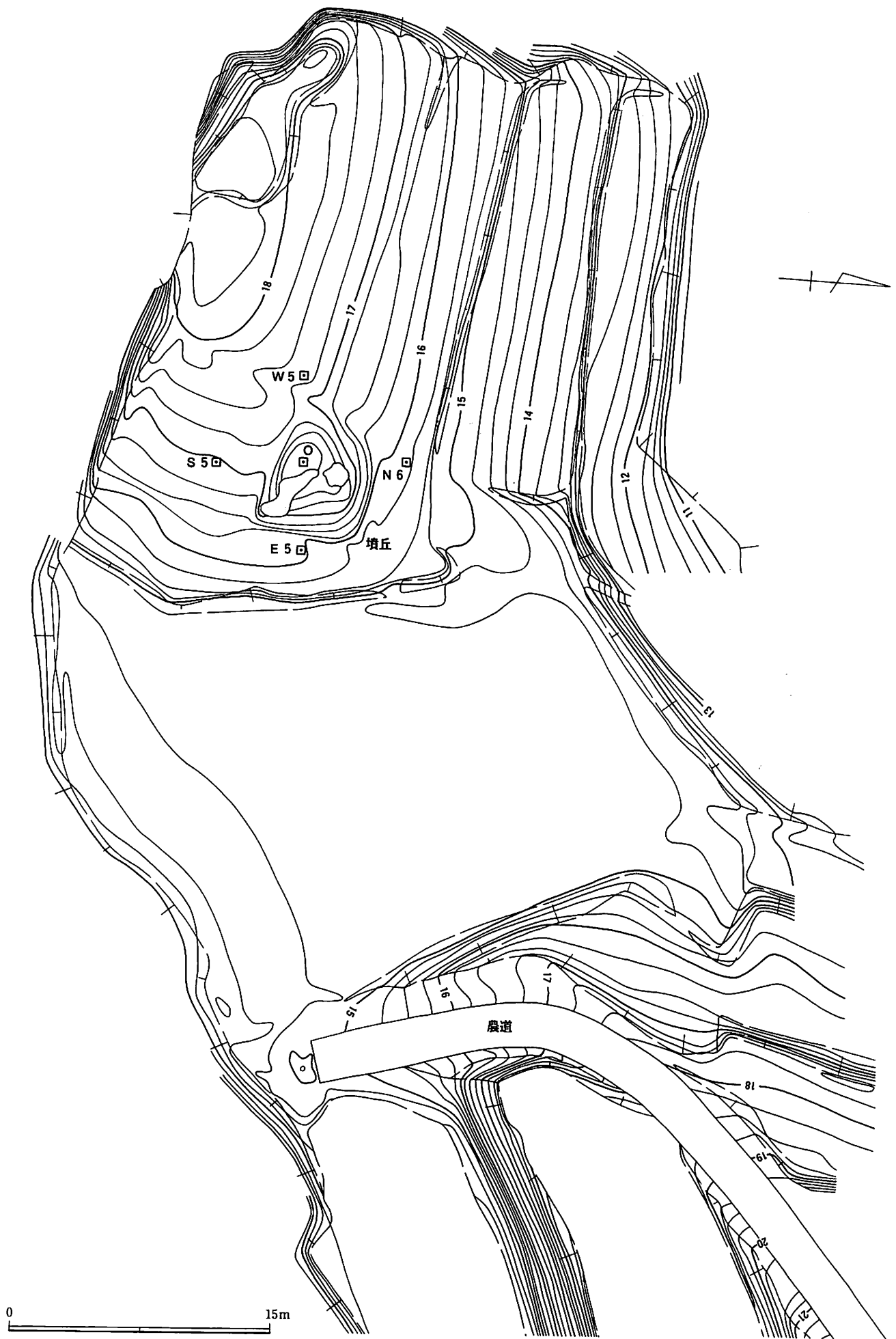
維和島中央の南北に伸びる尾根筋南端部の標高は50m前後である（第15図）。古墳の存在する岬は、その尾根筋から派生しており、西方の海峡側へ下りながら舌状に突出している。第18図をみると、標高約15m付近で後世に削平されてできたと思われる17m四方形の平坦面があり、その西方では墳丘に向かってしだいに標高が高くなる。残存する墳丘状の高まりの最高点は標高18.03mで、その形状は南北に約6.5m、東西に約7.8mの不正円形を呈する。しかし現状では、竹や雑草などによる攪乱と人為的な破壊により、原形が保たれていないと思われる。また、高まりの周囲には浅い溝状を呈している部分があるが、これもおそらく古墳の原形に伴うものではない。なお、高まり東裾の標高が16m前後であるため、現在の墳丘部最高点との比高差は約2mである。

広浦古墳が所在するこの岬の西、南、北の三方は急な崖となっている。墳丘東側には前述のように平坦面が広がり、その平坦面は尾根筋から下りてくる農道と接する。農道周辺および墳丘の周囲は、最近まで蜜柑畑として使用されていたが、現在は放棄されており、ところどころに竹が生えている。また、作物を運搬するためのレールが部分的に残っている。農道東側は耕作地として大規模な地形改変を受けており、大きく2段の平坦面が形成されている。墳丘西側には若干の地形の高まりが存在し、それ以西はきわめて急な崖となり、約19m下の海峡へと下る。岬の南側には現在竹が密生しており、地形は西側と同様にきわめて急な崖となっている。墳丘の北側斜面は、農道東側の耕作地と同様、3段の段々畑として広く削平を受けており、地形はそのまま海峡へと下る。（森貴）

参考文献
高木正文 1999「肥後における装飾古墳の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』第80集 国立歴史民俗博物館：pp. 97-150

第11表 測量基準点の国土座標

基準点名	X座標 (m)	Y座標 (m)
O	-50673.976	-50400.519
E 5	-50673.582	-50395.533
S 5	-50678.964	-50400.125
W 5	-50674.370	-50405.507
N 6	-50667.992	-50400.992



第18図 広浦古墳周辺地形測量図（アミは竹の根による隆起を示す。）

2. 墳丘の構造

(1) 墳丘 (第18・19図)

墳丘の大きさ

今回調査した墳丘状の高まりは、現状で南北約6.5m、東西約7.8mの不正円形を呈する。頂部には2ヶ所盛り上がる場所があるが、それは竹の根によるものであるため、本来の墳丘に由来するものではない。竹の根による高まりを除けば、墳丘の最高点の標高は18.03mである。墳丘の周囲は地形が南西から北東に向かって傾斜しているため、墳丘頂部と周囲との比高差は西側で約0.8m、東側で約2.2mである。この墳丘状の高まりが古墳の墳丘であると証明するものはない。しかし、周囲の平坦な地形に対して不自然に高まる地形をなすことから、墳丘状の高まりが当地に存在した古墳の残骸である可能性は高い。しかし、削平を受けているために本来の墳丘規模は不明である。

外表施設・溝

墳丘には葺石や段築、埴輪などの外表施設は認められない。墳丘は広範囲にわたって石材に覆われているが、これらの石材は後述するように外表施設として本来備わっていたものではない。第18・19図に示されるように、墳丘の周囲には浅い溝が巡るが、削平を受けた現状の墳丘に沿って溝が巡っていることや、同様の溝が墳丘の周囲にのみ巡っているわけではないことなどを考えれば、これも本来古墳に伴うものではないと判断できる。

墳丘内部の様相

墳丘東側斜面の標高17.0～17.5m付近には小さなくぼみが存在する。このくぼみからは墳丘内部をわずかに垣間見ることができる。それによると、くぼみから見える穴の南側には、東西方向に沿って板状石材の重なり合っている状況が確認できる。これは板石が小口積みにされたものとみられ、その壁面はきれいに整っている。この石材が原位置を保っているようにみえることから、不確定ながら、これはこの古墳に設けられた石室壁体の一部である可能性がある。これが正しいとすると、現状の墳丘内部には石室の一部が現位置のまま残存していることになる。今後の調査検討が必要である。

(2) 石材 (第19・20図、図版6)

石材の種類

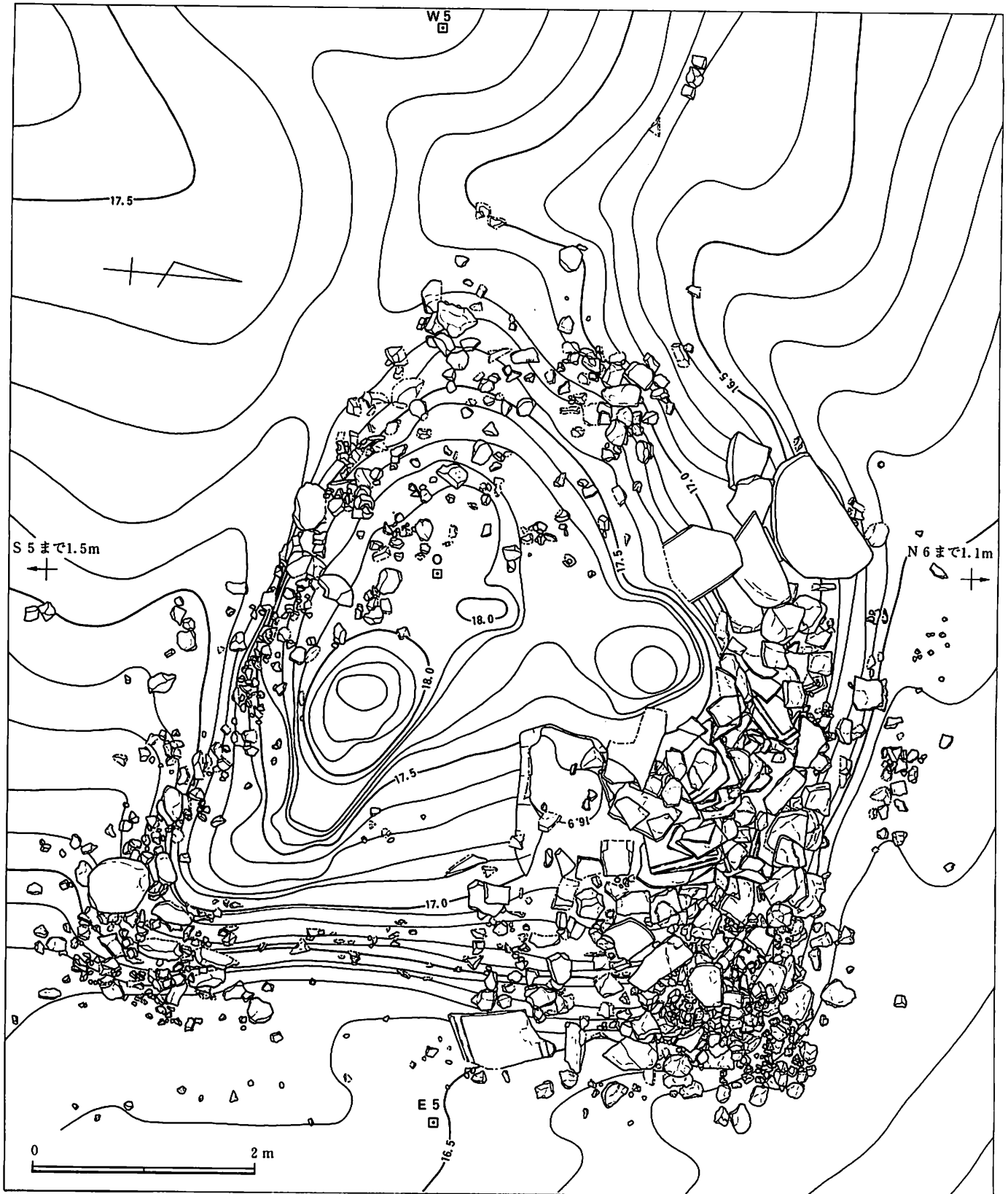
墳丘表面には多くの石材やコンクリート、瓦が散乱している。しかし、上述のくぼみからわずかに確認できる墳丘内部の石材以外には原位置を保っていると考えられる石材は存在しない。石材は板石と礫に分けられる。板石は主に墳丘の北側に散乱または累積しており、南側の礫群中にはみられない。板石には石棺材であると判断できるものとできないものの2種類があるが、石棺材であると判断できない板石が非常に多く、不確定ではあるが、それらは石室を構成していた石材である可能性がある。

石棺材

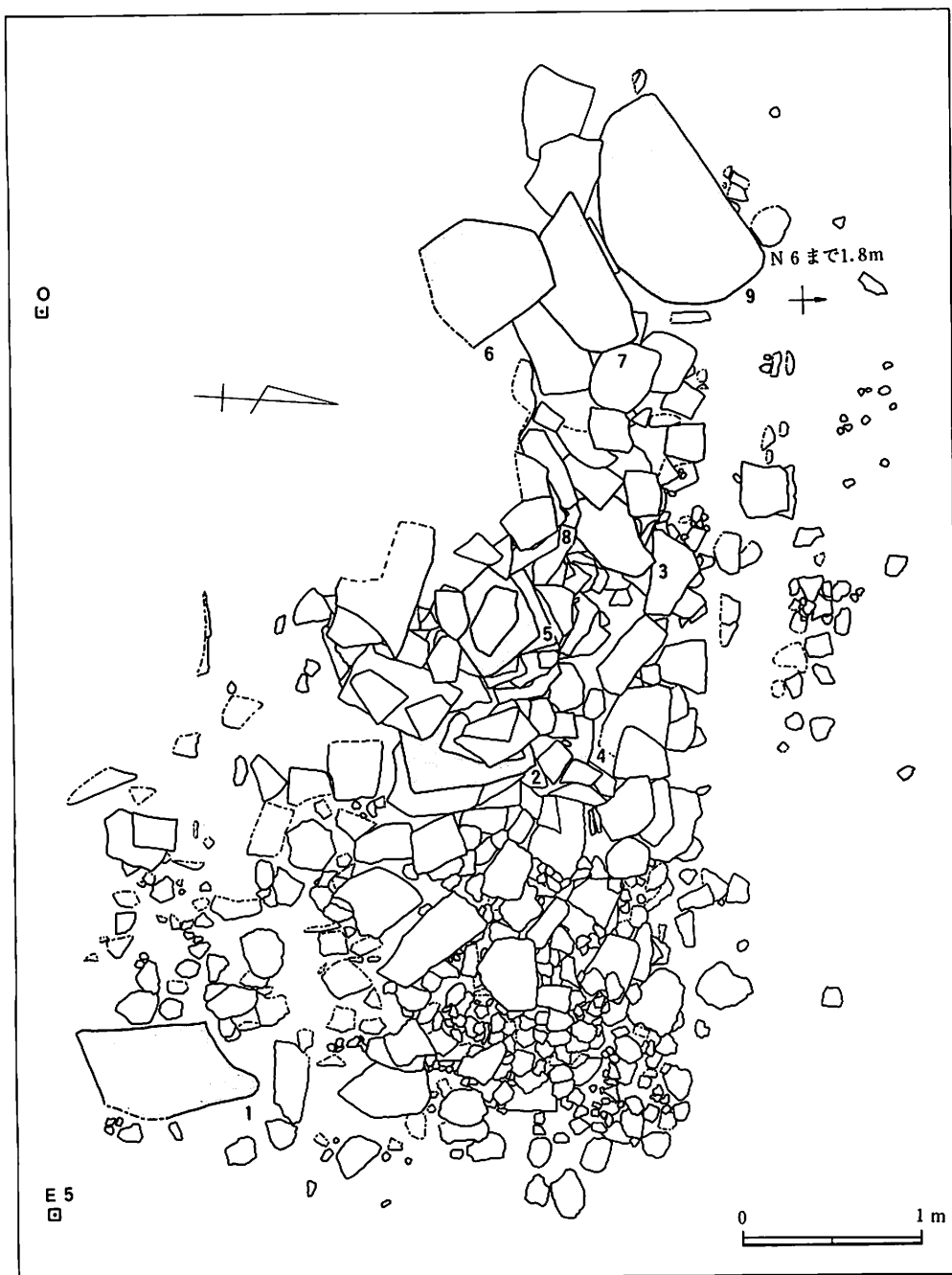
石棺材であると判断できるものは、板石の広い面に溝状の加工が施されたもので、8点の存在を確認している。6と7(第20図、図版6-6)の板石には、現状の下面に溝状の加工が施されていることを確認した。天草諸島一帯では、長側石と小口石が組み合わさる部分や、蓋石の内面に溝状の加工が施される箱式石棺の例が知られる。また、京大報告によると、調査が行われた広浦古墳石棺にも溝状の加工が施されていたとされている(濱田他1919)。今回の調査で確認された8点の石材にみられる加工も同様のものと判断できる。

溝状加工が2本直交している石材3(図版6-3)は、その加工が長側石と小口石の組み合わせ部分にのせるためのものとみられることから、蓋石の可能性が高い。ただし、それ以外のものは打ち割れた状態のものが多いため、今回確認した石材が石棺何基分のものであるかなど、詳細はわからない。墳丘北側の石材9(図版6-6)は半円形をした大きな板石で、これは上

大戸古墳（第2図84）の竪穴式石室小口部に立てられた石材に類似している。この石材の直線的な部分には工具による調整痕がみられる。なお、板状の石材は石棺材だと判断できるもの、そう判断できないものともに砂岩である。



第19図 墳丘現状実測図



第20図 石棺材現状分布図

京大報告ではこの地には本来いくつかの古墳が存在し、装飾が施された石棺が発見された古墳は完全に破壊されたとされている（濱田他1919）。今回調査した地点には多くの石材が散乱・累積しているが、の中には破壊されたいくつかの古墳の石棺材・石室石材が集められており、中には装飾が施された石棺に関連するものも含まれている可能性がある。しかし、今回の調査では、現在は所在が不明とされている「維和村第二石」（濱田他1919）の存在を確認できなかった。また、装飾が施された石材なども新たに確認できなかった。

なお、板石以外の礫は、本来古墳に伴わないものであると考えられる。特に、墳丘南側には大小様々な礫が広く散乱する。これらは周辺の地山中に含まれる石材と同じものである可能性が高いため、この地の削平

に伴って後世に持ち込まれたものであろう。墳丘北側にも板状石材に混じって礫が多くみられ、特に墳丘北東端では10cm大の小さな礫が多数密集する。

板石以外の
石材

コンクリートや瓦がみられることから、この墳丘上に散乱している多くの石材の中に後世のものが含まれていることは確実である。現在みられる石材の累積は、古墳に伴う石材とそうではない石が集められた状況を示しているといえる。（三好）

参考文献

- | | | | |
|-------|---------------------------|--------------|----------------------|
| 樋口隆康編 | 1976「京都帝国大学文学部考古学研究報告」第3冊 | 九州に於ける装飾ある古墳 | 臨川書店：（初出：濱田耕作・島田貞彦・梅 |
| 原末治 | 1919「京都帝国大学文学部考古学研究報告」第3冊 | 九州に於ける装飾ある古墳 | 京都帝国大学 |

四 まとめ

1. 古墳の立地と調査に至る経緯

広浦古墳は熊本県上天草市大矢野町維和広浦に所在する。本古墳の所在する維和島は、天草諸島の最北端である大矢野島から約1km東に位置しており、広浦古墳は、維和島最南端の非常に見晴らしのよい舌状丘陵上に立地している。その丘陵から見渡すことのできる南の対岸（上島）には大戸鼻古墳群（214～216）、北西の対岸（大矢野島）には長砂連古墳（212）という装飾古墳が位置している。また、維和島の東側には八代海を隔てて八代平野が広がっている。しかし、広浦古墳が立地する場所からはより高い丘陵によって視野を遮られるため、直接八代平野を望むことはできない。このことから、広浦古墳が維和島西側に広がる天草諸島一帯の海峡を意識した立地にあること、その地に所在する装飾古墳相互には密接な関係があることをうかがい知ることができる。

広浦古墳の
立地

今回の調査成果では、これまで詳細がふれられていない広浦古墳の現状を確認するために、墳丘周辺地形の測量と墳丘残存部の実測を行った。広浦古墳の過去の調査、および調査目的に関しては、第2章で詳細にふれているので参照されたい。

調査の目的

（神川）

2. 調査の成果

今回の調査成果として、現在の墳丘周辺地形と墳丘の状況を把握することができたという点が挙げられる。

墳丘周辺地形に関しては、1918年の工事による破壊に加えて、近年蜜柑畑としても使用されていたため、古墳が未破壊であった当時の地形を現地地形からうかがい知ることがきわめて困難である。ただし、舌状に突出した岬上の好眺望の地に古墳が築かれていたことは十分に知ることができる。

墳丘周辺地
形

また前項で述べている通り、実測を行った墳丘上には古墳を構成していた石材と考えられるものをはじめ、在地産の円礫、コンクリートなど様々な石材が累積している。石材中には、溝が施されたものが数点存在しており、直交方向に2本の溝が施されているものも1点確認された。このことから、溝状の加工が施された石材は、天草諸島一帯にみられる組合せ式の箱式石棺の石材であったと考えられるため、広浦古墳の主体部に箱式石棺が存在していたことは間違いなさであろう。また、京大報告には、調査によって島外に持ち出された装飾石材が石棺を構成していたものであるという事実も述べられている。しかし、現在墳丘に残存する石材が、京大報告にある装飾の施された石材と関連するものであるのかどうかという点に関しては不明である。

石材

一方、京大報告からは、装飾の施された石材が石棺に伴うものであるという記載はあっても、現在残存する墳丘が装飾の施された石棺の存在した墳丘であるという確証は得られない。しかし、同報告には古墳全てが完全に破壊されてしまったという明確な記載がないため、現在の墳丘が装飾の施された石棺をもつ古墳であった可能性も捨てきれない。これらのことから、今回調査対象とした墳丘が装飾の施された石棺の存在する古墳であったのかどうかを検証するならば、以下の可能性が考えられる。

残存墳丘の
検討

- ① 残存する墳丘は装飾の施された石棺が発見された古墳であり、累積する石材もこの古墳

に伴うものである。

- ② 残存する墳丘は装飾の施された石棺が発見された古墳ではないが、数基存在した古墳のうちの1基に関するものである。
- ③ 残存する墳丘には、当地に存在した古墳数基に関連する石材が集積されており、装飾が施された石棺の発見された古墳に関するものを含んでいる。
- ④ 残存する墳丘には、当地に存在した古墳数基に関連する石材が集積されているが、装飾が施された石棺の発見された古墳に関するものは含まれていない。
- ⑤ 残存する高まりは当地に存在した古墳数基に関連するものを集積したものであり、墳丘とは無関係の高まりである。

以上の可能性から、現在の広浦古墳のあり方を検討したい。

現在残存する墳丘には、その高まりの内部にわずかに原位置を保っていると思われる石材が認められる。これは墳丘頂部のすぐ東部、標高17.0～17.5m付近の落ち込みによるくぼみから確認することができる。くぼみに存在するわずかな隙間からその内部を観察すると、その南側に板石が小口積みになっていることを確認できる。この板石は小口面が均一に整っており、原位置を保っている可能性がある。すなわち、この墳丘内部に原位置を保っている石室が残存している可能性があると考えられるのである。このことから、高まりが単なる石材の累積のみによるものではなく、数基存在していた古墳のうちの1基であると考えられるため、⑤の可能性はないといえる。しかし、この古墳が装飾の施された石棺をもつ古墳であるという確証はない。また、維和島第二石の所在がわかっておらず、石材の累積中に残存している可能性を考えると、この墳丘には装飾の施された石棺が発見された古墳の石材が含まれている可能性も捨てきれない。

以上のことから、墳丘の現状から残る可能性を検討すると、残存する墳丘状の高まりは③の性質をもつ可能性が最も高いと思われる。すなわち、現状では、当地に存在した数基の古墳が工事によって破壊され、それらの古墳を構成していた石材が古墳に直接関連しない在地の石などとともに1つの古墳に累積された結果、現在の墳丘および石材群を形作ったと捉えておく。そうした破壊された古墳の1つが、装飾文様をもつ箱式石棺を内部主体とした古墳であったのだろう。

今回の調査では、後世の破壊によって詳細はほとんど掴めなかったものの、京大調査以来詳細が不明であった広浦古墳の現状を確認することができた。今回の成果は、天草諸島一帯の装飾古墳の様相を理解する上で基礎となるものである。今後、新たな調査による広浦古墳の詳細な解明を期待したい。

(神川)

参考文献

- 樋口隆康編 1976『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第3冊 九州に於ける装飾ある古墳 臨川書店：(初出：濱田耕作・島田貞彦・梅原末治 1919『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第3冊 九州に於ける装飾ある古墳 京都帝国大学)

第3部

小波戸遺跡発掘調査報告



発掘調査風景

一 位置と環境

小波戸遺跡は上天草市大矢野町上小波戸に所在する。本遺跡は大矢野島西側の南向きに開けた小さな入り江にあり、海拔60mの小山から南に派生する二つの丘陵に挟まれた小さな谷間に立地している。遺跡は現在幅7mの県道によって分断され、この道路の西側道路工事に伴う埋め立てによって大きく改変されている。これに対して道路の東側は畑地となっており、本来の地形を知ることができる。これによると、海拔6mのコンタラインが西側に向かって入りこむ状況がみてとれる。したがって、埋め立てられる以前は、海拔5mから北に向かって徐々に高まっていく谷筋の景観であったと考えられる。(芝)

小波戸遺跡
の位置

本来の地形

二 調査経過

1. 調査に至る経緯

これまでに大矢野町内では、数多くの縄文時代遺跡が知られ、採集された遺物も少なくない。ところがこれまでに町内で発掘された事例は少なく、またその発掘事例に関する報告書は未刊である。この度上天草市史大矢野町編纂事業に取り組むにあたり、徹底した遺跡分布調査を行ったものの、縄文時代の生活を綴る基本的資料を欠いていた。旧大矢野町が立地する島嶼では漁撈や採集に依存する生活が展開されたことが予想されるが、それを具体的に示す資料を把握するために、自然遺物の出土が期待される小波戸遺跡の発掘を企画したのである。(甲元)

調査の目的

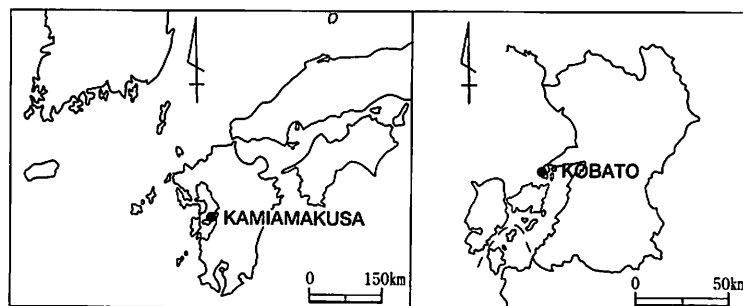
2. 調査の経過

上天草市(当時は大矢野町)は、上天草市史大矢野町編纂事業の一環として縄文時代から古代にかけての遺物が採集されている本遺跡において、2003年4月26日から5月1日までの6日間にわたって発掘調査を実施した。

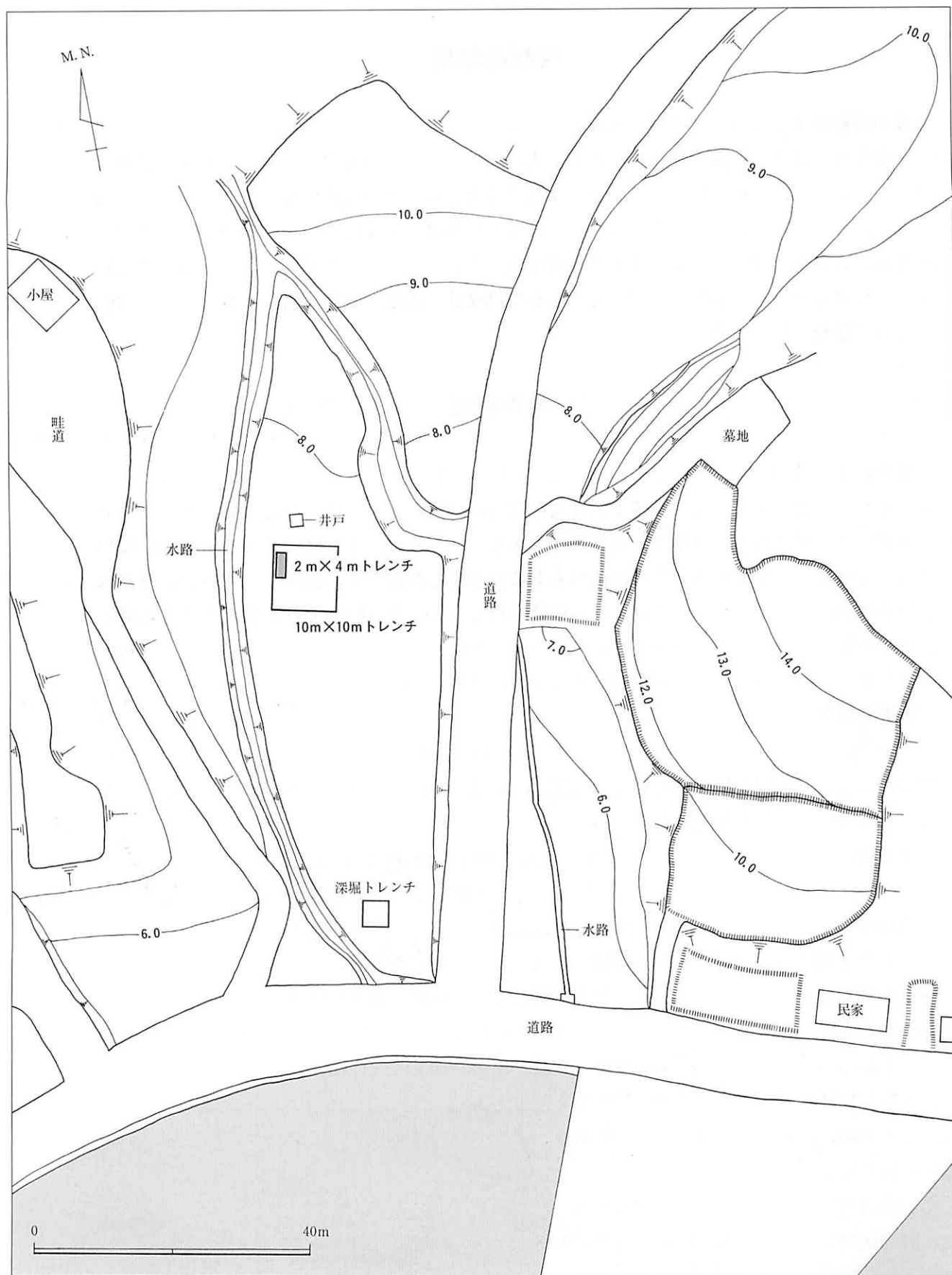
調査では、まず海岸から約100mの地点に10m×10mの調査区を設定し、掘り下げを開始した。掘り下げに際して、調査区を設定した地点には道路工事のための客土が存在しており、さらに遺物が包含されていると考えられる礫層(15層)下位までは2m以上の堆積がみられたため、これを重機によって除去した。礫層に到達した時点で、調査区の中に2m×4mのトレンチを新たに設定し、人力による掘り下げを開始した。その際、調査区付近からは常時水が湧き出していたため、ポンプで排水を行いながら掘り下げを行った。礫層の下位付近(15層)から須恵器、土師器が、さらにその下位の砂層(16層)から、縄文時代後期の土器、石器が検出された。なお、15層下部以下の堆積物に関しては全て土嚢袋に採取し、その後の動植物遺存体の検出に備えた。また掘り下げと並行して、周辺地形の測量も行った。掘り下げは、調査区壁の強度の関係上、縄文時代前期の遺物包含層である18層の検出をもって終了とし、2003年4月30日に埋め戻しを行い、全作業を終了した。(芝)

調査区の設定

調査の内容



第21図 小波戸遺跡の位置



第22図 小波戸遺跡周辺地形測量図

三 調査成果

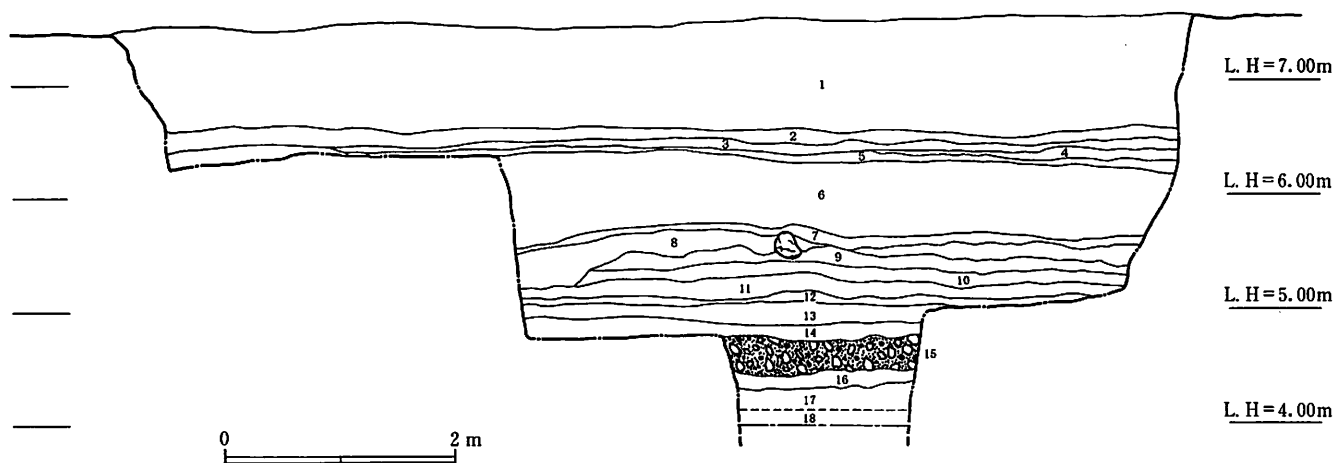
1. 層序（第23図、図版7-3）

今回の調査で確認した層は18に区分され、上から1層、2層…18層とした。1～6層は2度の造成による客土、腐植土層、7～13層は遺跡発見当時の水田跡（耕作面・床土）である。14層および15層は、古墳時代から古代にかけての遺物包含層で、土師器や須恵器を含む。このうち15層には縄文時代晩期の遺物（刻目突帯文土器）も含まれる。16層は縄文時代後期、17層は縄文時代中期末から後期前半にかけての、18層は縄文時代前期の遺物包含層である。（芝）

2. 遺物の出土状況と遺構

14層以下の遺物包含層では、2m×4mという調査区の狭さに対して、多くのそして多様な遺物が出土した。特に17層においては、人工遺物とともに多くの植物遺存体が検出された。

今回の調査では明瞭な遺構は確認されなかったものの、構造物の一部である可能性があるものの、すなわち、17層上部で多量の木片が調査区全体に散乱した状態で検出され、調査区長軸の両端で杭状の木材が立った状態で検出された。また、排水ポンプ設置のために掘り下げた調査区西側の約1m×2mの部分から、大量のドングリが出土した。これは1ヶ所から集中的に出土することから、ドングリピットの可能性もある。しかしながら、これらの両者が、常時湧水する地点から検出された点や調査範囲上の制約という点から、その詳細を把握することはできなかった。（芝）



- 1～6層 2度の造成による客土、腐植土層。
 7層 黄褐色土層（Hue10YR4/3）粘性が非常に強く、粒子が細かい。
 8層 黄褐色土層（Hue2.5Y5/4）粘性があり、粒子が細かい。少量の砂が混じる。
 9層 オリーブ褐色土層（Hue2.5Y4/4）上層に比べて粘性が弱い。粒子が細かい。旧水田層。
 10層 オリーブ褐色土層（Hue2.5Y4/3）粘性がなく、粒子が粗い。赤褐色のブロックを含む。旧水田床土層。
 11層 黄褐色土層（Hue10YR4/3）粘性がなく、粒子が粗い。赤褐色のブロックを含む。
 12層 暗オリーブ褐色土層（Hue2.5Y3/3）粘性がある。上層に比べて粒子が粗い。
 13層 黒褐色土層（Hue10YR2/2）粘性があり、粒子が粗い。水分を多く含む。赤褐色のブロックを含む。
 14層 黒褐色砂礫層（Hue10YR2/3）粘性がない。径2～3cmの礫を含む。古代の土師器・須恵器の遺物包含層。
 15層 黒褐色礫層（Hue10YR2/2）粒子が粗い。径2～10cmの礫が多量に含まれる。古墳時代～古代にかけての遺物包含層。
 16層 黒褐色砂層（Hue2.5YR3/2）粘性が弱く、粒子が細かい。縄文時代後期の遺物包含層。
 17層 灰オリーブ粘質砂層（Hue5Y4/2）粘性が強く、粒子が細かい。縄文時代中期末～後期前半の遺物包含層。自然遺物も多く含まれる。
 18層 暗オリーブ褐色砂層（Hue2.5YR3/2）粘性がなく、粒子が細かい。縄文時代前期の遺物包含層。

第23図 調査区西壁土層断面図

3. 縄文土器（第24・25図、図版9-1～3）

縄文土器は主に16～18層から出土した。16層は縄文時代後期、17層は縄文時代中期末から後期前半、18層は縄文時代前期の遺物包含層である。前期の土器としては轟式、曾畑式、尾田式、中期の土器としては船元式系、並木式、阿高式、後期の土器として南福寺式、出水式、鐘崎式、市来式などがみられる。

縄文時代前期の土器

1～19は縄文時代前期に属する土器である。1は内外面ともナデ調整で口縁部外面に刺突列、その下位に横位の貝殻腹縁による沈線文が施される。2は内外面ともナデ調整で外面に横位の沈線文が施される。3は内外面ともナデ調整で、外面に先端がやや丸みをもつ棒状工具により横位の沈線文が施された後、横位のものよりやや細い施文具で縦位の沈線が引かれる。内面は口縁上部に2本単位の押引文と、その下位に外面の横位沈線文と同一の施文具により4本の沈線文が施される。また、口唇部にはヘラ状工具により刻みが施される。4は内外面ともにナデ調整で、外面に斜位の浅い沈線文、口縁部にヘラ状工具による刺突列が施される。内面の口縁上部にも刺突文、さらにその下位に横走する4列の短沈線文が施される。5はヘラ状工具により口唇部上に刺突文、口縁部外面に横位の沈線文が施される。6は内外面とも横位の貝殻条痕調整で、外面にごく低い隆起線が貼り付けられる。穿孔は焼成後、外面からなされる。7は内外面ともナデ調整で、外面に先端がやや丸みをもつ棒状工具で刺突文列と横走する沈線文が施される。8は内外面ともナデ調整で、ヘラ状工具で3mm近いやや深めの刺突が施される。9は外面ナデ調整、内面は貝殻条痕調整後ナデられる。外面に押引文が施される。10は内外面とも横方向の貝殻条痕調整が施され、外面には横方向の微隆起線が貼り付けられる。

11～13は曾畑式である。11は外面がナデ調整、内面は貝殻条痕調整後、軽くナデられる。外面には細い竹串状の施文具で浅い沈線文が描かれる。12・13も内外面ともナデ調整後、竹串状の施文具で非常に浅い沈線文が引かれる。

14～19は轟式である。14は内外面ともナデ調整で、外面には先端がやや丸みを帯びた施文具により、まず縦位の沈線文が引かれた後、それよりやや幅広の施文具で口縁部と胴部に4列の横位短沈線文が施される。口縁部内面にも外面の横位短沈線文と同一の施文具で2列の横位短沈線文が、また口唇部上にはヘラ状工具による刺突文が施される。15は内外面ともにナデ調整で、棒状施文具により2本単位の波状沈線文を描いた後、縦位の沈線文が施される。16は内外面ともナデ調整で、外面には櫛描きによる、横走する沈線文と波状文が描かれる。17は内外面ともにナデ調整で、竹串状の施文具で浅い沈線文が施される。18は外面には縦位の貝殻条痕調整後、横位の沈線文が、内面にはナデ調整された後、横位に短沈線文が描かれる。19は内外面とも貝殻条痕調整後、ナデ調整が施される。外面には2本単位の沈線で直線文および波状文が描かれ、内面も2本単位の沈線文が施される。また口唇部には同様の施文具で刻みが施される。

縄文時代中～後期の土器

20～32は中期後半から後期初頭に属する土器であり、20は船元式系、21～32は阿高式系である。20は縄文（撚り糸）施文の胴部片であり、船元式系の土器であろうと思われる。同様の土器片は1点のみの出土である。

21～23は並木式である。全て内外面ともにナデ調整である。21は、棒状工具により刻みの施された突起を口縁上にもつ。口唇部および外面にヘラ状工具による沈線文が施される。22はヘラ状工具による2本単位の沈線文が施された後、その間隙に指頭によって凹線が引かれる。そのため、沈線施文部が突帯状になる。23は外面にはヘラ状工具による沈線文が、その間隙を指

頭によって凹線状にくぼませる。胎土中には滑石片を含む。

24は内外面ともナデ調整が施された阿高式の胴部片で、棒状工具により明瞭な凹線文が描かれる。凹線文間の間隔が広く、阿高式の中でも古手の様相を示す。25は阿高式の口縁部片で、内外面ともナデ調整が施されるが、外面の口縁部文様帯より下位はケズリが施され、やや口縁部文様帯が強調された印象を受ける。指頭により凹点文と凹線文が施されるが、浅くやや不明瞭である。口唇部上には指頭による凹点文列が施される。

26～41は後期に属する土器である。26は口縁部に粘土紐を貼り付けてやや肥厚させた土器であり、南福寺式である。内外面ともナデ調整が施される。口縁部文様帯に棒状工具により凹線文が施される。27は南福寺式で、内外面ともナデ調整である。口縁部外面に粘土紐を貼り付けて肥厚させた口縁部文様帯に、指先をもって斜位の短直線文が施される。28も口縁部外面に粘土紐を貼り付けた土器で、尖り気味でやや外に開く口縁部の形状など出水式に近い特徴も備えている。口縁部文様帯にヘラ状工具で「く」の字文を描くが、浅く不明瞭である。29～32は阿高式系土器に伴うと考えられる鉢、浅鉢形土器である。29は内外面ともナデ調整で、肥厚した口縁部に棒状工具で2本の横走る凹線が引かれる。30も内外面ともにナデ調整で、口縁部外面に棒状工具による3本の凹線文が施される。31は粘土紐を貼り付け肥厚させた口縁部を有し、肥厚させた口縁帯の上下を突帯状として、橋状把手を貼り付ける。32は南福寺式に伴う浅鉢形土器の底部付近で、外面に三角形篋削文と、浅いケズリ状の凹線文が施される。内外面ともナデ調整により仕上げられるが、類例に多くみられる赤色顔料塗布の痕跡は認められない。

縄文時代後期の土器

33、38～40は鐘崎式土器である。33はミガキが施される。先端が丸い棒状工具により沈線文が引かれ、その間隙に縄文が充填される。器面に赤色顔料が塗布されていた痕跡が認められる。38は鐘崎式の胴部片で、先端の丸い棒状施文具により深く明瞭な沈線文が描かれる。内外面ともナデ調整が施される。39は鐘崎式の胴部片で、先端に丸みをもつ棒状工具により沈線が引かれ、器面に赤色顔料が塗布されていた痕跡が認められる。内外面ともナデ調整である。40は鐘崎式で、口縁部端に先端が丸みをもつ棒状工具により沈線文が引かれ、棒状工具で刺突が施される。口縁帯下にも横位の沈線文がある。ヘラミガキ調整が施される。

34、37は市来式である。内外面ともナデ調整である。波状口縁を呈し、口縁帯に棒状工具により断続する2本の凹線文が施される。36は口縁帯に棒状工具で2本の沈線が施される。

35は胎土、色調とも他の出土土器と異なり、異質な印象を受ける資料である。内外面ともナデ調整で仕上げられる。外面には棒状工具でヘアピンカーブ状の2本の沈線文が描かれる。また、口縁部に貼り付けられた装飾突起にも同様の施文具で波状の沈線文が描かれ、突起頂部で渦巻状をなす。北久根山式に近い時期のものと思われる。

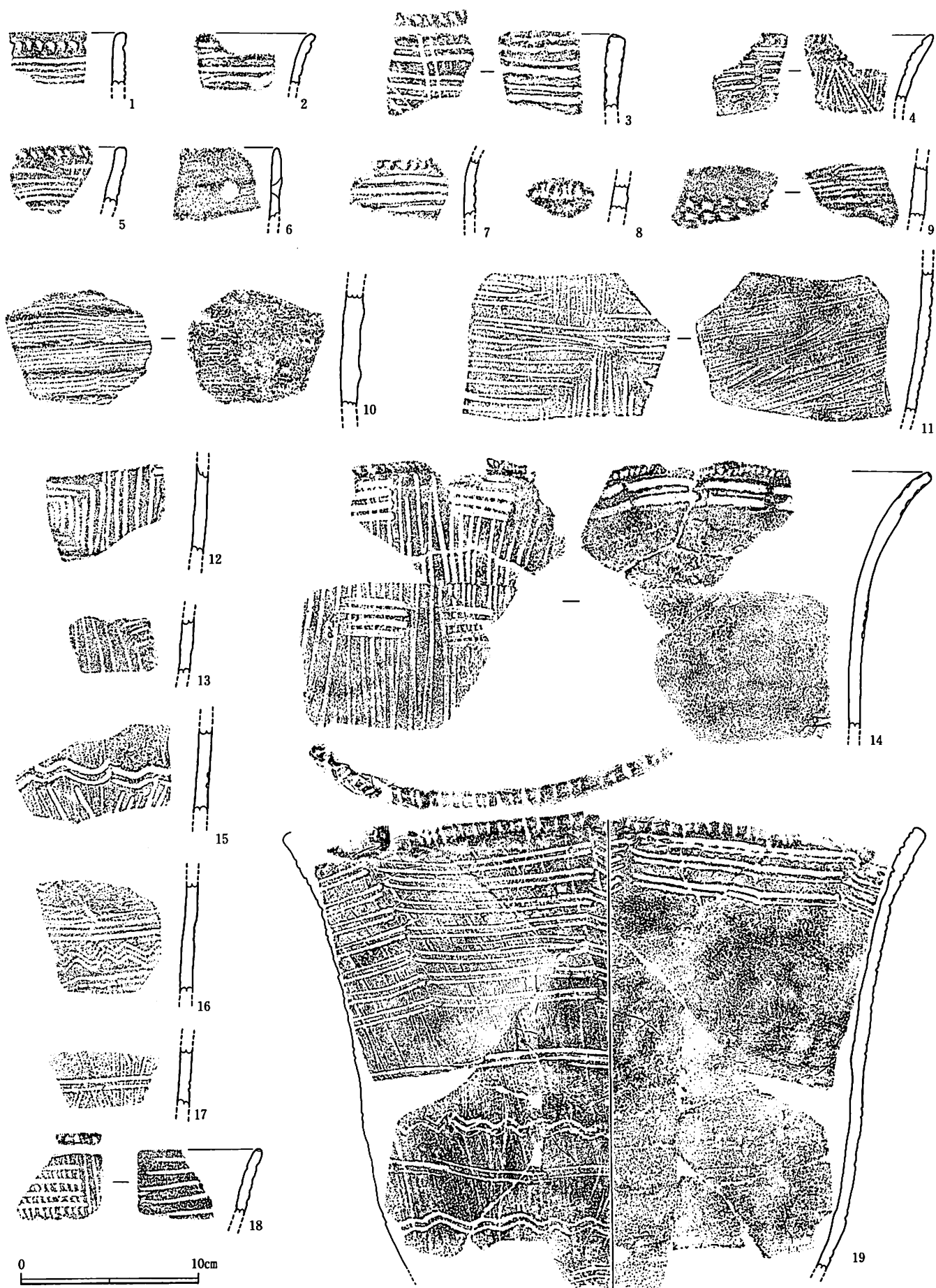
41は口縁帯に先端の丸い棒状工具で3本の沈線が施される。内外面ともナデ調整で仕上げられているが、内面には調整時に付いたかと思われる沈線状の傷が横方向に入る。口唇部には口唇部に対して右上がりの、斜位の刻みが施されるが、きわめて浅く不明瞭なものである。

42は縄文時代晩期の刻目突帯文土器で、赤褐色の色調を呈し内外面ともナデ調整が施される。口縁部に貼り付けられた突帯上に、やや右上がりに斜位の刻目が施される。

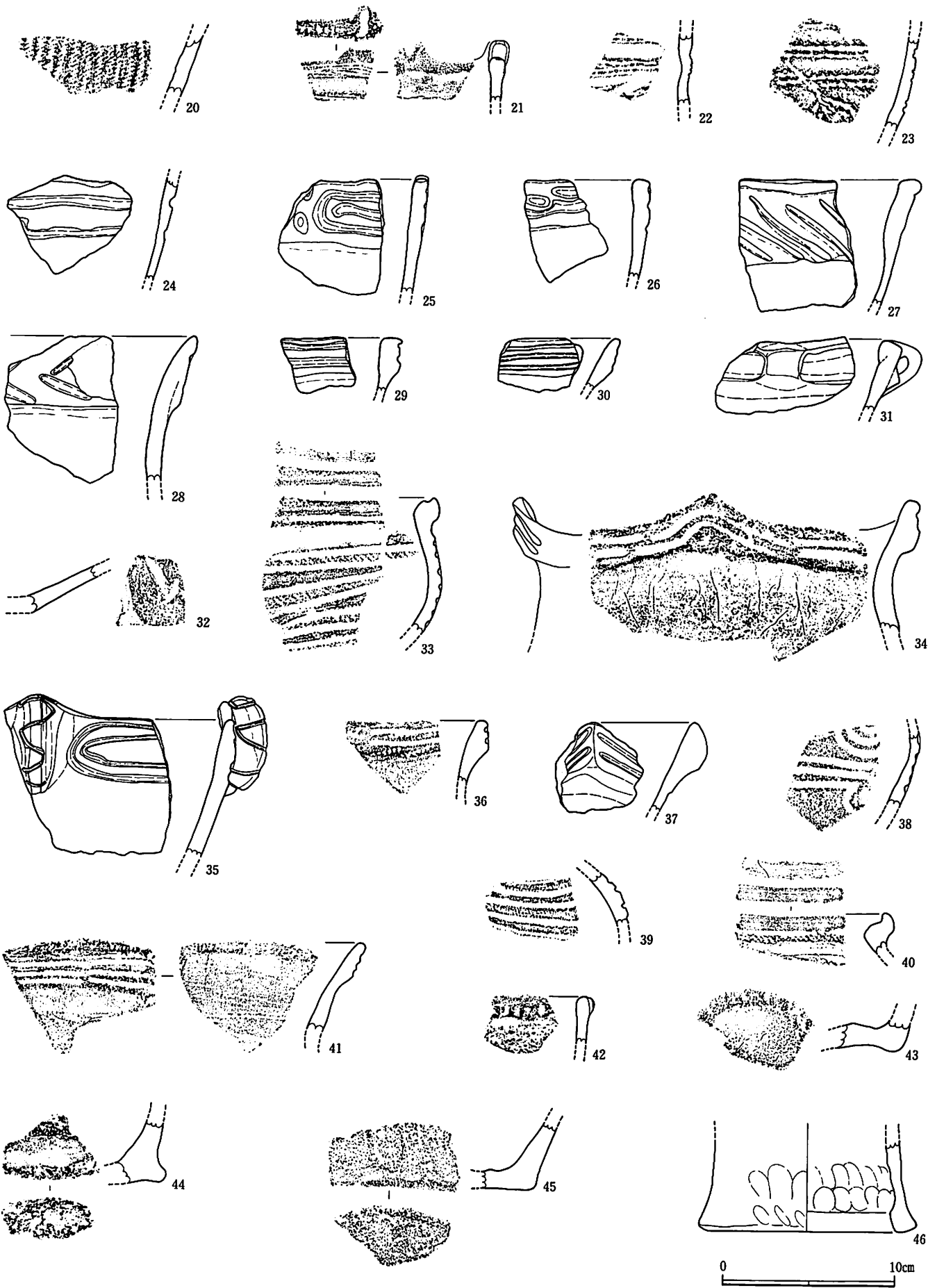
縄文時代晩期の土器

43～46は底部資料である。43は内外面ともナデ調整で、上げ底状を呈す。44は内外面ともナデ調整で、鯨底の可能性がある。45は外面ケズリ後ナデ調整、内面ナデ調整で、底面およびその端部に指頭圧痕が認められる。46は外面ケズリ後ナデ調整で指頭圧痕が残る。 (荒木)

底部資料



第24図 出土縄文土器実測図(1)



第25図 出土縄文土器実測図（2）

4. 石器 (第26・27図、第12表、図版10-1・2)

出土石器の
総数

石器総数は362点である。2 m × 4 mという狭い調査区の中から器種、量ともに多くの石器が出土した。16層以下が縄文時代の遺物包含層であり、ここでは主にそれらについて扱いたい。15層は古代～古墳時代の遺物包含層であるが、その下部からは縄文土器や石器が出土している。そのため、ここでは15層下位、16層、17層、18層と分けて記述を行う。また、水中での作業であったため、層位が認識できなかった遺物も存在する。ここではそれらを一括し層位不明として扱いたい。なお、紙面の都合上、特徴的な遺物のみをピックアップし図示した。以下、個別にみていく。

15層下位出土石器 (第26図1～4) 15層下位からは17点の石器が出土した。ここでは4点を図示した。1はスクレイパーである。安山岩製の薄い剥片を素材とし、その縁辺に調整加工が施される。刃部は弧を描くように形成される。2は石錘である。薄い方形の礫の両側辺を打ち欠いて抉りを作り出している。3は砂岩製の礫器である。側辺には数回にわたる打撃が加えられている。下部を欠損する。4は形態的にみて石斧と考えられる。上部には剥離痕があり基部と考えられる。これが基部であれば下部は刃部の可能性もあるが、明瞭に作り出されていない。表面および右側面にはアバタ状の敲打痕が認められ、敲打具としての機能も考えられる。

16層出土石器 (第26図5～16) 16層からは244点の石器が出土した。出土数、石器組成とも他層よりも豊富である。ここでは12点を図示した。5は漆黒色黒曜石製の石鏃である。裏面に主要剥離面を残し、表面のつくりは丁寧である。左先端部を欠損する。6は灰白色黒曜石製の石鏃未完成品である。寸詰まりの縦長剥片を素材とする。下部に抉りが作り出され、左側辺にも加工が施されるが、その他の加工は全く施されておらず、素材剥片の打面を残している。5、6とも凹基無茎鏃である。7は安山岩製の石鋸と考えられる。全体に丁寧な調整加工が施され、特に先端部は意識的に作り出されている。わずかに下部を欠損する。8は漆黒色黒曜石製の縦長剥片である。右側辺に微細剥離痕がみられる。9は二次加工のある剥片である。安山岩製の縦長剥片の両側縁に調整加工が施され、これは特に左側縁に顕著である。右側縁の大部分は礫面で覆われる。下部を欠損する。10、11は安山岩製のスクレイパーである。10は横長剥片を素材とし、その先端部の両面に加工が施される。刃部はおおむね直線的である。11は方形の剥片を素材とし、その先端部片面に刃部が作り出される。この刃部には70～90度の急斜度の調整加工が施されており、搔器と考えられる。右側辺には礫面が残る。上部を欠損する。12は石錘である。楕円礫の両側辺を打ち欠いて抉りを作り出している。13は砂岩製の礫器である。板状の礫の側辺に多数の剥離痕が観察できる。先端部は意識的に尖らされる。下部を欠損する。14、15は砂岩製の敲石である。14は薄い楕円の礫を素材とし、短軸、長軸ともその中央部にアバタ状の敲打痕が認められる。15は直径15cm程度の円礫を素材とする。粗密はあるものの、側面全体に敲打痕が認められる。これに対して表裏面に敲打痕は認められず、非常に滑らかである。下部および左側は大きく破損しているが、左側に比べて下部の破損面は全体に滑らかである。これは、下部破損後も一定期間使用されたことを示していると考えられる。16は砥石である。板状の礫が用いられる。据えると安定感があり、砥石として好都合である。特に表面の右側は周囲に比べ滑らかであり、中央部には数条の研磨痕が認められる。

17層出土石器 (第27図17・18) 17層では51点の石器が出土した。上層に比べ、出土量が少なく定形石器はわずか5点である。ここでは2点を図示した。17は安山岩製の石鏃である。下部

を欠損する。18は漆黒色黒曜石製の縦長剥片である。打面は礫面である。

18層出土石器（第27図19～27）18層では21点の石器が出土した。上層と比べて出土量が少ないのは、この層を完掘できていないためであり、その総数は18層全体の石器数を反映しているものではない。しかし、その量のわりに石器組成は多様である。19は漆黒色黒曜石製の石刃核作業面付きの剥片である。作業面には7条の剥離痕が観察され、いずれの剥離面の打点も単一の打面にむかっており、円（角）錐状の石核を想定できる。打点部を欠損する。20はスクレイパーである。横長剥片を素材とし、その右側縁および先端部に調整加工が施される。背面の大部分は礫面で覆われる。21は頁岩製の棒状石器である。上部には4面の研磨面が認められる。砥石の可能性もある。下部の剥離痕は基部を作り出すためのものか。22～24は石錘である。いずれも円礫の両側辺を打ち欠いて袂りを作り出している。24には短軸側にもくぼみが認められ、紐ずれ痕の可能性もある。25、26は磨製石斧である。25は玄武岩製で基部側は大きく欠損する。刃部は研磨されたと考えられるが、風化が激しく研磨痕は明瞭ではない。刃部から約5cm上の両側辺にはくぼみがみられる。26は蛇紋岩製である。刃部のみに研磨痕が認められる。表裏面とも数枚の剥離痕が観察できることから、敲打によって整形した後、研磨されたことがうかがえる。刃部を欠損している。蛇紋岩製石器はこの石斧の他に剥片が1点出土している。27は石皿である。中央部は大きくくぼんでいる。風化が激しく敲打痕は明瞭ではない。

層位不明の石器（第27図28～30）28は棒状の石器である。表裏面のところどころに研磨痕がみられ、非常に滑らかである。下部は本来剥離面であるが、ここにも研磨痕が観察できる。安山岩製。29は磨製石斧と考えられる。基部加工がみられ、表面には研磨痕が観察される。刃部を大きく欠損している。30は有溝石錘である。卵状の礫に十字の溝を入れたものである。この溝の幅には短軸と長軸で違いがある。すなわち、短軸側の溝は約5mmであるのに対して、長軸側の溝は1cm程度あり、装着された紐の太さの違いを示すと考えられ興味深い。

以上、個別にみてきたが、石器組成と石器石材の観点からまとめておきたい。

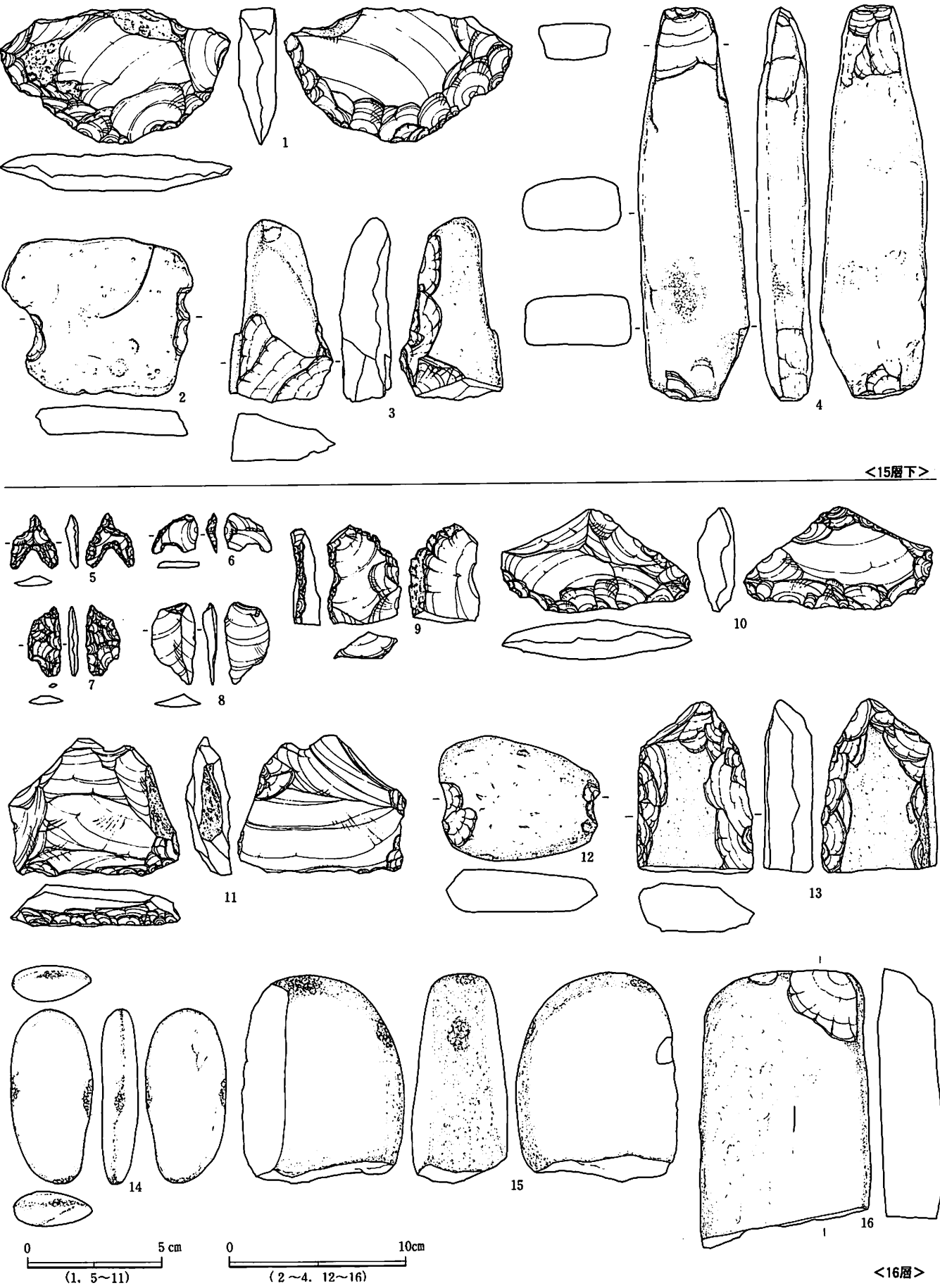
まず、石器組成をみると、剥片石器、礫石器ともに多様な石器が出土していることがわかる。**石器組成** 石器出土の主体である16層をみると、その多くは剥片の類ではあるものの、石鏃、スクレイパー、棒状石器、石錘、礫器、敲石、砥石など器種組成は多様である。この中で特徴的なのは礫器、石錘の存在である。礫器は縄文時代後期の西北九州に特徴的に分布するものであり、本遺跡出土石器もその例にもれない。また、石錘は礫の縁辺を1、2回の打撃で作りに出した簡単なものが多く、大きさも様々である。

次に石器石材をみてみると、黒曜石、安山岩、頁岩、砂岩、蛇紋岩など多岐にわたる。これらは器種に応じて使い分けがなされている。大きくみて、剥片石器には黒曜石、安山岩が用いられ、礫石器には砂岩、また磨製石斧には蛇紋岩も用いられる。前者の石材は、いずれも西北九州産の石材であり、当該地域とのつながりを示している。一方、後者の石材は在地産石材が用いられる。石材の多様さが石錘、礫器の形態的多様性を引き出していると考えられる。（芝）

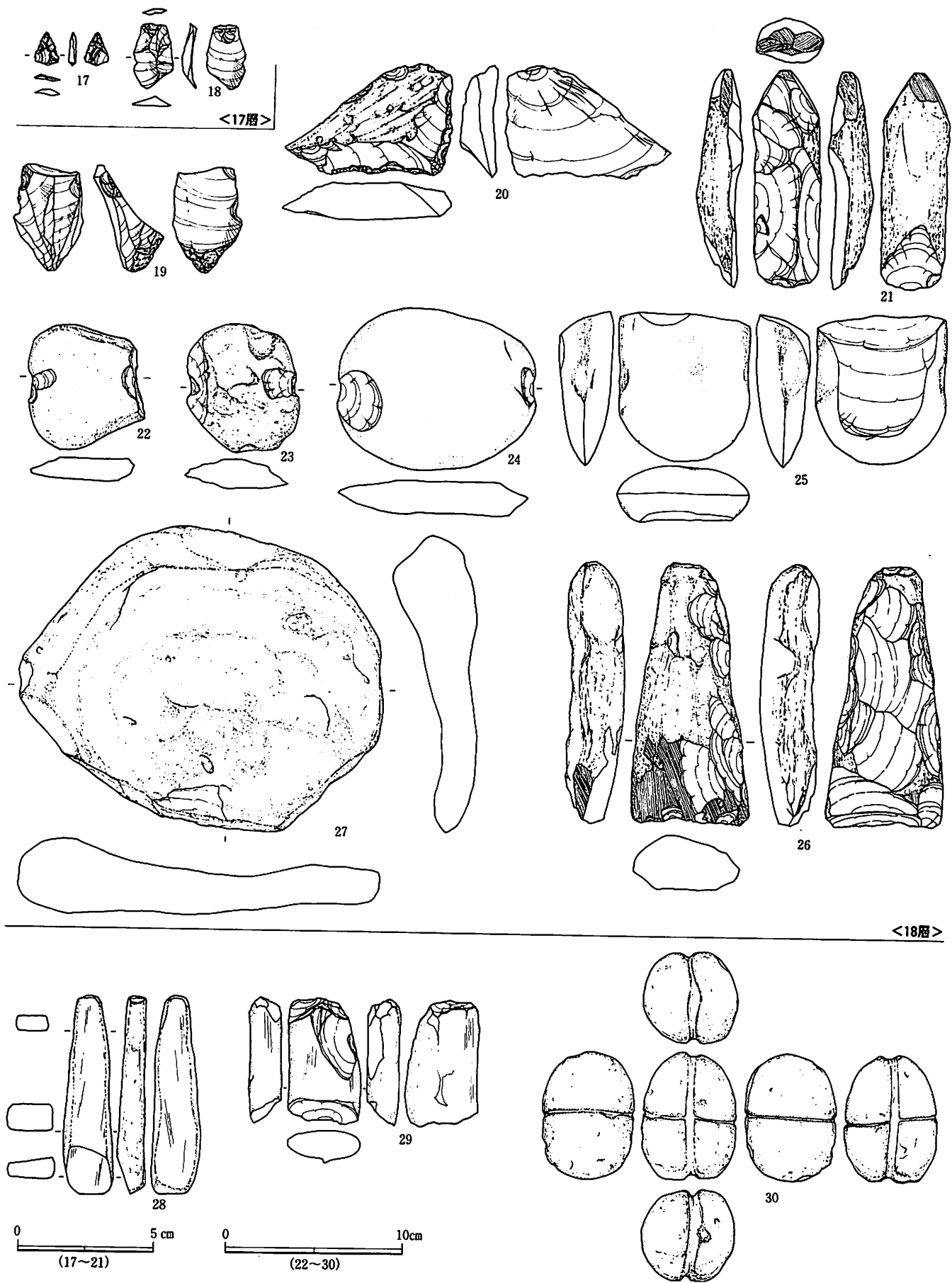
石器石材利用

第12表 小波戸遺跡出土石器組成表

	石鏃	スクレ	二次加工	微細剥離	磨斧	棒状石器	石錘	礫器	敲石	砥石	石皿	剥片類	総数
15層下		4	2		2		1	3				5	17
16層	2	3	9	2		3	5	4	4	1		211	244
17層	1		2	1			1					46	51
18層		1			2	2	5		2		3	6	21
層位不明			2		3		4		2			18	29



第26図 出土石器実測図 (1)



第27図 出土石器実測図（2）

5. 木器（第28図、図版10-3・4）

加工木材

17層では多量の木材片とともに加工木材が3点出土した。全て丸太材の一部が加工されたもので、1点は両端が加工されたもの、他の2点は片端が加工されたものである。前者は地面に横たわった状態で出土したのに対して、後者は2点とも地面に立った状態で出土した。形態的特徴として、前者は、まっすぐに伸びた細身の丸太材が丁寧に加工されているのに対して、後者はそれに比べて太く、加工も粗いものである。これらのことから判断して、前者は何らかの木製品、後者は木杭の可能性が考えられる。第28図には、このうち前者の両端加工木製品を図示した。なお、これらの所属年代は出土層位、および加工木製品の放射性炭素年代（第13表）から判断して、縄文時代中期のものと判断される。

形態的特徴

両端加工木製品の形態的特徴を示すと、最大長65.5cm、最大幅2.8cmで、断面形は上端から下端まで直径2.5cm程度のほぼ正円形をなす。両端部はともに先が尖るように加工され、その加工痕の長さは、一方は端から最大で4.5cm、もう一方は最大3.2cmである。先端部は、身の部分から先端部に向かって加工され、この加工方法は両端とも同じである。先端部の加工は2段階に分かれており、角度の浅い加工痕の先端に急角度の加工痕がみられる。そのため、先端部は鋭利に尖っているわけではなく、潰れたようになっている。

加工の方法

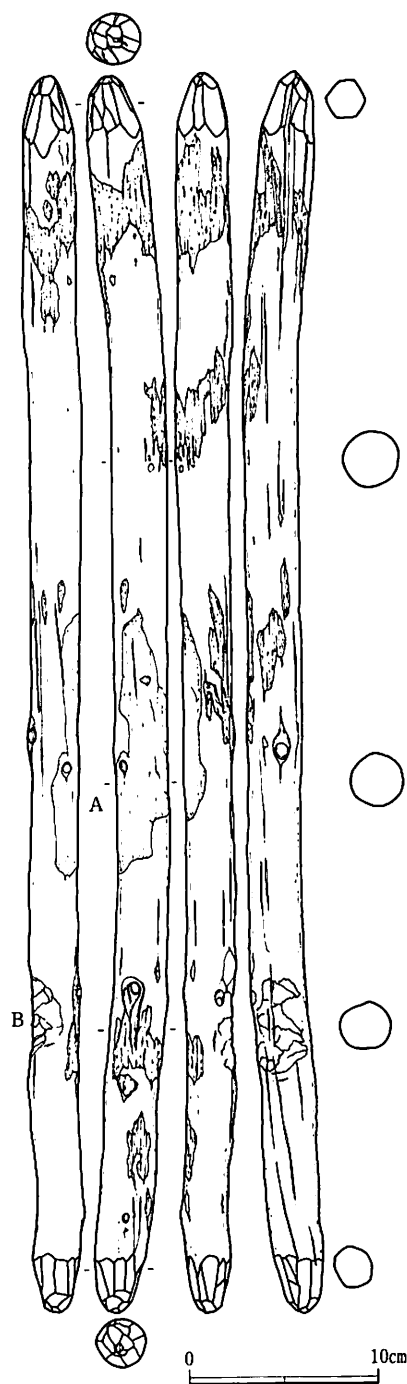
表面の樹皮は、その大部分が剥がれ落ちているものの、一部に残存していることから、樹皮全体が加工によって取り除かれたとは考えられない。しかし、ところどころにみられる節は突起がなくなるように処理されており、表面全体が少なからず整形されていたことを示している。この整形とは別に、

くぼみ

その他の部位にはみられないくぼみをもつ部分がある。1つは中央部のくぼみ（A）、もう1つは下部にみられるくぼみ（B）である。前者は加工によってくぼまされたものかどうかは定かではないが、この付近が明らかに他の部分とは質感が異なっていることから、何らかの加工によるものと考えたい。このくぼみが、人が握るためにはちょうどいい幅であることもその傍証となろう。一方、後者は粗い加工によるものである。ただし、この加工痕の大きさは中央部のくぼみよりも小さく、さらに局部的であるため、何のために加工されたものかどうかは不明である。小動物が噛んだ痕跡である可能性も否定できない。

掘棒の可能性

以上の形態的特徴から、尖頭状の両端が何らかの用途に使用されたことが推測される。また、この尖頭部は鋭利に尖っていないため、その使用対象は土などの柔らかいものであった可能性が高い。よって、この加工材は掘棒であると考えられ、中央部のくぼみはその握りの部分であろう。（芝）



第28図 出土木器実測図

6. 須恵器（第29図、図版9-4）

須恵器は坏蓋、坏身、壺、甕、甗、提瓶などが出土した。これらの大半が破片であり、接合するものは少なかった。その中で図化できたものを第29図に掲載している。

1～4は坏蓋である。1は薄い灰色で、焼成はややあまい。器壁は厚く、洗練されたつくりではない。天井部と体部の境の稜は形骸化している。2は青灰色で、焼成はきわめて良好である。内面中央には一方向の仕上げナデが施される。胎土には白色の砂粒がやや多く含まれる。3は灰色で焼成は良好である。器壁は薄く、精緻なつくりである。4は薄い灰色で、焼成はややあまい。口縁部内面には段が形骸化した沈線がかろうじて残っている。

5～11は坏身である。5はやや赤みのかかった灰色で、焼成は良好である。受部と立ち上がりの境は沈線が巡るように落ち込んでいる。また、外面には「M」字状のヘラ記号が付けられている。6もやや赤みがかかった灰色で、焼成はあまい。5と同生産地のものである。7は灰色で、焼成は良好である。胎土には白色の砂粒が多く含まれる。8は青灰色で、焼成は良好である。器壁は薄く、つくりは洗練されている。口縁部は意図的に打ち欠いてある。底部外面にはヘラ記号がつけられているが、破片のためどのような記号であるかは判断できない。9は白灰色で、焼成は不良である。10は灰色で焼成は良好といえる。胎土はキメがやや粗い。11も灰色で、焼成は良好である。

12は甗の口縁部である。青灰色で器壁は薄く、胎土はキメが細かい。焼成はきわめて良好である。口縁部の段はしっかりと作り出されている。外面は白色の灰をかぶっているのに対して、内面は全く灰をかぶっていない。そのため、口縁部を下にした逆位で焼成されたものと思われる。

13、14は坏蓋である。13は青灰色で、焼成はきわめて良好である。断面をみると外側は青灰色、内側は赤みがかかった灰色といったサンドイッチ状の断面を呈している。内面中央部は不定方向に仕上げナデが施されている。外面の坏身と接する位置までしか灰をかぶっていないため、焼成時は坏身とセットであったと思われる。14は青灰色で、焼成はきわめて良好である。断面は13と同様のサンドイッチ状になっている。また、灰かぶりの状況も13と同じである。そのため、13と14は同生産地であると思われる。

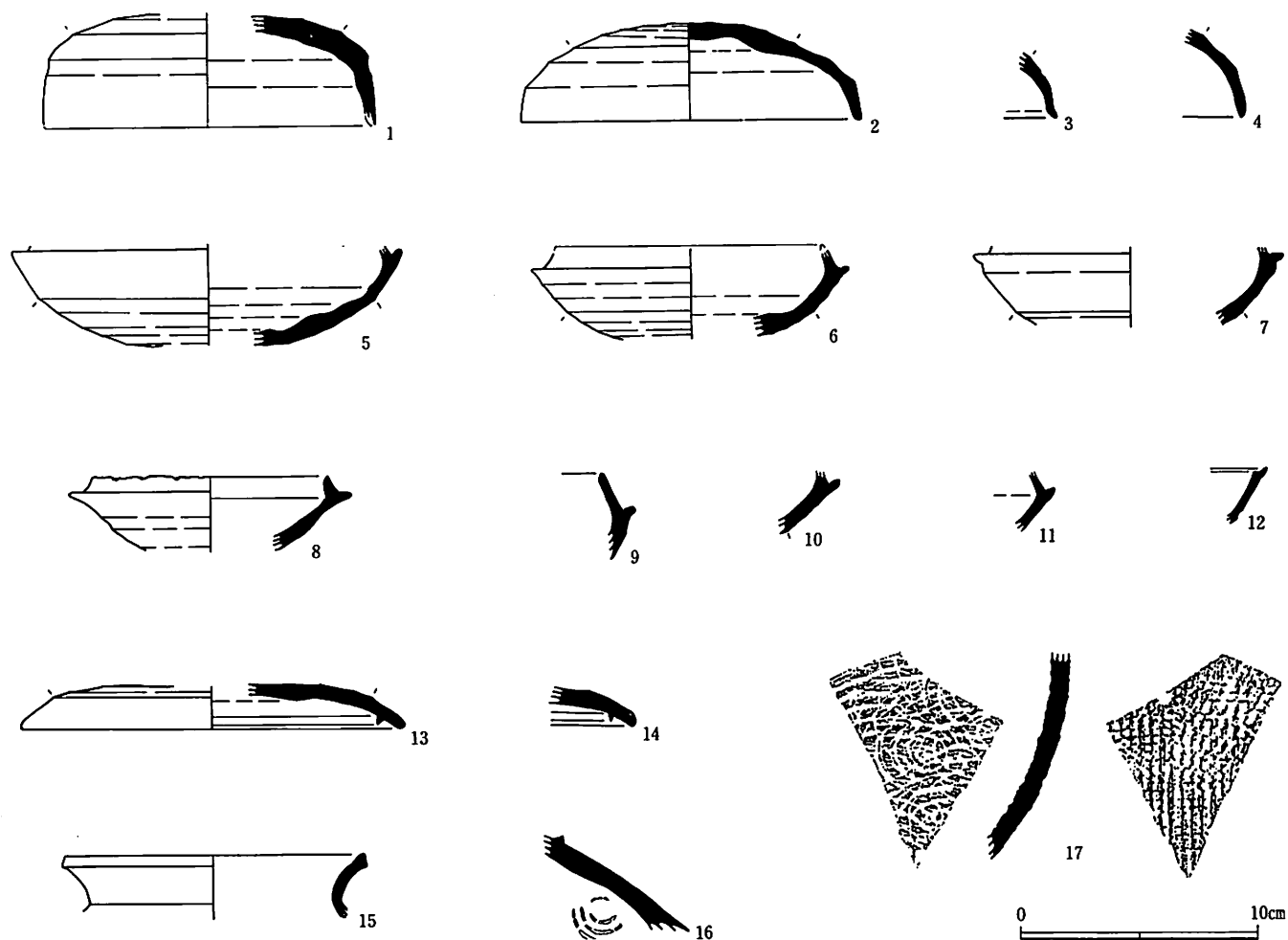
15、16は壺である。15は壺の口縁部である。薄い灰色で、焼成はややあまい。16は壺の肩部から体部である。青灰色で、焼成は良好である。内面は同心円文当て具痕がナデ消されている。外面には白色の灰をかぶっている。体部に図のような稜がつけられるものは古代の荒尾産須恵器の特徴の1つであるため、16は荒尾産の可能性はある。

17は甕である。外面は格子目タタキである。このほか、平行タタキのものも出土している。甕の破片は最も量が多いが、接合するものは1点もなかった。

このほか、図化することはできなかったが、提瓶の体部が出土している。

本遺跡出土須恵器には、MT85型式併行のものから古代のものまで、幅広い時代のものがある。第29図の須恵器は、MT85型式併行に1・9、TK43型式併行に2～7・10・12、TK209～217型式併行に8・11、それ以降に13～16を比定できる。破片まで含めてみても、古墳時代後期後半（6世紀後半）のものが最も多く出土している。

さらに、調整、胎土や焼成状況などからいくつかのグループに分けることができる。例えば5・6のような赤みがかかった灰色で、焼成がややあまい一群、3・12のような焼成はきわめて



第29図 出土須恵器実測図

須恵器の生産地

良好で、器壁は薄く、精緻なつくりである一群などである。こうした特徴は、生産地の違いを示すものと考えられる。小波戸遺跡に地理的に近い須恵器生産地には宇城窯跡群と八代窯跡群があり、須恵器の形態などからも、これらの生産地の須恵器と断定できるものは多い。しかし、16のように荒尾窯跡群の須恵器が出土していること、また石棺輸送にみられるような、海上交通といったことを考慮すると、一部の須恵器は比較的遠方の須恵器生産地からもたらされている可能性もある。

出土器種

次に出土器種についてみてみたい。上天草市近隣の宇城地域や八代地域では古墳時代後期の遺跡からの須恵器の出土数は、高坏が非常に多いという特徴がある。他の地域では高坏の出土数は蓋坏の出土数の3割ほどであるが、宇城、八代地域ではその数値は逆転し、高坏の出土数が蓋坏の出土数より多くなる。この状況は上天草市周辺にもあてはまることである。しかし、小波戸遺跡では、高坏の出土は1点も認められない。これは当時のこの地域の様相とは全く異なるもので、非常に注目すべき点である。

上述のように小波戸遺跡出土の須恵器は、現段階では判断できないいくつかの課題を提起している。これらについては、周辺遺跡での状況をふまえた上で、改めて検討していく必要がある。

(木村)

四 まとめ

1. 調査の概要

小波戸遺跡は上天草市大矢野町上小波戸に所在する。本遺跡は大矢野島西側の南向きに開けた小さな入り江にあり、海拔60mの小山から南に派生する二つの丘陵に挟まれた小さな谷間に立地している。本遺跡は昭和40年代に発見され、これまでに大矢野高等学校の阿部堅二らによって縄文時代から古代にかけて幅広い時期の遺物が採集されていた。上天草市（当時は大矢野町）は上天草市史大矢野町編纂事業の一環として、良好な遺物包含層の存在と自然遺物の出土が期待される小波戸遺跡の調査を行うに至った。

小波戸遺跡
の位置

調査では、8㎡という調査区に比して質、量ともに多様な遺物が多層位にわたって検出されるという成果を得た。以下にその成果をまとめる。（芝）

2. 調査の成果

(1) 多層位にわたる遺物包含層の確認

本遺跡の層位は18層に区分され、15層は古墳時代から古代の包含層、16層から18層は縄文時代の包含層である。17層では土器や石器などの人工遺物とともに、大量の木片、植物遺存体などの自然遺物も出土した。

15層で出土した須恵器は、6世紀後半のものを中心として古代のものまで幅広い時期のものがみられる。器種としては坏蓋、坏身が最も多い。上天草市近隣地域において、古墳時代後期には高坏が卓越するという特徴があるが、本遺跡において高坏は全く出土していない。

出土須恵器
の特徴

16層から18層で出土した縄文土器は、16層では縄文時代後期（南福寺式、鐘崎式、市来式）、17層では縄文時代中期から後期前半（並木式、阿高式）、18層では縄文時代前期（曾畑式、轟C式、尾田式）が主体を占める。このことは、縄文時代前期から後期前半に至る長い間連綿と人々の生活が続いていたことを示している。また、石器組成の特徴として石鏃などの剥片石器よりも、石斧や石錘、礫器などの礫石器が多いということが挙げられる。この状況は層位的にみてもほとんど変わらない。石材利用についてみると、剥片石器と礫石器で異なっている。すなわち、剥片石器には、腰岳などの西北九州産黒曜石や安山岩が用いられ、礫石器には、遺跡近傍で採取される頁岩や砂岩が用いられるという傾向がある。

縄文土器

石器組成の
特徴

(2) 木器および植物遺存体の検出

17層において、掘棒と考えられる加工木材、および木杭状の加工木材2点が出土した。さらに、その性格は不明であるが、大量の木材片が出土したことを考えると、木材の利用が普遍的なものであった可能性を示している。

17層出土の
木器

17層からは上述の人工遺物の他に、多くの植物遺存体が出土した。回収された植物遺存体は合計429（個／粒／片）で、堅果皮が最も多く（311片）、次いでブナ科（イチイガシ・スダジイなど）の堅果が多い。高宮広土は、こうしたアク抜きを必要としない堅果類を選択的に利用していたと評価する（高宮2002）。なお、17層で出土した掘棒および植物遺存体の放射性炭素年代測定（AMS法）を行ったところ、いずれも紀元前3千年紀後半の値を得た（第13表）。この値は17層中で出土した土器型式とも調和的であり、これらの植物遺存体、および木器は縄文時代中期のものと考えられる。（芝）

植物遺存体

放射性炭素
年代

3. 天草諸島における縄文時代の中での小波戸遺跡の位置づけ

環玄界灘漁
撈文化

生業活動

本遺跡出土資料は、縄文時代前期から後期前半にかけての人々の生活を考える上で重要な情報を提供している。天草諸島を含む西北九州地域において、縄文時代前期から特徴的な漁撈文化が展開する。これは環玄界灘漁撈文化と呼ばれ（山崎2002）、その要素として組み合わせの銚、石銚、西北九州型結合式釣針、回転離頭銚、尖頭状・双角状礫石器が挙げられている。本遺跡において、石錘や礫器など、漁撈活動を示す遺物は出土しているものの、そうした漁撈文化独特の石銚や釣針等は出土していない。また、漁撈活動の直接的な証拠となりうる魚骨なども出土していない。ただし、次部で紹介する採集遺物の中には石銚があり、礫器や石錘も多量に採集されている。このことから、漁撈活動が生業の中でも一定の比重を占めていたことは間違いないだろう。

しかし、多量の植物遺存体や磨石、敲石、石皿が存在していることも注意せねばならない。天草諸島で植物遺存体の出土した縄文時代遺跡として、天草市の椎ノ木崎遺跡、大矢遺跡、一尾貝塚が挙げられる。これらの遺跡からは、縄文時代中～後期の泥炭層からイチイガシや編みカゴの破片が出土しており（山崎2002）、本遺跡出土の植物遺存体の構成や年代ともよく一致する。このことは、植物採集およびその加工といった活動も生業の中で重要な位置を占めていたこと、そしてそれが天草地域でも同様な状況であったことを示すと考えられる。17層でみられた木材利用の痕跡はこのことを端的に示すものと考えられる。

今度の課題

今回の調査成果は漁撈活動と植物採集活動の一端を示すと考えられるが、調査区範囲の狭さゆえにこれが遺跡全体でいえるかどうかは不明である。ただし、これまで大矢野島内で縄文時代の生活史を綴る基礎資料を欠いていたことを考えると、今回の出土資料は基礎資料となるものと思われる。今後の調査が、今回の調査成果を活かすものであることを期待したい。（芝）

参考文献
大坪志子 2002「9. 熊本県小波戸遺跡の植物種子」「先史・古代東アジア出土の植物種子（2）」熊本大学文学部：pp. 117～127
高宮広土 2002「小波戸遺跡出土の植物遺体」「先史・古代東アジア出土の植物種子（2）」熊本大学文学部：pp. 124～127
山崎純男 1991「第1章 原始・古代」「本渡市史」本渡市：pp. 41～119
山崎純男 2002「第1章 原始・古代」「五和町史」五和町：pp. 112～264

第13表 小波戸遺跡出土木器および植物遺存体の放射性炭素年代

資料	出土層位	¹⁴ C年代	補正 ¹⁴ C年代	暦年代
掘棒	17層	4160 ± 40yBP	4150 ± 40yBP	CalBC2860, 2810, 2690
マツ球果	17層	4370 ± 40yBP	4340 ± 40yBP	CalBC2920
マツ球果	17層	4320 ± 40yBP	4290 ± 40yBP	CalBC2900

第4部

上天草市所在遺跡採集資料報告

小波戸遺跡・江樋戸遺跡
柳貝塚
荒木浜遺跡
治郎田遺跡
満越遺跡
串遺跡



分布調査風景（維和島梅ノ木遺跡にて）

一 資料報告に至る経緯

大矢野町にはこれまでに町内で出土した考古学的遺物が各所に散在していて、その実態が明らかにされることはほとんどなかった。わずかに山崎純男により、五和町史の中や氏の論文に取上げられ、柳貝塚の一部資料が熊本大学考古学研究室報告でなされているに過ぎない（村上編2000、山崎2002、甲元編2005）。町史においては執筆当時の認識により叙述がなされるために、書かれた内容が長期間にわたって、有用であるとは限らないのであり、その欠を補うために大矢野町内でこれまでに採集された遺物を町史編纂のための基礎資料として公開することとした。こうした基礎資料こそが地域史の研究にとっては最も重要であると考えられる。

これまでの
報告資料

基礎資料の
公開

今回の報告
資料

今回報告する資料は大矢野高等学校、上天草市大矢野町教育委員会、宇城市教育委員会所蔵品であるが、中でも大矢野高等学校に保管されていた資料が大部分である。大矢野高等学校所蔵品はかつてこの学校に勤務されていた阿部堅二先生が中心となり行われた、発掘調査や遺跡踏査により収集されたものである。なお、資料収集当時から30年以上経過しているために、一部に資料混濁がみられるので、明確に採集遺跡名が把握できるものに限っている。（甲元）

参考文献

甲元眞之編 2005「第3部 柳貝塚採取資料報告」「上天草市史大矢野町編資料集」1 上天草市：pp.53-64

村上浩明編 2000「Ⅲ 資料報告」「考古学研究室報告」第36集 熊本大学文学部考古学研究室：pp.1-13

山崎純男 2002「第1章 原始・古代」「五和町史」五和町：pp.112-264

二 遺跡の位置と現状

大矢野島は、天草諸島の北西端に位置する面積約29.91km²の島であり、その大きさは天草諸島の中でも下島、上島、長島に次ぐものである。東は三角の瀬戸を隔てて九州本島と接し、南は永浦島、樋合島を挟んで天草上島に接する。したがって、大矢野島は九州本島から天草上島、下島を結ぶルート上にあり、天草諸島への玄関口といえる。

大矢野島の
位置

大矢野島の地形は、全体的にみて低平であるが、南北でややその状況が異なる。島の北側には、飛岳（229m）、柴尾山（225m）、大矢野岳（124m）などの100mを超える山が存在しているのに対して、島の南側には80m以下の小規模な丘陵が点在しているという対照をなす。島の東西の地形も異なる。島の西岸は丘陵の裾が海岸にせまり、急崖をなすところが多く平地が少ない。一方の東岸は谷が内陸に深く入っていたが、開析が進んで埋没が進み、低い平地となっている。こうした地形の違いは、先史時代の遺跡立地と大いに関係している。

大矢野島の
地形

天草諸島には、多くの縄文時代遺跡が存在しており、代表的な遺跡として、沖ノ原遺跡、一尾貝塚、大矢遺跡（以上天草市）などが挙げられる。山崎純男は、これら本地域の縄文時代遺跡の立地のあり方に2つのパターンがあることを指摘している。1つは海岸部から海底に位置する1群、もう1つは河川に沿った段丘面や丘陵斜面に立地するものである。前者では多様な遺物が出土することに対して、後者では限られた遺物のみが出土することから、両者の性格の違いを指摘している（山崎1991・2002）。

縄文時代遺
跡の位置

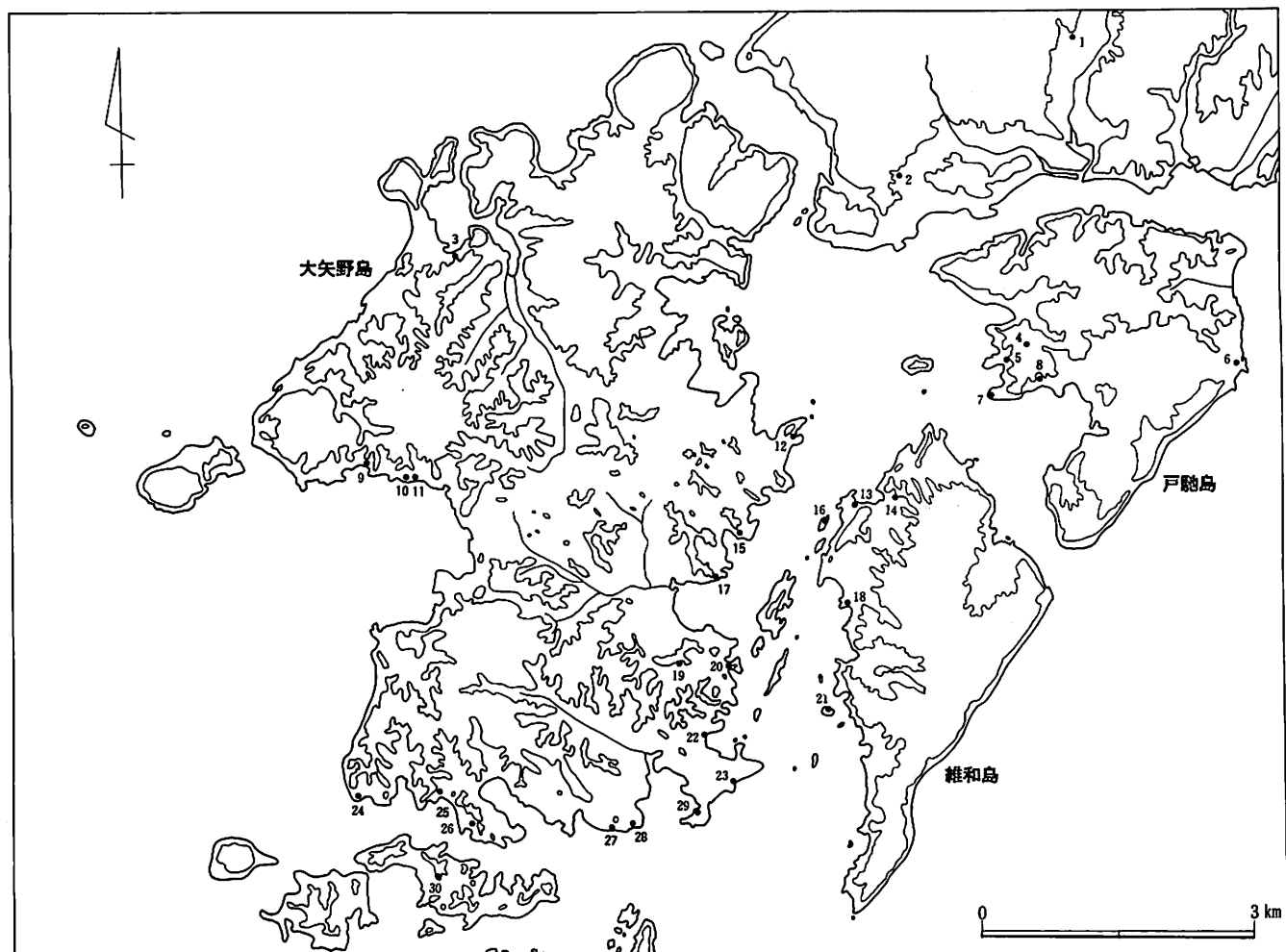
大矢野島の縄文時代遺跡の大部分は、海岸に面しており、さらに遺跡の分布が大矢野島の東側および南側に集中している状況がみられる（第30図）。さらに細かくみると、これらの遺跡

が小規模な入り江に存在しているという傾向が指摘できる。西側や北側にも少ないながらも遺跡は存在している。しかし、例えば小波戸遺跡や串遺跡は、南に向かって開口している入り江や、大きな内湾に立地している。したがって、遺跡の多くは、低平で小規模な入り江の多い南東岸に立地しているといえ、このことは島の地形に反映されたものと考えられる。

分布調査の
実施

これらの縄文時代遺跡の現状を調査するために、上天草市は2005年4月29日から5月1日にかけて分布調査を実施した。この調査は、熊本県遺跡地図、上天草市大矢野町中央公民館および大矢野高等学校所蔵遺物の注記を参考にしながら行われた。その結果を第14表にまとめている。遺跡の大部分が、小規模な入り江か、海岸から海底にかけての地点に立地している。柳貝塚や小波戸遺跡のように、干潮時になると現在でも海岸から海底にかけて遺物採集が可能な地点もある。しかし、残念なことに、これらの従来知られていた縄文時代遺跡の多くは、近年のエビ養殖場としての利用や、埋め立てによる地形の改変によって破壊されている。したがって、これらの遺跡付近では遺物採集はできず、当時の地形を知ることも非常に難しい。

遺跡の現状



- | | | | | |
|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| 1. 洲の上貝塚 | 2. 際崎貝塚 | 3. 串遺跡 | 4. 鬼塚原遺跡 | 5. 小崎遺跡 |
| 6. 浜の洲貝塚 | 7. 辺田遺跡 | 8. 辺田貝塚 | 9. 犬飼海岸遺跡 | 10. 小波戸遺跡 |
| 11. 江樋戸遺跡 | 12. 大潟遺跡 | 13. 梅ノ木遺跡 | 14. 梅ノ木貝塚 | 15. 治郎田遺跡 |
| 16. 禿島遺跡 | 17. 荒木浜遺跡 | 18. 弓田貝塚 | 19. 野米貝塚 | 20. 野米遺跡 |
| 21. 和田島遺跡 | 22. 小瀬戸遺跡 | 23. 貝場遺跡 | 24. 小泊遺跡 | 25. 満越遺跡 |
| 26. 五杷浦遺跡 | 27. 柳貝塚 | 28. 小柳遺跡 | 29. 前平遺跡 | 30. 永浦支石墓 |

第30図 大矢野島・維和島周辺の遺跡分布図（縄文・弥生）（アミは標高20m以上を示す。）

第14表 遺跡の立地と現状および表面採集遺物

番号	遺跡名	立地	遺物	現状
3	串遺跡	大矢野島北西の内湾に立地する。	石錘	埋め立てられている。
9	犬飼海岸遺跡	大矢野島南西の小規模な入り江に立地する。その入り江は南に開口する。	土師器、須恵器	堤防によって大部分は破壊されているが、一部砂丘が残される。干潮時に遺物採集可能。
10・11	小波戸遺跡 江樋戸遺跡	大矢野島南西の小規模な入り江に立地する。その入り江は南に開口する。2003年4月の発掘地点は、現在の海岸線から約100m 内陸に入ったところである。	縄文土器、土師器、須恵器、石器	堤防と道路によって遺跡が分断されている。現在も遺物採集可能。
12	大潟遺跡	大矢野島の北東岸に立地する。周囲はいくつもの独立丘陵で囲まれている。		埋め立てられている。
15	治郎田遺跡	大矢野島東岸の小規模な入り江に立地する。	縄文土器、石器	埋め立てられている。
17	荒木浜遺跡	大矢野島東岸の小規模な入り江に立地する。治郎田遺跡のある入り江の1つ西側の入り江に所在。	縄文土器、土師器、磨製石斧、石錘	埋め立てられている。
19	野米貝塚	大矢野島南西岸の野牛島の対岸に所在する。小規模な入り江の砂丘上に立地する。		埋め立てられている。
20	野米遺跡	野米遺跡と同じ入り江に所在するが、野米遺跡よりも少し内陸側に入った台地上に立地する。遺跡の背後には急峻な山が迫る。		民家の庭。
22	小瀬戸遺跡	大矢野島南東岸の小規模な入り江に立地する。		埋め立てられ、民家が建ち並ぶ。
25	満越遺跡	大矢野島西岸の小規模な入り江に立地する。	磨製石斧、石錘	埋め立てられている。
27	柳貝塚	大矢野島南西の小規模な入り江の砂丘上に立地する。干潮時には、砂丘が現在の堤防から約30～40mほど沖合いに続く。	縄文土器、須恵器、石器	砂丘。現在も遺物採集可能。

しかし、幸いにも、採集資料は上天草市大矢野町中央公民館、宇城市教育委員会にて保管され、さらに昭和40年代に大矢野高等学校考古学部によって、旧大矢野町に所在する遺跡の発掘調査や遺物採集が行われており、それらが大矢野高等学校で保管されていた。このうち大矢野高等学校に保管されていた遺物量は多量で、ダンボール箱等にして5箱以上に達した。ただし、調査以来30年以上の歳月を経ており、ダンボール箱や小分けされていた袋等の老朽化が著しく、遺物の再整理を必要とした。再整理は、まず注記などの有無を確認し、遺物の帰属を明らかにすることから開始した。その後、遺跡ごとに遺物の分類作業、実測図化作業を行い、今回の報告に至った。

採集資料

再整理の必要性

なお、今回の報告資料は、紙幅の都合上、大矢野島に所在する小波戸、柳、荒木浜、治郎田、満越、串の縄文時代のものと考えられる資料に限っている。

(芝)

参考文献

- 岩本政教他 1964『熊本県の地理』光文館
 山崎純男 1991「第1章 原始・古代」『本渡市史』本渡市：pp.41～119
 山崎純男 2002「第1章 原始・古代」『五和町史』五和町：pp.112～264

三 採集遺物

1. 小波戸遺跡・江樋戸遺跡（第30図10・11、第31～35図、図版11・12）

小波戸遺跡では、縄文時代から古代までの遺物が多量に採集されている。なお、江樋戸遺跡とされている遺物もあるが、ここでは一括しておく。（芝）

（1）縄文土器（第31図、図版11-1・2）

小波戸遺跡から表採された土器片は、前期から後期の幅広い時期にかけてのものである。前期に属する縄式系統のものが若干認められるが、ほとんどが中期後半から後期の土器である。口縁部や胴部片の文様をみると、鐘崎式が特に多い。

縄文時代前期の土器

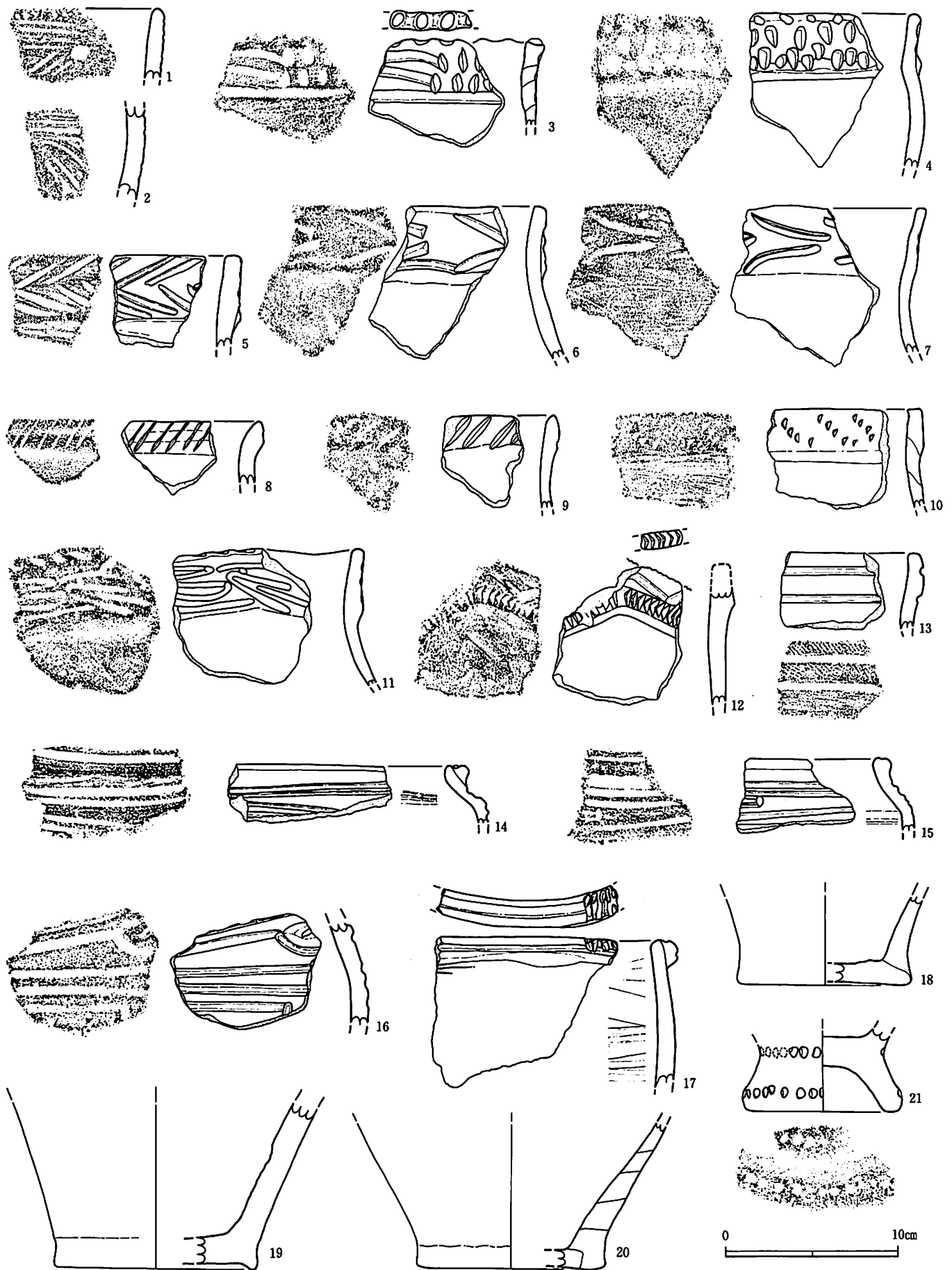
1、2は前期の縄式系と考えられる土器である。1は内外面ともナデ調整される。口唇部外面には斜行する一列の凹点文が施され、すぐ下に横走する4条の浅い凹線文が施される。さらに、その下には斜走する4条の凹線文が施される。これらの施文には断面が長方形の道具が使われる。また、内外面ともに穿孔の痕跡が認められる。2は内外面ともナデ調整される胴部片である。横走する凹線が施された後、その下に曲線が施される。3は中期の阿高式と思われる土器である。内外面ともナデ調整され、口唇部には凹点文列が施される。外面にみられる文様は、口縁から3cm下に横走する凹線によって区画され、その区画の中は湾曲する凹線文と凹点文で構成される。口唇部と外面文様の施文具は同一の先端が丸みをもった棒状工具である。

縄文時代後期の土器

4～7は後期初頭に位置づけられる土器である。4の文様は、口縁部から3cm下に横走する粘土帯によって区画され、その区画の中は凹点文によって構成される。5の口唇部は平坦で、外面の口縁部文様帯がある器壁は、胴部のそれよりも厚みをもつ。文様を観察すると、まず上方の斜線が施された後、下方に斜線が施される状況がみてとれる。6は口縁部に三角柱状の工具によって、斜線および曲線が施される。7の口縁部文様帯はナデ調整によって区画される。8～10も4～7と同様に口縁部文様帯のある器壁が厚みをもっている。8、9には斜線が、10には押点文が斜位に施される。時代の位置づけに関しても4～7と同様の時期と考えられる。11、12は山形口縁をもち、口縁部文様帯も口縁部形態のように山形をなす。11の文様は口唇部に凹点文が施され、外面には凹線文が施される。12の口縁部の平坦面には連続して刺突文が施される。口縁部から約2cm下には山形に粘土紐を付け、その粘土紐の上に押印文が施される。13は磨消縄文土器である。口縁部から2.5cmのところまで縄文が施される。その後、先端が丸みをもつ棒状工具で横走する凹線2条が施される。口縁付近は直立しているが、肩部は若干外に張り出す。14～16は後期後半の鐘崎式と考えられる。14、15は上端外面に粘土を貼り付け肥厚させ、口唇部に平坦面を作る。口唇部には、横走する凹線文が施される。14の外面には、縄文と沈線文が認められる。15は沈線のみが施される。16は胴部片で、外面には粘土を貼り付け、渦巻状にしている。縄文は認められない。17は14、15と同様に口縁上端外面に粘土を貼り付け、凹線文が施される。その後、口唇部に直交して断続的に沈線が施される。口縁部外面にも1条の凹線文が施される。

底部資料

18～20は中期後半から後期のものと考えられる深鉢形土器の底部である。内外面ともにナデ調整が施されるが、20の外面にはケズリの痕跡が認められる。鯨椎骨圧痕は認められない。21は台付皿形土器の脚部である。外面には2条の凹点文が施される。（金）



第31図 小波戸遺跡・江樋戸遺跡表面採集資料実測図（縄文土器）

(2) 石器 (第32～35図、図版11-3・12)

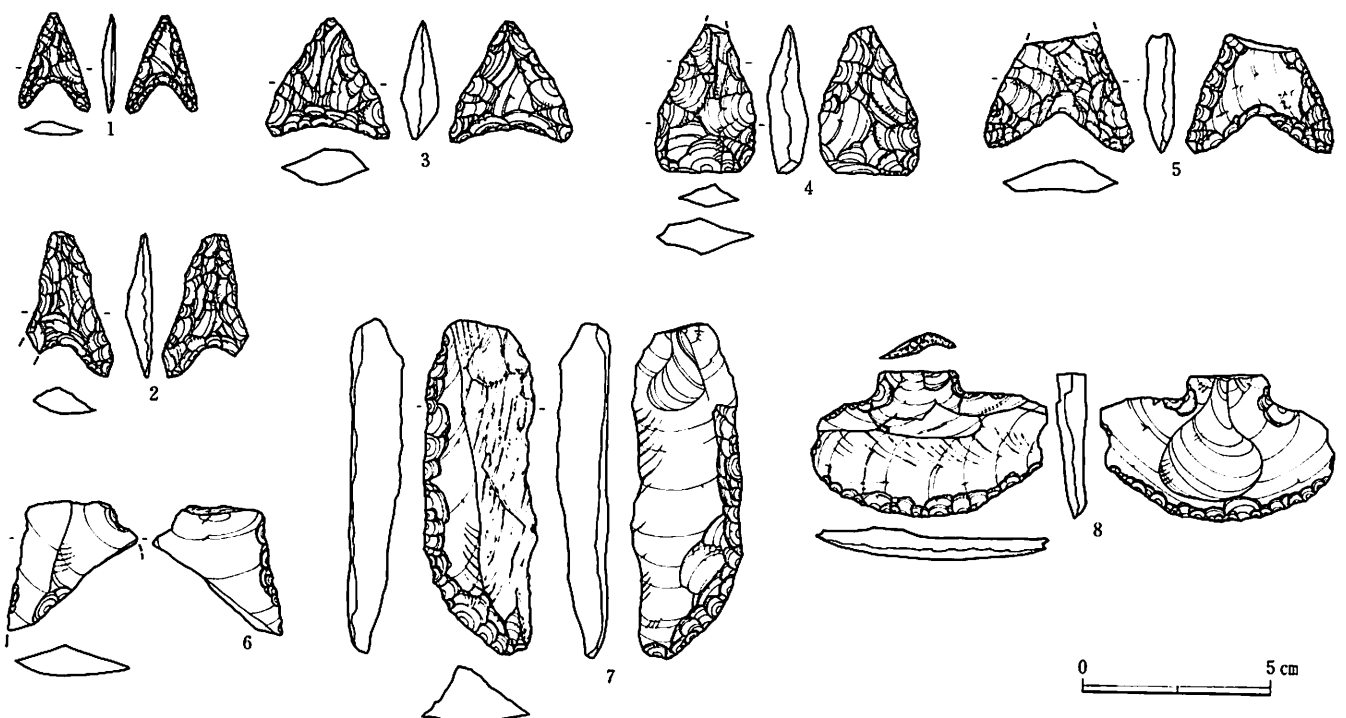
表面採集によって得られている石器は総計292点である。これらの石器は剥片石器と礫石器に分けられる。ここではその中でも特徴的と思われる39点を図示した。

- 石鏃** 1、2は凹基無茎鏃である。1は安山岩製の剥片が用いられ、その縁辺に加工が施される。裏面に剥片の主要剥離面を残すが、概ね加工は丁寧である。2も安山岩製の剥片の縁辺に加工が施されたものである。その加工は粗く、中央部には厚みを残す。先端部付近にはヒンジフラクチャーを起こした痕跡がみられる。片脚を欠損する。3は安山岩製の石鏃で、全体的に1cm前後の厚みがある。4は安山岩製で、剥片の縁辺に加工が施される。その加工は非常に粗く、ひとつひとつの剥離痕は非常に大きく、バルブも明瞭に残る。したがって、石鏃の未製品の可能性がある。5は安山岩製の剥片が横位に用いられ、その縁辺に加工が施される。形態的にみて石鏃の可能性もあるが、残存長で3cmを超えており、その大きさから鋸である可能性が高い。
- スクレイパー** 上半部を欠損する。水で洗われており摩滅が激しい。6、7は安山岩製のスクレイパーである。石刃の縁辺に二次加工が施される。6は下部を大きく欠損する。7の左縁辺には細かい加工が施される。背面および打面に礫面が残り、礫面があるところには加工は全く施されない。8は安山岩製の石匙である。横長剥片を素材として、その縁辺に加工が施される。しかし、その加工はつまみ部の挟りと、刃部の作り出しのみにとどまる。打面には礫面が残る。
- 石匙**
- 磨製石斧** 9～21は磨製石斧である。9は安山岩製で長軸の両端に刃部をもつ。10は摩滅が激しく、ほとんど擦痕が認められない。11、12は安山岩製である。11は全面的に研磨されているのに対して、12は刃部付近にしか研磨痕が確認されない。両者とも剥離によって整形された後、研磨される。13は砂岩の扁平な礫の縁辺を打ち欠いただけのものである。14は全面的に研磨されており、表裏面ともに刃部が作り出される。基部を欠損する。これまでの石斧と比較して、15、16は中央部に厚みをもち、重厚な印象を受ける。16は安山岩製で研磨痕は刃部のみにみられる。基部を欠損する。17は扁平の礫の縁辺を打ち欠いただけのものである。研磨痕は確認できず、未製品である可能性もある。上部を欠損する。18～20の表面には敲打痕や剥離痕がみられる。20は剥離痕と敲打痕、研磨痕がみられる。これらの切り合い関係を観察すると、まず剥離によって形作られ、その後敲打による整形、最後に研磨によって刃部が作り出されるという工程を追うことができる。おそらく、18、19、21も同様の工程によって製作されたものと考えられる。石斧は形態的に多様で、例えば9は最大長が6cmしかないのに対して、20は残存長で17cmにおよぶ。これらの石材をみると、小型～中型のものは安山岩製が多く、中型から大型のものには砂岩や頁岩が用いられるという特徴がある。これらは全面的に研磨されているものが少なく、刃部のみ研磨されるものが多い。
- 石斧の製作工程**
- 石錘** 22～31は石錘である。石錘は採集品の中でも最も多い。これらは全て楕円形の礫の両端を打ち欠いただけのものである。ほとんどが楕円礫の長軸の両端に剥離痕をとどめるもの(22～27)であるが、まれに短軸の両端に剥離痕をとどめるもの(28～30)も存在している。剥離痕は長軸か短軸かのどちらかに残るが、それに直交する軸の両端にもくぼみがみられるものもある。27には紐ずれ痕が観察される。形態的には小型(5～10cm)のものから大型(15cm前後)のものまでバラエティーに富んでいる。このうち最も多いのは10cm前後のもので、30のように長軸、短軸ともに15cmにおよぶような大型品はほとんどない。
- 礫器** 32～38は礫器である。32は頁岩製の大型剥片の縁辺を加工したものである。左下半部は大き

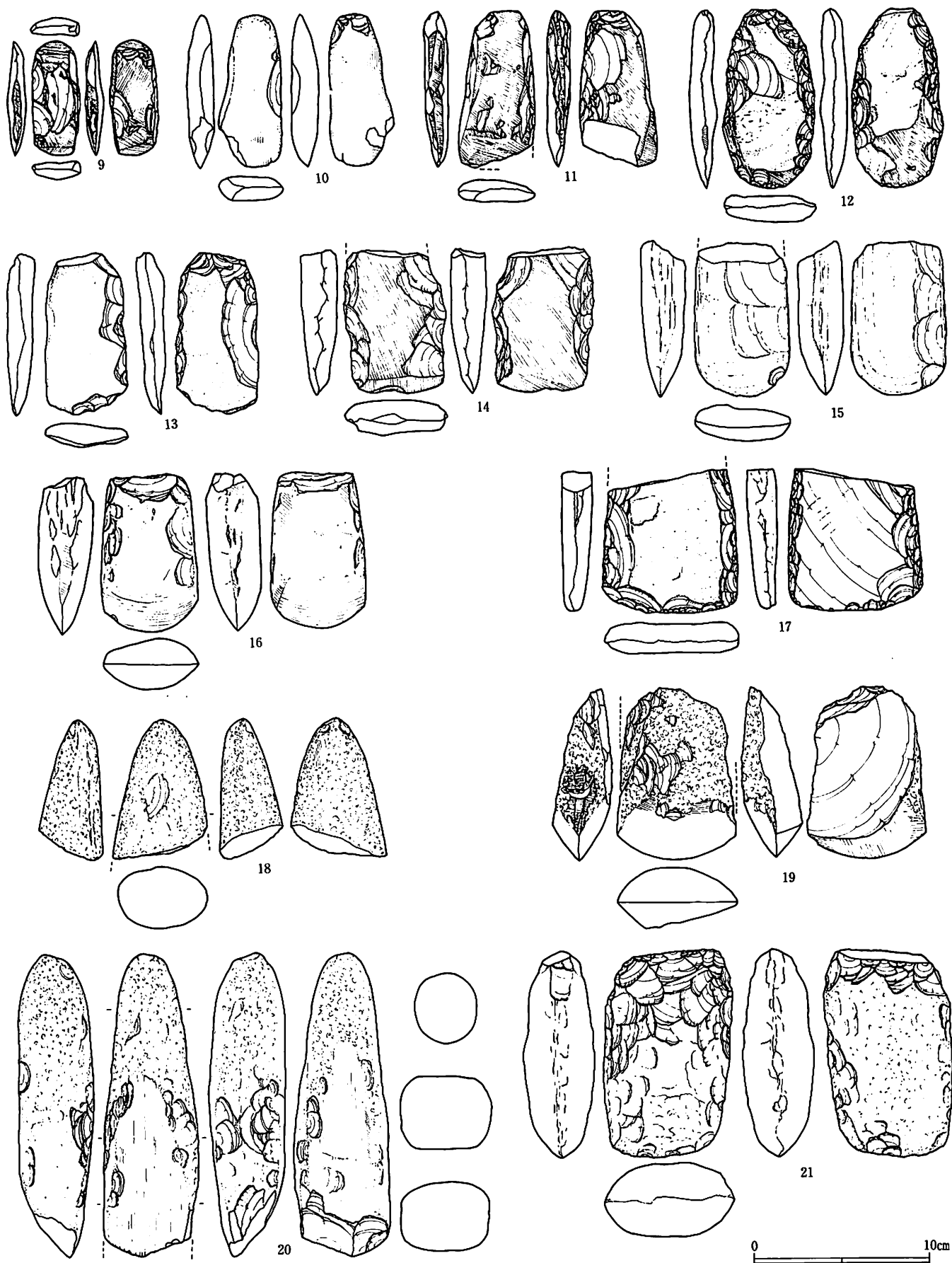
く欠損しており、復元するとラグビーボール状の形態が想定される。その上部には袈りを作り出す加工が認められ、それがつまみ部として機能したことも考えられる。しかし、全体として加工は粗く、厚みは3 cm以上もあり、用途は不明である。33は尖頭状礫器と考えられる。礫の一端に加工が施され、尖頭部が作り出される。34は扁平の礫の四隅全てが尖頭状に作り出された礫器である。これらのうち3つの尖頭部は欠損しているため、明確に作り出されていたかどうかは不明である。35～38は双角状礫器である。35、36は礫の一端に加工が施される。35は左下半部が欠損しているものの、欠損した面を観察すると、同様に片方の尖頭部が長く作り出されたものと判断できる。チャート製。36の尖頭部は2つ作り出されるが、一方が長く、もう一方が短いという非対称形をなす。これに対して37、38の尖頭部は2つあり、これらは左右対称をなす。38の左半部は欠損している。38のつくりは非常に丁寧であり、特に右半部には全面的に加工痕が認められる。

小波戸遺跡採集の石器は、剥片石器よりも礫石器が多い。特に石鏃は少なく、石錘や石斧、採集石器の特徴
礫器の類が多い。このことは発掘調査の成果ともよく一致する。

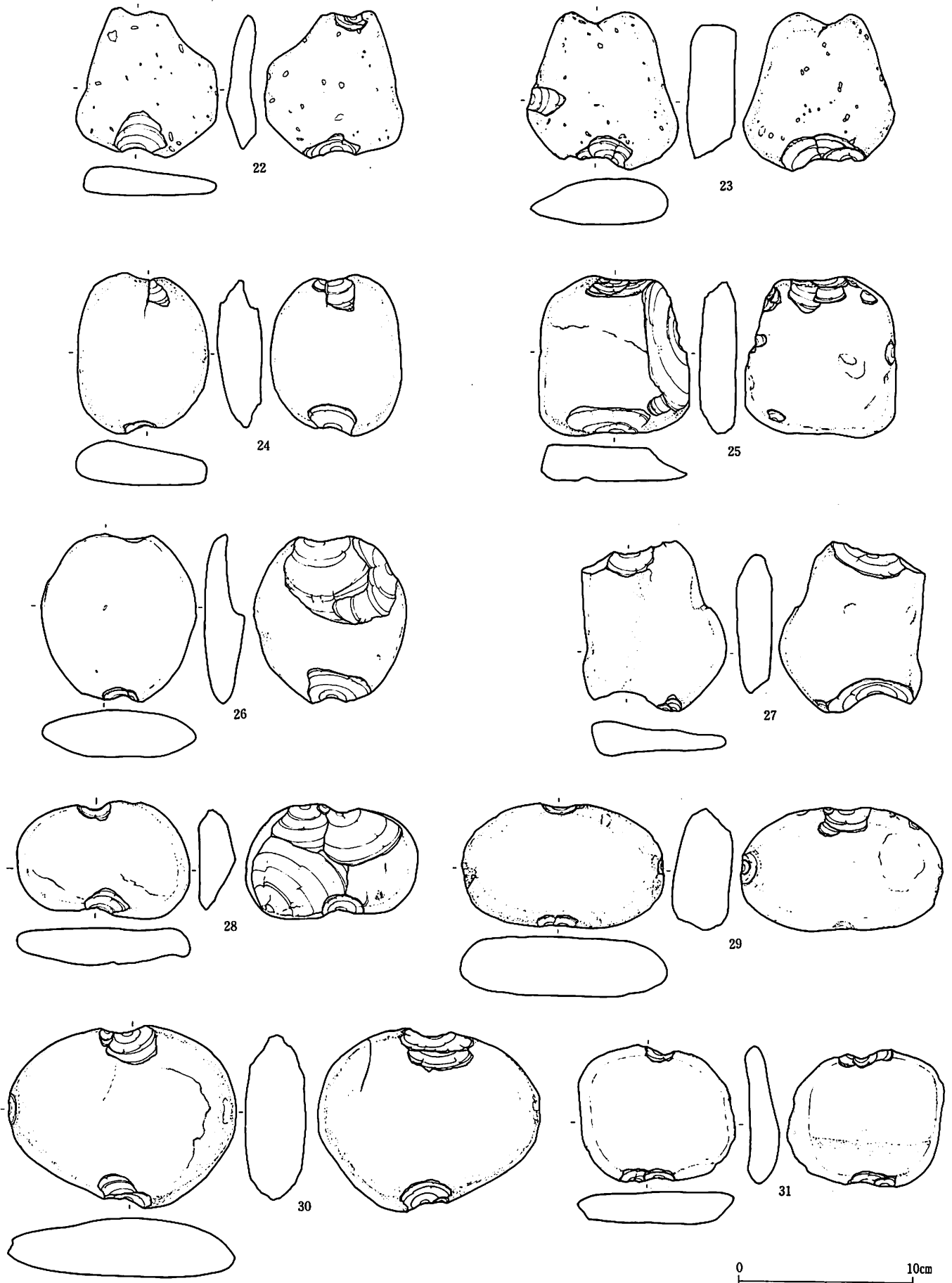
石斧は多量に採集されており、これらは形態的に多様性に富む。前述のように、石斧は9、10のような小型品（5 cm前後）から20、21のような大型品（15 cm以上）まで存在する。これらは木材加工などに供されていた可能性が高いが、全て同様の機能を有しているとは考えられない。さらに、石錘の多さと形態的多様さ、加えて岩礁性貝類の採捕具と想定されている双角状礫器の存在は、漁撈活動に特化した生業活動を示唆する。このことは、遺跡が海岸沿いに立地していることと大いに関係するものと思われる。ところで、双角状礫器の使用法双角状礫器の使用法に関しては、島原半島の尖頭状礫器を分析した松藤和人が、その先端部の摩滅に注目し、先端部を用いた敲打を主とする道具であると推定している（松藤1987）。この点を考慮し、例えば38の先端部を観察すると、摩滅が著しく、松藤の推定を裏付けている可能性が高い。（芝）



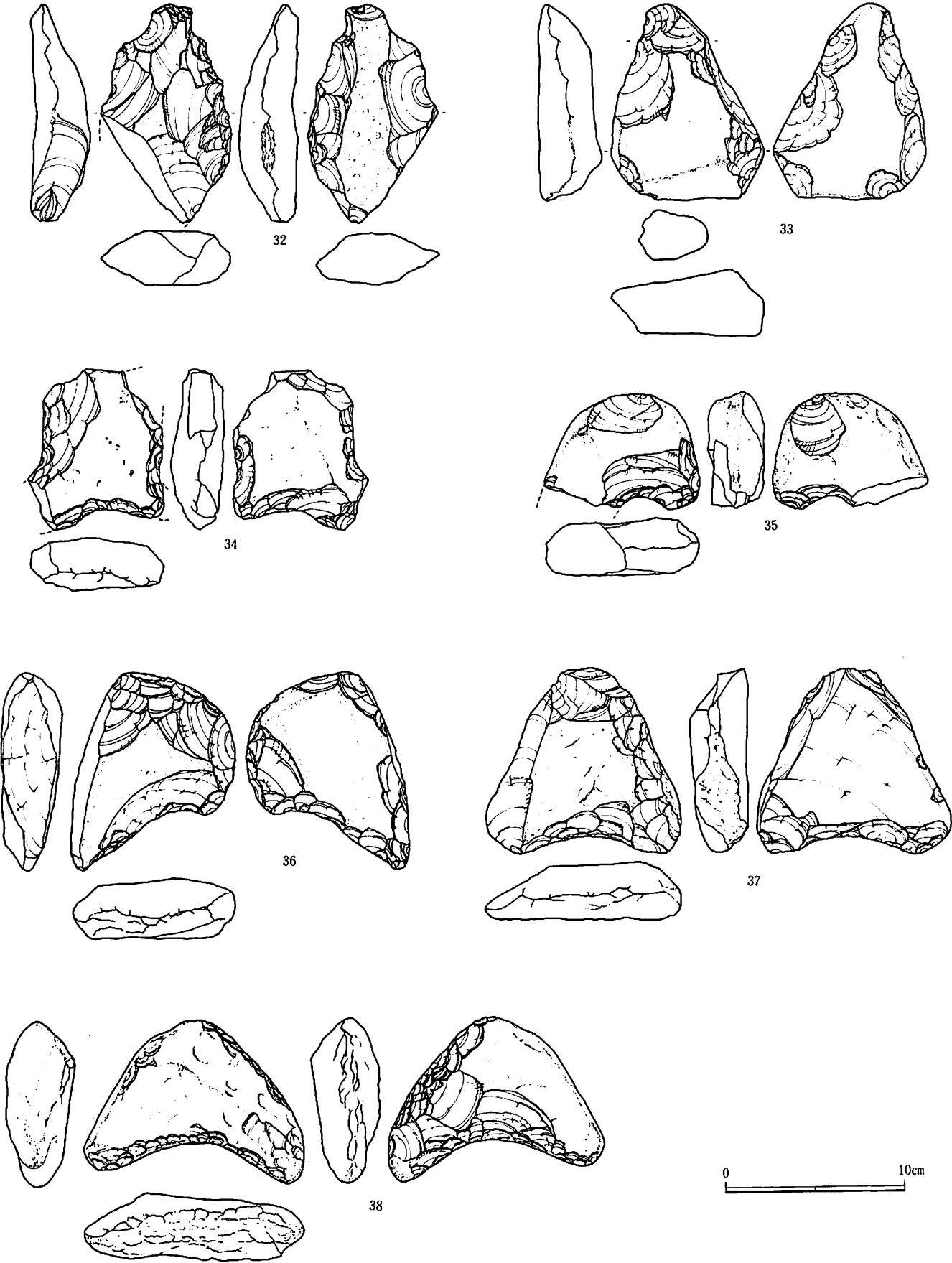
第32図 小波戸遺跡・江樋戸遺跡表面採集資料実測図（剥片石器）



第33図 小波戸遺跡・江樋戸遺跡表面採集資料実測図 (石斧)



第34図 小波戸遺跡・江樋戸遺跡表面採集資料実測図（石錘）



第35図 小波戸遺跡・江樋戸遺跡表面採集資料実測図（礫器）

2. 柳貝塚（第30図27、第36～38図、図版13）

柳貝塚は熊本県上天草市大矢野町中柳に所在する。遺跡は現在平均海面下にあり、干潮時には土器片をはじめとする様々な遺物が砂泥干潟の上に姿を現す。本遺跡の採集資料に関して、上天草市大矢野町教育委員会および熊本大学文学部考古学研究室所蔵の採集資料についてはこれまでも紹介してきた（村上編2000、甲元編2005）。今回は、大矢野高等学校所蔵資料および宇城市教育委員会所蔵資料を紹介する。



第36図 柳貝塚近景

（1）土器（第37図、図版13-1）

柳貝塚から採集された土器片は多数存在しているが、大半が小片である。これらを時代別にみると、縄文早期末から前期のもので、特に轟式系統のものが多い。今回は文様があり、時期がある程度特定できる10点を図示した。

1～8は前期に属する土器である。その大部分は、外面に貝殻条痕調整が施される轟式系統の土器である。1は外面にのみ貝殻条痕調整が施され、口唇部には貝殻による刻目が施される。2は内外面ともナデ調整である。外面には横位の微隆起線が貼り付けられ、棒状工具による刺突文が施される。3、4は外面に貝殻条痕調整が施される。5～7は内外面とも貝殻条痕調整が施される。8は内外面ともに貝殻条痕調整が施され、外面の調整は口唇部では斜め方向に、胴部では横方向に施される。9、10は中期の阿高式土器である。内外面ともにナデ調整で、横走する凹線が施される。

縄文時代前期の土器

縄文時代中期の土器

（2）石器（第38図、図版13-2・3）

1～26は石鏃である。ここでは未製品を含め26点図示した。全体的に丁寧なつくりのものが多い。未製品と思われるもの以外は全て凹基無茎鏃である。26点中欠損しているものは16点、完形品は10点である。利用される石材は2・4・6・8が漆黒色黒曜石で、9・11が青灰色黒曜石、その他は全て安山岩である。

石鏃

1～22は凹基無茎鏃である。1はやや粗いつくりである。2は全面に調整が施されるが、中央部に厚みをもつ。表面には擦痕がみられる。3は両面とも丁寧な調整剥離が施される。4は左側辺部にふくらみがあり、未製品の可能性がある。表面に丁寧な調整剥離がみられるが、その形態からみて、失敗品と考えられる。5はつくりが粗く、基部形態が左右対称をなしていない。6は他のものと比較して細長い石鏃で基部が浅く、全面に調整が施されるが中央部に厚みをもつ。7は薄い剥片を素材とし、全体的に丁寧な調整によって整形される。8は非常に丁寧なつくりである。表面中央部には何らかの要因による擦痕がみられる。9は非常に丁寧に作られている。10はつくりが粗く、中央部の厚みが減じきられていない。11は両面に丁寧な調整剥離が施される。12は薄い剥片を素材としているため、非常に薄い。13は他のものと比較して細長く、右側辺の調整に比べて左側辺の調整は粗い。14は丁寧な調整加工が施される。先端部を欠損している。15は薄い剥片を素材とし、その縁辺には丁寧な調整剥離が施される。裏面に主要剥離面が残る。16は表面に礫面を残し、裏面には主要剥離面が残る。17、18にはあまり丁寧な調整加工は施されていない。19はやや粗いつくりである。20は粗いつくりのために表面の凹凸が著しい。先端部を欠損している。21は粗いつくりであり、あまり形が整っていない。中央下部に厚みがある。22の中央部付近にはヒンジフラクチャーを起こした痕跡がみられる。その

ため中央部には大きく厚みが残る。

これらの石鏃は形態により正三角形のもの、先端部は細長いが基部が横にふくらむもの、全体的に細長いものの3種に分けられる。これは石材の違いに起因するものと思われる。

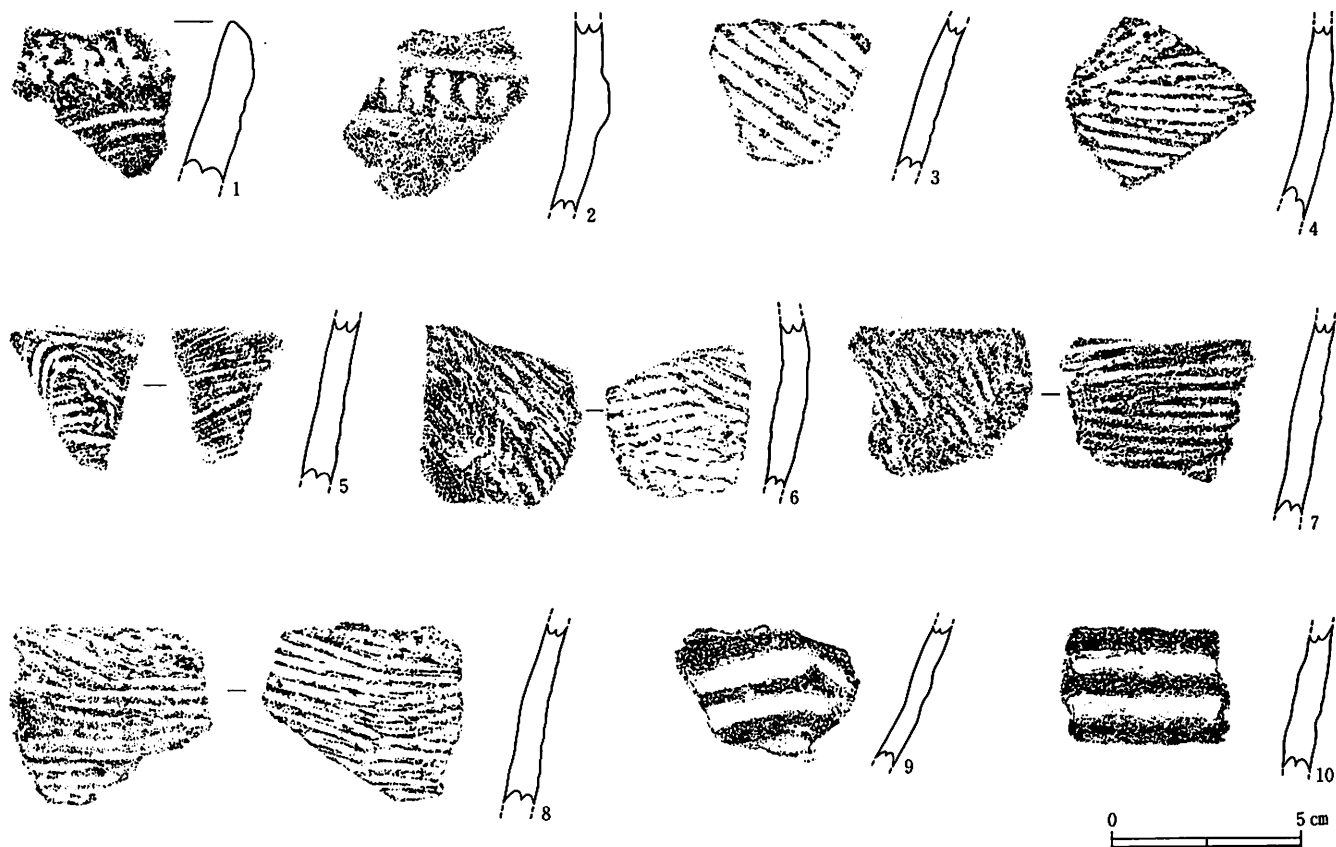
石鏃未製品 23～26は石鏃未製品の可能性がある。23は全体的に厚さを減じるための加工が認められるが、その加工は丁寧とはいえず、バルブが残る。また、基部にはあまり調整が加えられていない。24は両面とも加工があるが厚さが減じられておらず、基部も作り出されていない。25は薄い剥片が斜位に用いられていることがうかがえる資料である。26は全周にわたって加工されるが、その加工は粗く、厚さは減じられていない。裏面に主要剥離面を残す。23～26に関しては、石鏃の未製品とすることも可能であるが、その素材の大きさや加工の粗さは、石鏃とは一線を画するものである。そう考えると、これらは石銛である可能性も考えられる。

石匙 27は安山岩製の横匙である。横長剥片を素材とし、その打点部をつまみ部として周縁全体に丁寧な加工が施される。長幅比が3対1以上になる細長いタイプである。刃部は直線的である。

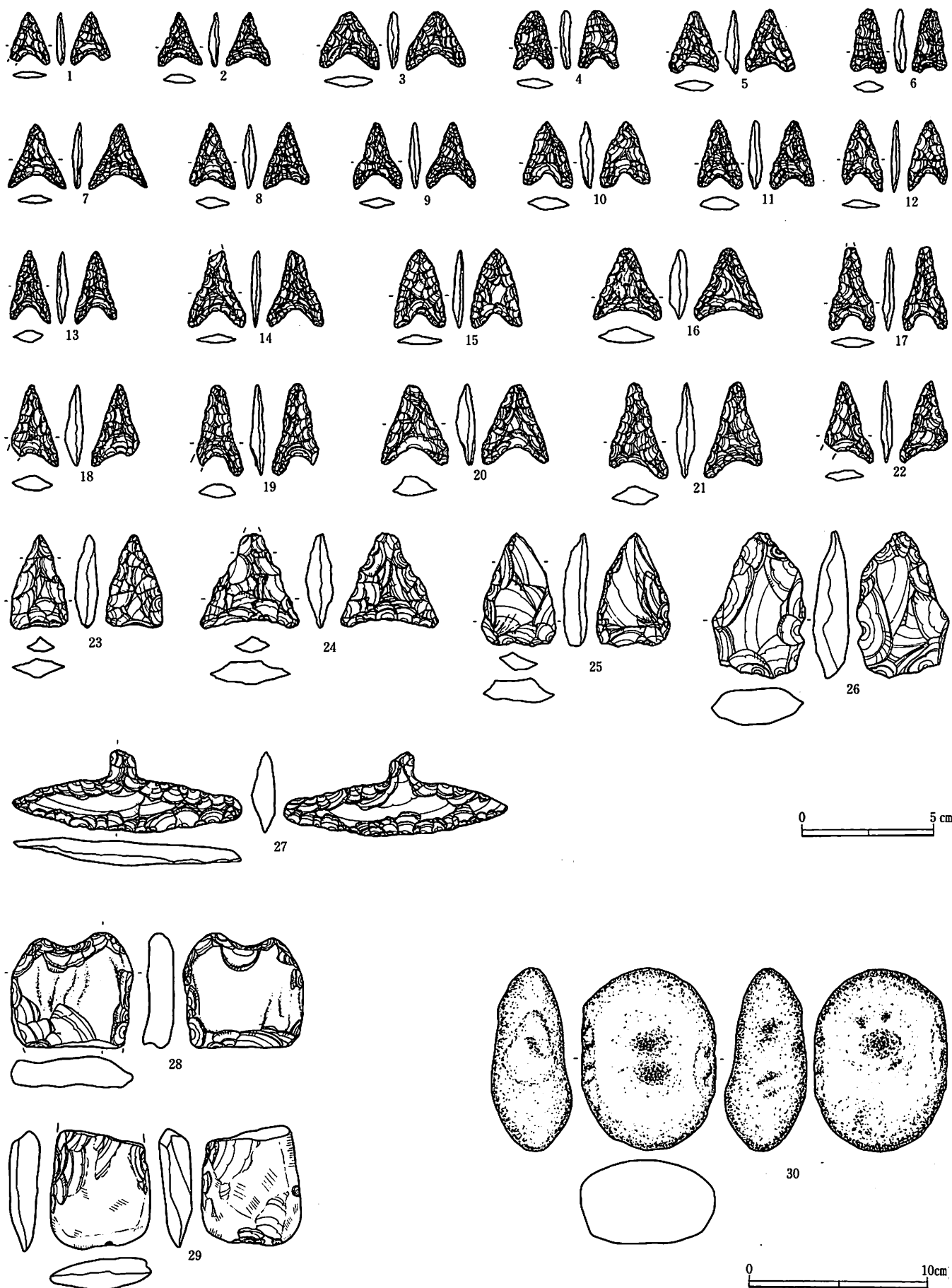
石錘 28は安山岩製の打欠石錘である。全周に加工がみられ、抉り部分には加工が著しい。下部の3分の1ほどを欠損している。

磨製石斧 29は安山岩製の磨製石斧である。両側縁に剥離が施され、表裏面とも丁寧な研磨がなされている。刃部にみられる剥離痕は使用痕と思われる。基部を大きく欠損している。

敲石 30は砂岩製の敲石である。表裏面および側面にアバタ状の敲打痕が認められる。表面には2ヶ所、裏面には1ヶ所くぼみをもつ部分があることがわかる。同様に側面も数ヶ所のくぼみがみられる。全体的にごつごつしている。(高平)



第37図 柳貝塚表面採集資料実測図（縄文土器）



第38図 柳貝塚表面採集資料実測図 (石器)

3. 荒木浜遺跡（第30図17、第39・40図、図版14-1・2）

遺跡の位置

荒木浜遺跡は熊本県上天草市大矢野町登立荒木浜に所在する。そこは大矢野島の東海岸沿いで、海を隔てて野牛島、維和島を望む。遺跡が立地するのは小規模な入り江で、この遺跡の周辺には同様の入り江が多く存在しており、そこには治郎田遺跡をはじめとするいくつかの縄文時代遺跡が立地している。本遺跡では、昭和44年2月と4月に、土器片2点、石器10点が採集されている。ここでは、縄文時代のものである可能性の高い土器片1点と石器10点を図示し、説明を加える。

(1) 土器（第40図1）

縄文時代前期の土器

曾畑式の口縁部である。内外面ともに棒状工具による横位の沈線文が施される。内面には2本の沈線文間に刺突文がみられ、口唇部上面にも内面と同様の刺突文がみられる。色調は黄色味を帯びる。土器片の右口唇部と左下部は一部摩滅しており、文様が不明瞭である。

(2) 石器（第40図2～11）

スクレイパー

2は安山岩製のスクレイパーと思われる石器である。大ぶりの剥片が用いられ、右縁辺が加工される。しかし、その加工痕は丁寧なものではなく、刃部製作を意図して作られたものかどうかは判断できない。下部は一部欠損している。

磨製石斧

3～5は磨製石斧である。3は蛇紋岩製である。裏面の上部には研磨痕と稜線がみられるが、表面の上部は摩滅のためか裏面に比べるとどちらも不明瞭である。刃部を欠損する。4は安山岩製で、3に比べて大きく厚みもある。表裏面全体と両側面に研磨痕がみられる。中でも刃部付近は丁寧に研磨される。表裏面ともに研磨痕に切られている剥離が確認できることから、製作時の剥離痕がかなり残っていると判断できる。5は頁岩製で、研磨されてはいるが摩滅しており、擦痕は不明瞭である。側縁部には明瞭な剥離痕が確認できる。刃部は欠損している。

双角状礫器

6～8は双角状礫器である。いずれも厚みのある礫を素材とする。6は周縁部に粗い加工が施される。特に挟り部に顕著な調整剥離がみられ、2つの突起が左右対称に作り出される。一方の突起の先端部を欠損している。また、挟り部は潰れたような状態になっている。側面には礫面が残っている。右側の尖頭部を欠損している。7の尖頭部は2つ作り出されるが、一方が長く、もう一方が短いという左右非対称形をなす。尖頭部付近に加工が集中し、側縁部にはあまり加工が施されない。このことは自然礫の形態に依存していること、また機能部が尖頭部であることを示している。8は頁岩製である。表面では挟り部に加工が施されるのに対して、裏面では全体的に加工が施される。2つの尖頭部は左右対称に作り出されるものの、尖頭部は両方が加工によって作り出されるのではなく、右側には礫面が大きく残る。

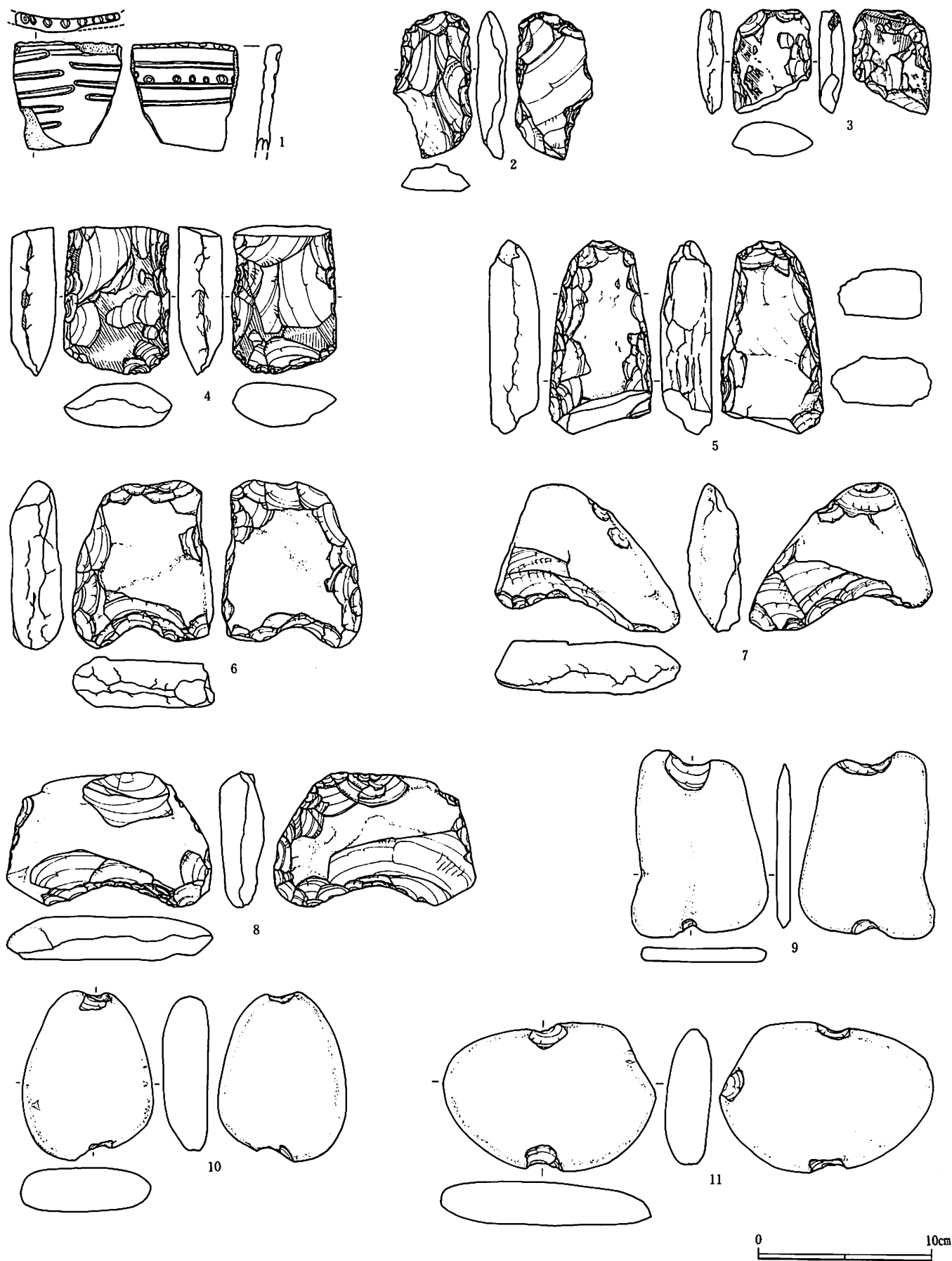
石錘

9～11は打欠石錘である。9、10は礫の短辺に挟りが入るもの、11は長辺に挟りが入るものである。9は、厚さ8mm程度の薄く扁平な長方形の礫を素材とする。長軸両端は加工され、挟りが形成される。また、長軸の上下剥離痕の間には直線的な幅2cm程度のくぼみがみられ、これは紐ずれ痕と考えられる。10は砂岩製で、厚みのある楕円礫を素材とする。長軸の両端は加工され、挟りが形成される。11は厚みのある楕円礫を素材とする。表面は短軸方向の両端が加工され、裏面は短軸方向の両端と長軸方向の一端が加工される。

(西山)



第39図 荒木浜遺跡近景



第40図 荒木浜遺跡表面採集資料実測図

4. 治郎田遺跡（第30図15、第41・44図1～4、図版14-1・3）

遺跡の位置

治郎田遺跡は熊本県上天草市大矢野町登立治郎田に所在する。大矢野島の東海岸沿いの入り江に立地する。本遺跡では昭和43年の3月に、土器片53点、石器12点が採集されている。ここでは、縄文土器片3点、石器1点を図示し、説明を加える。

(1) 土器（第44図1～3）

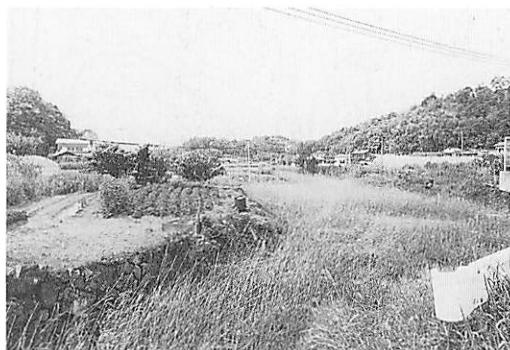
縄文土器

1、2は甗式系の土器である。1は外面に幅4mm程度の微隆線文が貼り付けられ、それを境に横位と斜位の細い沈線文が施される。色調はこげ茶色を呈する。2の文様は縦位と横位の沈線文から構成される。色調は黄色味を帯びる。3は西平式土器の口縁部である。口縁部の形態は山形を呈する。口縁部に沿って沈線が施され、列点文が配される。口唇部には刻み目のようなものが施される。色調は赤黒い。

(2) 石器（第44図4）

双角状礫器

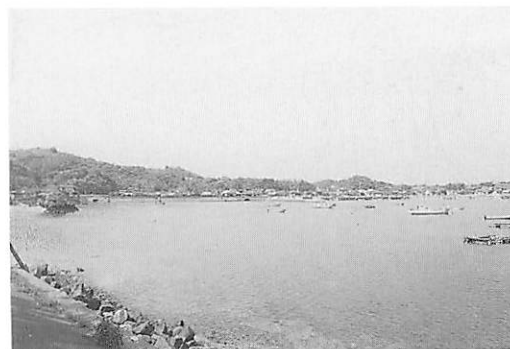
4は双角状礫器である。扁平な礫を素材とし、その左側辺と下部に加工が施される。特に挟り部に顕著な調整剥離がみられ、2つの突起が作り出される。その突起の先端部は摩滅が著しく、潰れたような状態になっている。（西山）



第41図 治郎田遺跡近景



第42図 満越遺跡近景



第43図 串遺跡近景

5. 満越遺跡（第30図25、第42・44図5～8、図版14-3）

満越遺跡は上天草市大矢野町中満越に所在する。大矢野島の南海岸沿いに立地する。本遺跡では昭和43年4月および昭和44年8月に石器4点が採集されている。ここでは磨製石斧2点、石錘2点の合計4点を図示し、説明を加える。

5、6は打欠石錘である。5は扁平な長方形の礫、6は厚みのある楕円礫を素材とする。両者とも長軸の両端に剥離痕がみられる。5の短軸には明瞭な剥離痕はみられないが、中央部に若干のくぼみがみられる。6は裏面の短軸両端に剥離痕が認められる。

7、8は頁岩製の磨製石斧である。7は基部に剥離痕が、表面には全体的に敲打痕がみられる。両側面は丁寧に研磨され、明瞭な稜線がみられる。8は全面が敲打によって整形され、側面に明瞭な稜線はみられない。側縁部に加工痕がみられる。（西山）

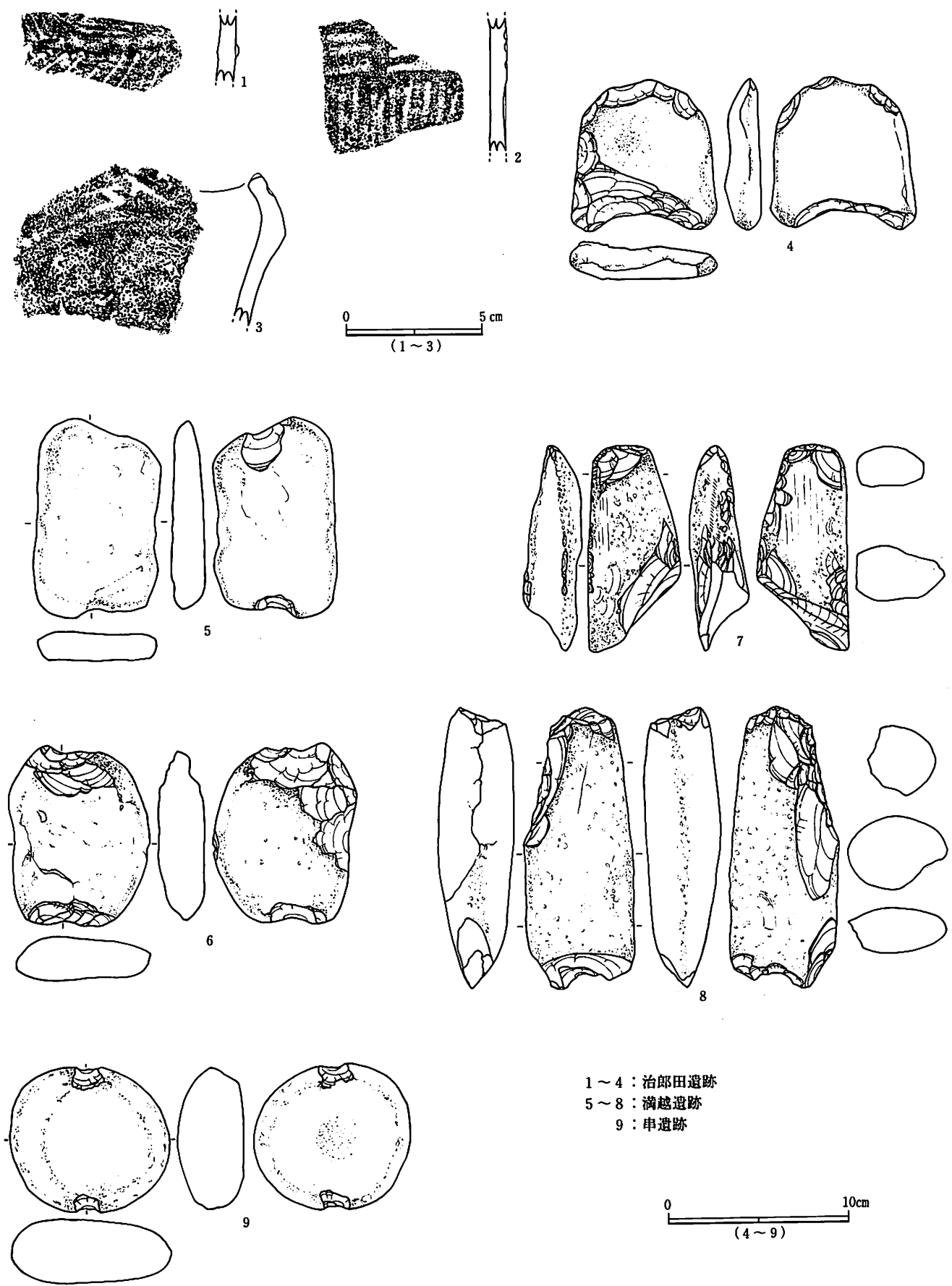
6. 串遺跡（第30図3、第43・44図9、図版14-3）

串遺跡は熊本県上天草市大矢野町上江後に所在する。大矢野島の北海岸沿いに立地する。採集品は石錘1点のみである。

8は打欠石錘であり、厚みのある円礫を素材とする。両端が加工され、挟りが形成される。中央部はその他の面と比べてごつごつとした質感を呈する。（西山）

参考文献

- 甲元眞之編 2005「第3部 柳貝塚採取資料報告」『上天草市史大矢野町編資料集』1 上天草市：pp.53-64
 松藤和人 1987「双角状石器小考」『考古学と地域文化』同志社大学考古学シリーズ刊行会：pp.23-40
 村上浩明編 2000「Ⅲ 資料報告」『考古学研究室報告』第36集 熊本大学文学部考古学研究室：pp.1-13
 山崎純男 2002「第1章 原始・古代」『五和町史』五和町：pp.112-264



第44図 治郎田・満越・串遺跡表面採集資料実測図

第5部

千崎古墳群・桐ノ木尾ばね古墳

出土人骨調査報告



桐ノ木尾ばね古墳北側石室の東小口壁

一 資料報告に至る経緯

杉井 健（熊本大学）

1. 熊本県上天草市大矢野町域出土の人骨資料

熊本県上天草市大矢野町域に所在する多くの古墳のうち、千崎古墳群10号墳・18号墳、桐ノ木尾ばね古墳、成合津2号墳ではかつての発掘調査で人骨が検出されている。それら人骨資料は、現在、熊本大学大学院医学薬学研究部に保管されているが（熊本大学資料館検討委員会1998）、詳細な報告がなされているのは成合津2号墳出土人骨のみであった（阿部ほか1977）。そこで、上天草市では、上天草市史大矢野町編纂事業にともなう基礎資料収集の一環として、それら人骨資料の形質人類学的調査の実施を計画した。調査は、2004年10月12・13日の2日をかけて、九州大学大学院比較社会文化研究院の中橋孝博氏により行われた。このときは上述の古墳から出土したすべての資料を調査対象としたが、本書では基礎データが公表されていない千崎古墳群および桐ノ木尾ばね古墳出土人骨について報告する。

大矢野町域
出土古人骨

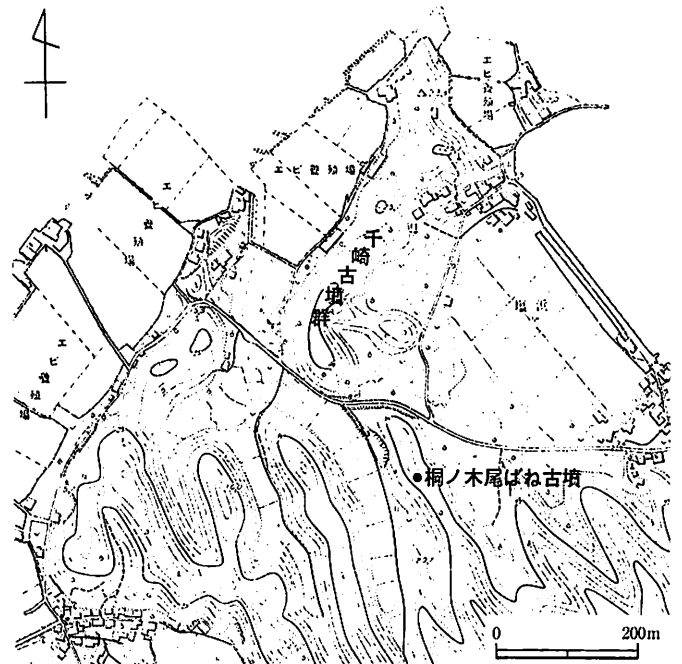
2. 千崎古墳群・桐ノ木尾ばね古墳の概要

中橋孝博氏による具体的な資料報告に入る前に、千崎古墳群および桐ノ木尾ばね古墳についてその概要を記しておこう。

千崎古墳群 千崎古墳群は熊本県上天草市大矢野町維和千崎3080・3081番地他に所在する。そこは天草諸島の北部、維和島の北端にあたる（第45図）。当古墳群に対する初めての考古学調査は、1955年、玉名高等学校考古学部によって行われた。その際に今回報告する人骨が検出された（田辺1955a・1955b）。その後、長きにわたり当古墳群の本格的な調査が行われることはなかった。大矢野町（2004年度から上天草市）では2002年度から町史編纂事業を開始し、その一環として当古墳群の考古学調査の実施を計画した。そして熊本大学文学部考古学研究室の協力のもと2003年度に調査が開始され現在に至っている（森編2005）。本書第1部では2005年度実施の第4次調査の概要について報告している。

千崎古墳群

さて、千崎古墳群に所在する26基の古墳のうち、1955年の調査で人骨が検出されたのは、10号墳（玉名高等学校付与番号では第11号墳）および18号墳（同第15号墳）である。10号墳は箱式石棺で、東尾根の東端にあり、9号墳と並列する（第1部第4図）。棺内から4体の人骨が検出されているが、遺物は出土していない。3体が北、1体が南頭位であったらしい（田辺1955b）。現在、蓋石は元の状態に戻されている（第46図）。18号墳は北尾根のほぼ中央に位置する（第4図）。1955年には箱式石棺が完存していたらしいが、今はその面影



第45図 千崎古墳群・桐ノ木尾ばね古墳の位置



第46図 千崎古墳群10号墳（手前）



第47図 桐ノ木尾ばね古墳（南から）



第48図 桐ノ木尾ばね古墳（東から）

もなく、わずかに石材が散布するのみである（森編2005）。人骨は完全な状態で検出され、石棺内に設置された円形の粘土枕にその頭部を置いていたらしい。遺物は検出されていない（田辺1955b）。これら箱式石棺の築造時期は遺物が出土していないため明確にしがたいが、周辺地域にある同種の石棺などを参考にすれば、古墳時代前期後半から中期前半頃と思われる。

桐ノ木尾ばね古墳 桐ノ木尾ばね古墳は熊本県上天草市大矢野町維和桐ノ木に所在する。千崎古墳群のある千崎丘陵のすぐ南、岬状に北へ突出した丘陵の頂部平坦面に位置する。千崎丘陵とは狭い切り通しによって隔てられている（第45図）。周辺にこれ以外の古墳の存在は確認されていない。

当古墳の考古学調査は、1955年、玉名高等学校考古学部によって行われた。その時、残存する竪穴式石室内で東頭位の人骨1体、および石室内の北東隅と南西隅で鉄斧1点ずつ、北西隅で碧玉製の丁字頭勾玉2点と管玉12点が検出された（田辺1955b・坂本1971）。現在、これら遺物の行方は不明である。

さて、桐ノ木尾ばね古墳の周囲は畑地となっているが、その墳丘は大きく削平されており、現状で1辺3.5～4m、高さ1～1.5m程度の方丘状の高まりをなす（第47図）。そのなかに2基の竪穴式石室が並存する。石室主軸は尾根筋に直交し、北からおよそ60°東へ振る。2基の石室のうち南側の石室は削平により南側壁を失っており、かろうじて2枚の天井石が木組み

で支えられている状態である（第48図の左側）。石室内法長は約1.7mである。一方、北側の石室（第48図の右側）は、北側壁がむき出しになっているが完存する。天井石は3枚あり、そのわずかな隙間から内部を観察すれば板状の割石が小口積みにされ、壁面に赤色顔料が塗布されていることがよくわかる（第5部扉写真）。内法長約1.9m、幅70～80cm、高さ約45cmの規模である。調査当時の写真（坂本1971）をみれば、人骨等が検出されたのはこの北側石室であると判断できる。古墳の築造時期は、竪穴式石室である点や丁字頭勾玉が出土している点などから、古墳時代前期後半から中期頃であると推測できる。

参考文献

- 阿部堅二・今井義量・山崎純男・西健一郎・松本健郎・三島格 1977『熊本県天草郡成合津古墳調査概報』『熊本史学』第50号
熊本史学会：pp.19～40
熊本大学資料館検討委員会 1998『熊本大学資料館に関する検討委員会報告』熊本大学
坂本経堯・坂本経昌 1971『天草の古代』私家版
田辺哲夫 1955a『玉名高等学校考古学部の天草郡維和古墳群調査結果について』熊本県立玉名高等学校
田辺哲夫 1955b『天草郡大矢野町維和古墳群調査概要』熊本県立玉名高等学校
森幸一郎編 2005『千崎古墳群第2次・第3次調査報告』『上天草市史大矢野町編資料集』1 上天草市：pp.1～38

二 熊本県上天草市維和島・千崎古墳群出土の古墳時代人骨

中橋孝博（九州大学）

1. はじめに

九州における人類学上の課題の一つとして、弥生時代に北部九州に流入した渡来人とその末裔が時代と共に各地にどのように拡散していったのかと言う問題がある。これまでのところ面長で扁平な顔、高身長といった特徴を持つ大陸起源の人々もしくはその末裔は、北部九州から次第に南部へと分布域を広げ、例えば九州東部の宮崎県平野部では古墳時代になるとその遺伝的影響が及び始めたことが明らかになっている。しかし、西半部の状況にはまだ不明な点が多く、特に西北九州沿岸部や離島の住人のように、少なくとも弥生時代までは縄文人的形質を残していた人々がその後どのような運命を辿ったのかは、人類学上の興味ある課題となろう。

1955年に熊本県天草地方の離島から古墳時代の人骨が出土し、永く熊本大学の医学部に保管されていた。今回その人骨を精査する機会をえたので、以下に分析結果を報告する。

2. 遺跡・資料・方法

千崎古墳群は、熊本県上天草市大矢野町維和島の北端に位置する。丘陵上に営まれた古墳群で、1955年（昭和30年）に熊本県立玉名高等学校考古学部に、さらに2003年～2004年には熊本大学文学部考古学研究室による調査によって箱式石棺などを主体とする計26基の古墳の存在が明らかにされた。この内、1955年の調査によって10号墳から4体の、18号墳から1体の人骨が出土した（第15表）。所属時代については伴出遺物の多くが失われているため判然とはしないが、考古学的な検証から、古墳時代前期後半から中期にかけてのものと考えられている。

人骨の計測は主に Martin-Saller（1957）に従い、鼻根部については鈴木（1963）の方法を用いた。また、顔面の平坦度は Yamaguchi（1973）の方法を、脛骨については一部、森本（1971）の方法をそれぞれ用いた。なお、性判定には筆者らの保存不良骨に対する方法（Nakahashi & Nagai1986；中橋 1988）を援用した。

3. 結果・考察

(1) 10号墳（第51図）

箱式石棺に計4体の成人骨が埋葬されていた。男性2体、女性2体の構成であり、各々の遺存部位を第49図に示したが、各個体の埋葬状況（埋葬姿勢、順序など）については記録類が残されていないため不明である。

A. 10-1号人骨（女性・老年）

脳頭蓋では、頭頂骨後半から後頭骨にかけての部分、顔面では右上顎骨、及び下顎骨が遺存している。体部では、上肢骨や下肢骨片、肋骨片などが回収されているが、いずれも保存状態が悪く、詳しい特徴は不明である。頭蓋のサイズや筋付着部の発達度、及び四肢骨の形状から女性と見なされる。縫合の癒合、歯の咬耗ともにかなり進行しており、すでに老年（60歳以上）

資料の概要

第15表 千崎古墳群出土人骨一覧

番 号	性	年齢	備 考
10号墳箱式石棺 1号	女性	老年	
2号	女性	熟年	仙腸関節癒合、左前腕骨折
3号	男性	熟年	
4号	男性	成年	
18号墳箱式石棺	男性	熟年	

に達している可能性が高い。

残存歯の歯式を以下に示す。残存部位を見る限り風習的抜歯の痕跡は確認出来ない。

/	/	/	○	○	○	○	○	/	/	/	/	/	/	/	/
×	×	△	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	△	△	/	/	/	/

(○：歯槽解放、/：欠損、×：歯槽閉鎖、△：歯根のみ)

四肢のうち計測値の得られた上肢骨について、その結果を主な比較群と共に第18表に示した。上腕骨、撓骨ともに、他の古墳人集団や弥生人の平均値を上回る、やや頑丈な傾向が認められる。上腕骨の扁平性など、縄文人や広田弥生人に見られるような特徴は見られない。

B. 10-2号人骨（女性・熟年）

第49図に示したように、頭蓋では下顎を含む顔面部の破片と、側頭骨、後頭骨の破片が遺存する。体部骨は概ね全身の部位が確認出来るが、両下腿部の遺存状態は不良である。

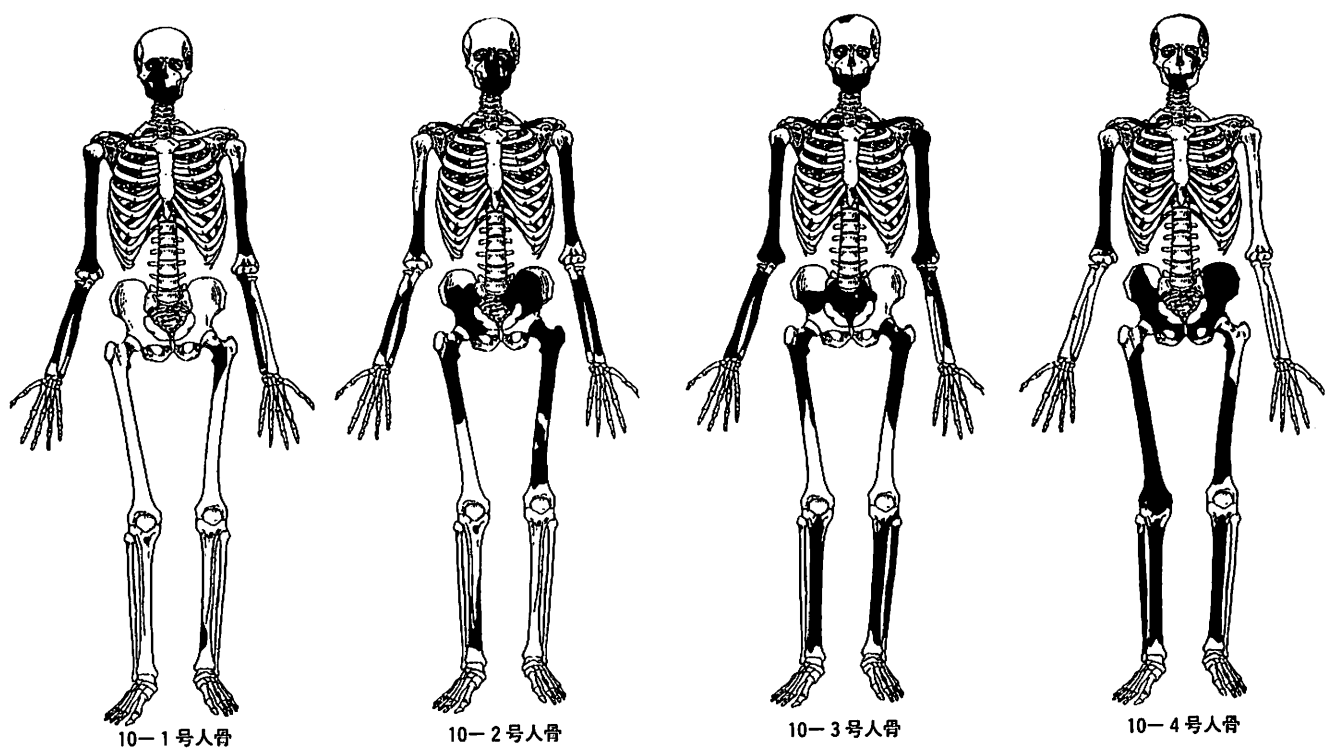
骨盤形状から女性であり、歯の咬耗がやや進行し、仙腸関節が癒合していることから、すでに熟年に達した個体と見なされる。なお当個体では、左前腕骨遠位部の骨折が確認された。

頭蓋の保存は悪く、形態的な特徴は不明である。残存歯を以下に示す。風習的抜歯痕は見られない。

/	/	/	/	P ¹	C	P ²	I ¹	I ¹	I ¹	P ²	○	○	/	/	/	/
○	×	×	P ₂	×	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	C	○	○	P ₂	M ₁	×	×

(○：歯槽解放、/：欠損、×：歯槽閉鎖)

四肢骨の計測結果を第18表に示した。10-1号人骨と同様、比較群に比べてやや頑丈な傾向が見られ、上腕骨のみならず、撓骨や尺骨でも他群の平均値を上回る傾向を見せている。また、上腕骨の三角筋粗面の発達さはほどでもないが、その骨体にはやや扁平性が見られた。ただし、尺骨には縄文人や西北九州弥生人に見られるような前後方向に厚い断面形状は見られない。



第49図 千崎古墳群10号墳出土人骨残存部

第16表 主要頭蓋計測値の比較(男性)(千崎古墳群出土人骨との比較)

	千崎 (古墳)		西九州 ¹⁾ (古墳)		北部九州 ²⁾ (古墳)		南九州 ³⁾ (古墳)		筑後 ⁴⁾ (古墳)		北部九州 ¹⁾ (弥生)		津雲・吉胡 ⁵⁾ (縄文)		西南日本 ⁶⁾ (現代)	
	10-3	18	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
1 頭蓋最大長	-	-	8	179.9	68	181.9	10	181.8	14	184.4	118	183.7	60	184.2	108	181.4
8 頭蓋最大幅	142	144	5	141.8	75	141.3	12	142.8	14	142.5	117	142.4	62	144.9	108	139.3
17 Ba - Br 高	124	137	6	135.8	56	134.9	15	136.3	11	136.4	101	137.7	26	135.5	108	139.3
8/1 頭長幅示数	-	-	5	77.9	63	77.6	5	78.6	13	77.4	104	77.7	55	78.7	108	76.6
17/1 頭長高示数	-	-	7	76.0	47	74.0	9	75.0	10	73.9	91	75.3	25	73.3	108	76.9
17/8 頭幅高示数	87.3	95.1	5	96.3	52	95.7	8	96.1	11	95.7	91	97.0	26	93.6	108	100.1
45 頬骨弓幅	-	145	4	138.8	55	138.5	8	139.5	6	140.3	103	140.0	16	141.0	106	134.5
46 中 顔 幅	-	108	8	102.6	77	104.4	15	101.5	9	104.1	114	104.7	31	103.8	107	99.9
47 顔 高	-	121	6	112.7	42	120.4	14	114.3	5	120.6	80	123.8	25	115.7	66	122.2
48 上 顔 高	-	72	5	64.6	74	71.6	23	64.9	9	72.1	114	74.8	28	66.3	92	71.8
47/45 顔示数(K)	-	83.4	2	81.7	33	86.2	6	81.5	4	84.4	71	88.4	10	80.4	64	91.4
47/46 顔示数(V)	-	112.0	5	111.1	41	114.6	10	113.0	5	116.3	74	118.4	18	110.4	65	122.2
48/45 上顔示数(K)	-	49.7	2	45.0	52	52.5	7	45.9	6	50.7	95	53.3	10	47.0	90	53.5
48/46 上顔示数(V)	-	66.7	5	65.0	72	68.7	13	62.8	9	69.4	105	71.5	22	63.1	91	71.8
51 眼窩幅(左)	-	43	7	43.3	80	43.5	21	43.1	8	43.6	89	43.2	40	43.2	108	43.0
52 眼窩高(左)	-	33	6	32.5	80	34.1	26	33.0	8	33.5	93	34.5	38	33.2	108	34.4
52/51 眼窩示数(左)	-	76.7	6	74.5	80	78.5	21	77.0	8	76.9	86	79.9	32	77.5	108	80.2
54 鼻 幅	-	26	6	25.7	76	26.6	26	27.5	11	26.7	117	27.1	36	26.5	108	25.9
55 鼻 高	-	52	8	50.1	77	51.5	25	50.2	10	52.1	116	52.8	30	48.1	108	52.2
54/55 鼻 示 数	-	50.0	6	50.9	74	52.6	24	54.9	10	51.4	113	51.4	27	54.7	108	49.8

1) 池田(1993)、2) 中橋・永井(1989)、3) 内藤(1985)、4) Doi & Tanaka(1987)、5) 清野・宮本(1926)・金高(1928)、6) 原田(1954)

第17表 上肢骨計測値(男性、左)(千崎古墳群出土人骨との比較)

	千 崎 (古墳)			北部九州 (古墳)		西日本 ¹⁾ (古墳)		北部九州 ²⁾ (弥生)		大友 ³⁾ (弥生)		津雲 ⁴⁾ (縄文)		九州 ⁵⁾ (現代)	
	10-3	10-4	18	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
上腕骨															
1 最大長	-	-	342	12	305.0	3	285.7	22	302.6	11	291.4	36	284.3	106	295.3
2 全 長	-	-	339	10	298.6	3	281.3	17	296.8	8	285.8	35	280.6	106	290.6
5 中央最大径	26	27	28	32	23.3	13	22.4	76	23.3	34	23.4	50	24.1	106	21.9
6 中央最小径	19	18	20	32	18.0	13	17.4	76	17.4	33	17.6	50	17.8	106	16.9
7 骨体最小周	68	70	76	33	64.8	14	60.2	81	63.9	33	63.5	50	64.0	106	61.8
7a 中央周	73	75	81	31	67.8	-	-	75	67.8	33	68.2	50	69.3	106	63.7
6/5 骨体断面示数	73.1	66.7	71.4	32	77.8	13	77.6	76	74.9	33	75.0	50	73.9	106	79.1
7/1 長厚示数	-	-	22.2	12	21.1	3	20.3	22	21.3	11	22.4	36	22.7	106	20.9
桡 骨															
1 最大長	-	-	-	5	230.2	1	229.0	37	236.5	6	231.5	27	230.6	64	219.9
2 機能長	-	-	-	3	215.0	1	217.0	28	220.0	9	215.8	28	217.4	64	208.2
3 最小周	48	-	-	19	43.0	3	39.3	78	43.1	15	44.7	38	44.0	63	40.1
4 骨体横径	18	-	18	21	17.3	7	17.0	79	17.2	25	17.1	42	17.1	63	16.0
4a 骨体中央横径	-	-	-	7	16.3	-	-	50	16.0	25	16.4	-	-	63	15.2
5 骨体矢状径	13	-	13	21	12.5	7	11.7	79	12.5	25	12.4	42	12.0	63	11.7
5a 骨体中央矢状径	-	-	-	7	12.4	-	-	50	12.6	26	12.4	-	-	63	11.9
3/2 長厚示数	-	-	-	3	20.9	1	20.7	28	19.8	5	20.5	27	20.5	61	20.4
5/4 骨体断面示数	72.2	-	72.2	21	72.4	7	70.3	79	72.6	25	72.3	42	70.2	60	71.4
5a/4a 中央断面示数	-	-	-	7	76.7	-	-	50	78.6	25	75.2	-	-	-	-
尺 骨															
1 最大長	-	-	(273)	13	247.0	-	-	12	253.2	9	249.6	19	249.1	62	236.2
2 機能長	-	-	242	13	215.7	-	-	15	224.7	13	222.9	25	219.7	64	209.2
3 最小周	42	-	-	16	36.5	2	36.5	63	37.4	22	37.2	34	37.7	65	35.8
11 矢状径	14	-	13	16	13.9	8	13.0	00	13.2	26	15.0	50	14.3	63	12.8
12 横 径	17	-	18	16	17.2	8	15.1	00	17.6	26	17.2	50	16.3	64	16.5
3/2 長厚示数	-	-	-	13	16.7	-	-	15	16.8	13	16.8	25	17.4	63	17.0
11/12 骨体断面示数	82.4	-	72.2	16	81.4	8	86.4	00	75.4	26	88.0	50	88.5	63	74.9

1) 城(1938)、2) 中橋・永井(1989)、3) 松下(1981)、4) 池田(1988)、5) 専頭(1957)・溝口(1957)

第18表 上肢骨計測値（女性、左）（千崎古墳群出土人骨との比較）

	千 崎 (古墳)		北部九州 (古墳)		西日本 ¹⁾ (古墳)		北部九州 ²⁾ (弥生)		大友 ³⁾ (弥生)		広田 ⁴⁾ (弥生)		津雲 ⁵⁾ (縄文)		九州 ⁶⁾ (現代)	
	10-1	10-2	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
上腕骨																
1 最大長	-	-	5	281.2	1	255.0	11	283.2	4	262.3	3	253.3	21	264.4	36	271.7
2 全 長	-	-	5	275.4	-	-	8	282.3	4	257.8	3	251.3	19	259.6	36	268.6
5 中央最大径	22	23	20	20.1	4	18.3	35	21.0	20	21.0	2	22.0	40	19.7	36	19.8
6 中央最小径	17	15	20	15.1	4	13.5	36	15.3	20	15.8	2	15.5	41	14.0	36	14.8
7 骨体最小周	63	61	19	56.0	5	51.2	47	56.9	19	57.6	14	54.2	42	53.9	36	54.8
7a 中央周	64	65	20	58.6	-	-	33	60.7	19	61.8	2	63.0	40	56.5	36	56.9
6/5 骨体断面示数	77.3	65.2	19	75.6	4	75.0	35	73.2	20	75.9	2	70.5	40	71.3	36	75.3
7/1 長厚示数	-	-	5	19.9	1	22.3	11	19.8	11	22.4	2	23.4	21	20.4	106	20.9
橈 骨																
1 最大長	-	-	2	217.5	1	208.0	17	215.1	2	207.0*	2	201.0	24	208.2	12	199.2
2 機能長	-	-	2	204.0	1	194.0	11	204.3	2	194.0*	2	189.5	26	196.4	12	187.0
3 最小周	-	43	7	37.1	2	34.0	52	37.9	9	40.4	5	36.0	30	36.4	12	34.7
4 骨体横径	16	18	7	15.4	3	15.0	56	15.7	11	16.4	8	14.8	34	14.6	12	14.5
4a 骨体中央横径	-	-	2	16.0	-	-	24	14.3	11	15.9	2	14.5	-	-	12	13.5
5 骨体矢状径	11	12	7	10.6	6	10.2	56	10.9	11	11.2	9	10.0	34	9.8	12	9.7
5a 骨体中央矢状径	-	-	2	11.5	-	-	24	10.8	12	10.9	2	11.0	-	-	12	9.7
3/2 長厚示数	-	-	2	19.6	1	19.1	11	17.7	1	19.7*	2	20.0	25	18.2	11	18.1
5/4 骨体断面示数	68.8	66.6	7	68.6	3	66.6	56	69.3	11	68.7	8	67.9	34	67.5	10	68.3
5a/4a 中央断面示数	-	-	2	71.9	-	-	24	75.7	11	69.7	2	75.9	-	-	-	-
尺 骨																
1 最大長	-	-	1	234.0	-	-	6	236.5	1	223.0	2	215.5	12	227.2	12	215.0
2 機能長	-	-	1	208.0	-	-	8	207.6	2	207.0	1	191.0	12	198.6	12	189.2
3 最小周	-	39	5	35.6	3	31.0	34	34.4	7	33.9	4	31.3	24	32.8	12	32.1
11 矢状径	-	12	7	11.9	2	11.5	54	11.2	12	12.8	10	10.7	37	11.3	12	10.9
12 横 径	-	18	8	15.0	2	12.5	54	16.0	11	15.9	10	15.2	37	13.6	12	13.9
3/2 長厚示数	-	-	1	17.3	-	-	7	16.5	2	16.7	1	17.3	12	16.4	12	16.8
11/12 骨体断面示数	-	66.7	7	79.9	2	92.9	7	70.4	11	82.0	10	70.7	37	83.5	12	77.5

1) 城 (1938)、2) 中橋・永井 (1989)、3) 松下 (1981)、4) 中橋 (2003)、5) 池田 (1988)、6) 専頭 (1957)・溝口 (1957)

C. 10-3号人骨（男性・熟年）

4体の合葬人骨のうち最も保存状態が良く、ほぼ全身部位を確認出来るが、残念ながら頭蓋の顔面部を欠く。骨盤形状や四肢の頑丈さから明らかに男性であり、歯の咬耗状況から熟年に達した個体と見なされる。

頭蓋では計測値が得られたのは一部に限られたが、第16表に示したように、頭高の低さが本人骨の特徴の一つに上げられる。

残存歯を以下に示す。上顎歯はいずれも遊離歯である。風習的抜歯痕はやはり認められない。

/	/	/	P ¹	P ²	C	I ²	/	/	I ²	/	P ¹	/	/	/	/
○	○	×	×	×	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂	×

(○：歯槽解放、/：欠損、×：歯槽閉鎖)

四肢骨の計測結果を第17・19表に示す。10-1、10-2号の両女性と共通して、本男性でも四肢骨にはかなり頑強な傾向が認められる。上肢骨、下肢骨ともに、殆どの計測値は縄文人を含む比較群の平均値を上回っている。また、上腕骨、脛骨の骨体断面には、やや扁平傾向も見られた。ただし、大腿骨の粗線の発達は弱く、その断面示数は96.7と、古墳時代の男性としては平均以下の数値となっている。

大腿骨最大長からピアソンの推定式で身長をもとめると、165.9cmとなり、非常な高身長例である（第20表）。

第19表 下肢骨計測値（男性、左）（千崎古墳群出土人骨との比較）

	千 崎 (古墳)			北部九州 (古墳)		西日本 (古墳)		北部九州 (弥生)		大友 (弥生)		津雲 (縄文)		九州* (現代)	
	10-3	10-4	18	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
大腿骨															
1 最大長	(450)	-	467	22	437.6	3	426.3	60	430.9	15	420.1	19	414.1	59	406.5
2 自然位長	-	-	464	13	436.9	3	422.0	18	427.7	17	413.9	19	411.0	59	403.2
6 中央矢状径	29	29	33	61	29.4	22	27.2	162	29.7	41	28.6	47	29.0	59	26.5
7 中央横径	30	28	26	62	28.3	22	26.8	166	28.0	42	26.4	47	26.0	59	25.6
8 中央周	-	90	95	61	90.3	21	85.9	161	90.8	41	87.0	47	87.4	59	82.4
9 骨体上横径	34	33	-	43	32.5	20	29.0	115	32.6	38	31.6	43	30.7	59	29.4
10 骨体上矢状径	26	25	-	43	25.9	17	28.4	115	26.2	38	25.2	43	25.5	59	24.3
8/2 長厚示数	-	-	20.5	12	20.4	3	20.1	18	21.4	16	21.4	19	21.2	59	20.4
6/7 中央断面示数	96.7	103.6	126.9	61	104.2	22	101.8	162	106.4	41	108.6	47	111.8	58	103.8
10/9 上骨体断面示数	76.5	75.8	-	43	79.9	17	98.1	115	80.5	39	80.1	43	83.1	58	82.8
脛 骨															
1 全 長	-	-	372	8	343.6	2	344.0	27	345.6	10	345.3	20	340.0	61	320.3
1a 最大長	-	-	379	14	347.6	2	352.5	52	350.5	11	354.8	22	343.6	60	326.9
8 中央最大径	-	-	30	17	30.6	17	28.9	74	32.0	43	31.0	46	32.3	61	27.8
8a 栄養孔位最大径	37	38	39	37	35.0	17	33.3	153	36.5	35	34.5	38	35.2	60	30.6
9 中央横径	-	-	22	18	21.4	16	21.4	75	22.9	43	21.4	46	20.4	61	21.1
9a 栄養孔位横径	25	28	26	38	24.2	17	23.4	153	25.3	36	23.3	38	22.2	61	23.7
10 骨体周	-	-	83	17	82.4	16	80.9	74	86.5	41	83.4	45	84.5	62	78.4
10a 栄養孔位周	95	100	102	37	92.9	17	90.7	151	96.9	34	92.6	38	92.8	61	88.9
10b 最小周	76	-	77	31	76.0	15	72.6	122	78.4	38	75.6	41	76.7	60	71.3
9/8 中央断面示数	-	-	73.3	17	70.0	16	74.3	74	72.2	43	69.1	46	63.3	61	76.1
9a/8a 栄養孔位断面示数	67.6	73.7	66.7	37	69.2	17	70.4	152	69.5	35	67.7	38	63.0	60	77.5
10b/1 長厚示数	-	-	20.7	12	22.4	2	21.8	26	22.7	10	21.9	20	22.9	60	22.4
腓 骨															
1 最大長	-	-	-	1	338.0	8	333.3	8	347.9	-	-	13	329.5	58	322.9
2 中央最大径	16	-	-	13	16.9	19	17.5	46	17.0	-	-	44	17.8	59	14.5
3 中央最小径	12	-	-	13	11.9	19	12.1	46	11.6	-	-	44	12.2	59	10.0
4 中央周	47	-	-	13	47.4	19	50.7	47	47.2	-	-	44	51.3	59	41.5
4a 最小周	41	-	-	6	37.3	18	41.8	24	39.7	-	-	29	39.2	59	35.6
3/2 中央断面示数	75.0	-	-	13	70.7	19	69.3	46	68.3	-	-	44	68.6	59	69.5
4a/1 長厚示数	-	-	-	1	12.1	8	11.8	8	11.0	-	-	13	12.0	58	11.1

*阿部（1955）、鑄鍋（1955）

D. 10-4号人骨（男性・成年）

頭蓋は破片のみだが、体部の特に腰から下位の部分の保存は比較的良好である。骨盤形状から男性と見なされ、歯の咬耗がまだ進行していない点から、かなり若い成年人骨と見なされる。残存歯の歯式を示す。風習的抜歯の有無は不明である。

○	M ²	M ¹	P ²	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
/	/	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	/	/	/

(○：歯槽解放、/：欠損)

四肢骨の計測結果を第17・19表に示した。全体的に見て他の人骨と同様、やはり頑丈な特徴が見られ、特に上肢骨にその傾向が目立つ。上腕骨の最小周や中央周は比較群中最大である。三角筋粗面の発達も良好で、骨体にはやや扁平性も見られる。下肢骨では、大腿骨の骨幹諸径は断面形状も含めて、北部九州古墳人や弥生人にかなり近い。粗線の発達は10-3号男性よりは優っているが、断面示数は北部九州古墳人などに近く、縄文人や同傾向を残す西北九州弥生人よりは下回る。

また、大腿骨最大長は計測出来なかったが、かなりの長身であったことが窺える。

(2) 18号墳 (第52図)

箱式石棺に1体分の人骨が埋葬されていた。ほぼ全身骨が遺存しているが、頭蓋では後頭部が欠損し、四肢骨でも左右前腕の遠位端、左大腿骨の近位半、左右腓骨の骨端部などが欠損している。副葬品の有無、埋葬姿勢等については不明である。

骨盤形状から男性と見なされ、歯の咬耗がやや進行し、縫合にも一部癒合が見られることから、熟年に達した個体と見なされる。

頭蓋の計測結果を第16表に示した。頭最大長は計測不能であったが、上面観において、特に長頭、あるいは短頭に傾く傾向は見られない。頭高は比較的高く、北部九州の弥生人や古墳人と大差ない。

顔面では幅径の大きさが顕著で、そのため上顔高は北部九州古墳人の平均値に近いが顔面示数でみた場合、やや低い。ただし、南九州の古墳人やそれと類似の西九州古墳人に比べると明らかに高顔傾向が認められる。眼窩もやや低眼窩の傾向を見せるが、鼻型には南九州古墳人や縄文人との間に確差が見られる。なお、鼻根部は扁平で、鼻骨の彎曲も弱い(鼻骨彎曲示数：88.4、北部九州の弥生人と古墳人の平均は各々88.5、88.6；中橋・永井1989)。また、歯槽性の

の突顎の程度は弱い。

以上の特徴を総合的に見た場合、南九州古墳人やそれに近い西九州古墳人(主に熊本と長崎県出土の資料：池田1993)とは違いが明確で、どちらかというとなり北部九州の古墳人や弥生人に近い特徴をもつ。その傾向は、ペンロースの形態距離(第50図)の結果にも明らかで、当男性には地理的に近い西北九州弥生人や縄文人的な特徴はあまり認められない。なお、広田弥生人とは特に大きな差があるが、これには広田人骨の脳頭蓋に見られる著しい短頭性が影響しており、顔面部の違いはこの図で表現されているほど大きなものではない。

歯式を以下に示す。風習的抜歯痕は見られない。

×	M ²	M ¹	P ¹	P ²	C	I ²	I ¹	I ¹	I ²	C	P ¹	P ²	M ¹	M ²	×
×	M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂	×

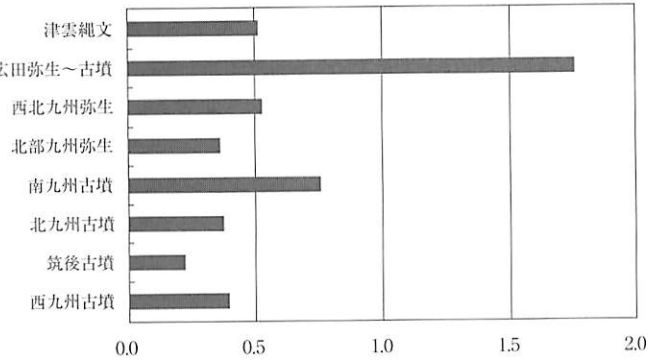
(×：歯槽閉鎖)

四肢骨は全体的に長大で頑強な傾向が顕著である。第17・19表に計測結果を示したが、最大長、骨幹諸径ともに比較群の平均値を大きく上回っている。今回の人骨群の中で唯一計測出来た上腕骨最大長は、やはり長い特徴を持つ北部九州古墳人の平均値を遙かに超え、その最大値に近い。同傾向は尺骨でも確認出来るし、下肢骨も同様に著しく長い。骨幹諸径も大きく、全体的に同時代の男性としては頑強さが目立つ。骨体断面では、上腕骨と脛骨には少し扁平性が、大腿骨には著しい柱状形成が見られた。また、大腿骨最大長から推定した身長は169.1cm(第20表)に達し、10-3号男性と同様、当時としては異例の高身長男性と言える。

第20表 推定身長と比較 (cm)

		男 性	
		N	M
千崎古墳群10-3号			165.9
18号			169.1
北部九州・山口 ¹⁾	(古)	40	162.8
西九州 ²⁾	(古)	18	159.8
南九州 ²⁾	(古)	7	158.3
畿内 ²⁾	(古)	6	162.3
関東 ²⁾	(古)	19	163.0
北部九州 ¹⁾	(弥)	80	162.1
山口	(弥)	49	163.3
(土井ヶ浜)		36	163.7
西北九州 ¹⁾	(弥)	16	158.8
広田 ¹⁾	(弥)	14	154.0
北部九州	(縄)	8	159.2
津雲*	(縄)	13	159.9
吉胡*	(縄)	22	158.9
吉母浜 ³⁾	(中)	18	159.7

1) 中橋・永井(1989)、2) 池田(1993)
3) 内藤(1971)、4) 中橋(2003)
5) 中橋・永井(1985)
* 大腿骨最大長より算出



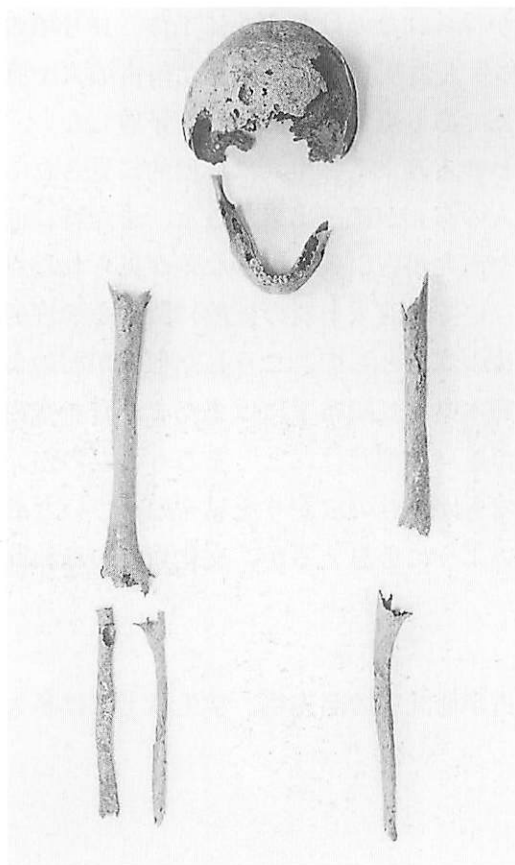
第50図 ペンロース形態距離 (千崎古墳人より)

以上、千崎古墳群から出土した人骨には（全身所見が得られたのはわずかに1体、18号墳のまとめみ）、これまで知られていた近隣の古墳人や西北九州弥生人よりもむしろ北部九州古墳人や弥生人に近い特徴が見られた。2体の男性が非常な高身長である点も、その傾向と矛盾しない。高顔で扁平な鼻根部、高身長という組み合わせは、いわゆる渡来系弥生人に典型的に見られるものであり、今回、天草諸島にややそれに類した古墳人の存在が確認出来たこと、また特に池田（1993）が報告した熊本県や長崎県出土の古墳人骨や南九州古墳人と大きな差が見られた点は、古墳時代における九州人の身体形質の変化状況、ひいては渡来形質の拡散に関する地理的、時代的変遷を辿る上で貴重な情報となろう。ただ、今後の課題として、こうした形質がどのような広がりを見せるのかを明らかにする必要がある。熊本県や長崎県下にはまだまだ資料空白部が多く残されており、今回明らかになった形質がこの離島内部だけにとどまるものなのか、それともすでに当時から九州本島の熊本県や長崎県下でもかなりの広がりを見せ始めていたのか、従来の知見を見る限りそうした現象はやや考え難いようにも思えるが、文化面での地域間交流なども絡めた今後の分析が待たれる。

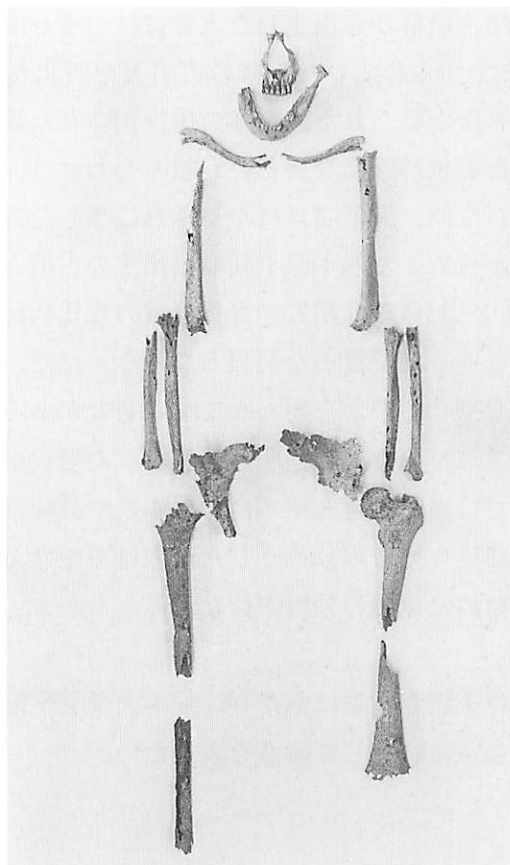
謝辞：本人骨を調査するにあたり、熊本大学文学部考古学研究室の諸先生、学生諸士には多大なお世話になった。記して謝意を表したい。

文献

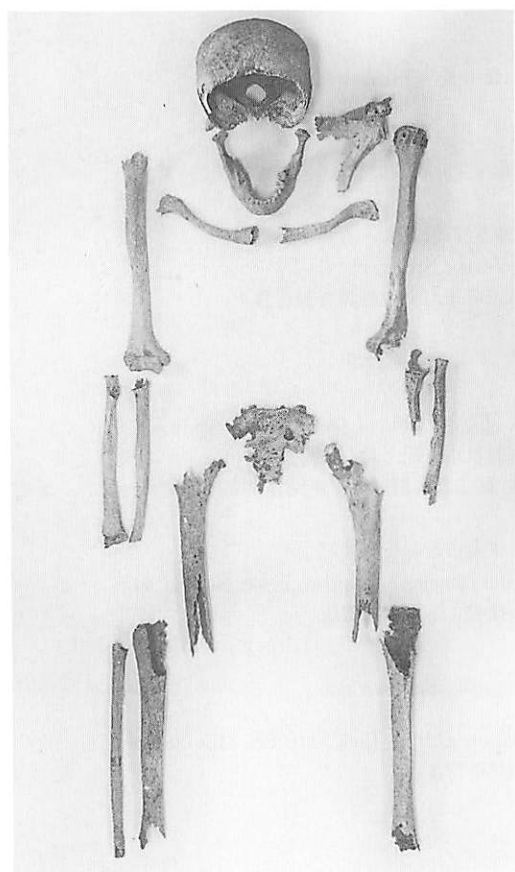
- 阿部英世（1955）：「現代九州人大腿骨の人類学的研究」、人類学研究2。
- Doi, N. and Tanaka, Y. (1987) : A geographical cline in metrical characteristics of Kofun skulls from Western Japan. 人類学雑誌95。
- 原田忠昭（1954）：「現代西南日本人頭骨の人類学的研究」、人類学研究1。
- 池田次郎（1988）：「吉備地方海岸部の縄文時代人骨」、考古学と関連科学（鎌木義昌先生古希記念論集）。
- 池田次郎（1993）：「古墳人」、古墳時代の研究1、雄山閣出版。
- 鑄鍋命達（1955）：「九州人下腿骨の研究」、人類学研究2。
- 金関丈夫・永井昌文・佐野一（1960）：「山口県豊北町土井ヶ浜遺跡出土の弥生式時代人頭骨」、人類学研究7。
- 金高勘次（1928）：「吉胡貝塚人頭骨の人類学的研究」、人類学雑誌43。
- 清野謙次・宮本博人（1926）：「津雲貝塚人骨の人類学的研究、第2部、頭蓋骨の研究」、人類学雑誌41。
- Martin-Saller（1957）：Lehrbuch der Anthropologie. Bd. I Gustav Fischer Verlag, Stuttgart.
- 松下孝幸（1981）：「佐賀県大友遺跡出土の弥生時代人骨」、大友遺跡、佐賀県呼子町文化財調査報告書1。
- 溝口静男（1957）：「現代九州日本人前腕骨の人類学的研究」、人類学研究4。
- 森本岩太郎（1971）：「脛骨断面指数の算出をめぐる－Martin法への反省」、人類学雑誌79。
- 内藤芳篤（1971）：「西北九州出土の弥生時代人骨」、人類学雑誌79。
- 内藤芳篤（1985）：「国家成立前後の日本人－古墳時代人骨を中心にして－、Ⅱ、南九州およびその離島」、季刊人類学16（3）。
- 中橋孝博（1988）：「古人骨の性判定法」、日本民族・文化の生成（永井昌文教授退官記念論文集）、六興出版。
- 中橋孝博（2003）：「鹿児島県種子島広田遺跡出土人骨の形質人類学的所見」、種子島広田遺跡、鹿児島県立歴史資料センター黎明館。
- 中橋孝博・永井昌文（1985）：「山口県吉母浜遺跡出土人骨」、吉母浜遺跡、下関市教育委員会。
- Nakahashi, T. and M. Nagai（1986）：Sex assessment of fragmentary skeletal remains. J. Anthropol. Soc. Nippon, 94.
- 中橋孝博・永井昌文（1989）：「弥生人の形質、男女差、寿命」、弥生文化の研究1、雄山閣出版。
- 専頭時義（1957）：「現代九州日本人上腕骨の人類学的研究」、人類学研究4。
- 城 一郎（1938）：「古墳時代人骨の人類学的研究」、人類学報1。
- 鈴木 尚（1963）：「日本人の骨」、岩波新書477。
- Yamaguchi, B.（1973）：Facial flatness measurements of the Ainu and Japanese crania. Bull. Natn. Sci. Mus. Series D, 6.
- 財津博之（1956）：「山口県土井ヶ浜弥生前期人骨の四肢長骨に就て」、人類学研究3。



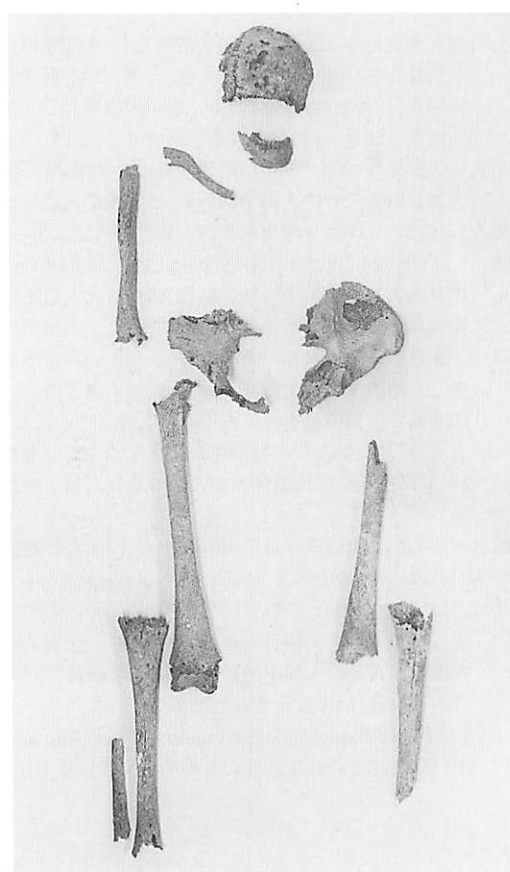
10-1 号人骨



10-2 号人骨

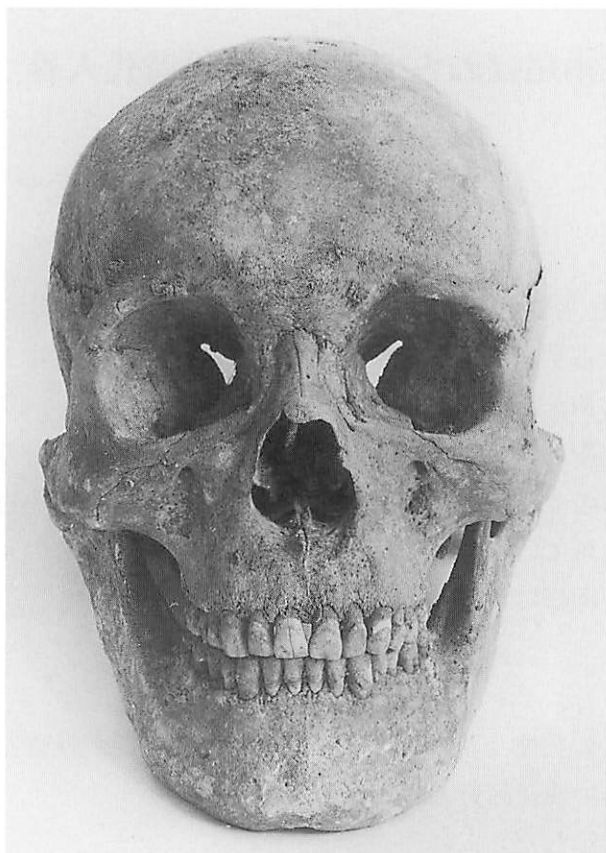


10-3 号人骨

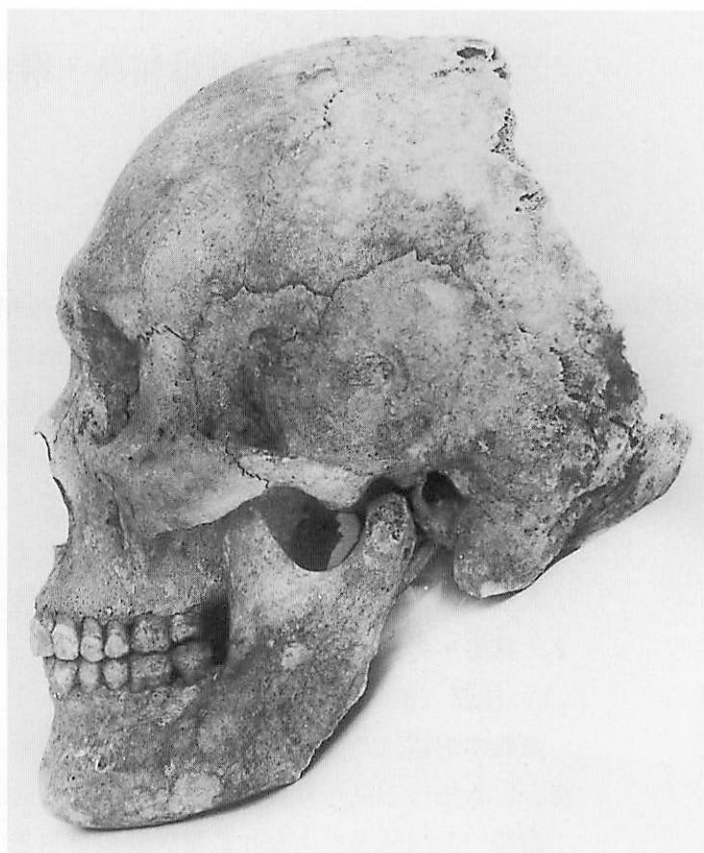


10-4 号人骨

第51図 千崎古墳群10号墳出土人骨



正面



左側面



上面

第52図 千崎古墳群18号墳出土頭蓋骨

三 熊本県上天草市維和島・桐ノ木尾ばね古墳出土の古墳時代人骨

中橋孝博（九州大学）

1. 遺跡・資料・方法

資料の概要

桐ノ木尾ばね古墳は、熊本県上天草市維和島北端の千崎古墳群にも近い峰上に位置する。1955年（昭和30年）に熊本県立玉名高等学校考古学部により調査され、竪穴式石室から人骨1体が出土した。第53図に示したように、頭蓋の他、左右の鎖骨、上腕骨、右撓骨、左尺骨、及び左右大腿骨が回収された。骨盤などの軀幹部や下腿部の骨は失われている。埋葬姿勢や副葬品の詳細については当時の記録が失われているので不明である。人骨の所属時代は、考古学的な考察から、古墳時代前期ないし中期と考えられている。

人骨の計測方法等については千崎古墳人骨と同様に行った（千崎古墳群の項参照）。

2. 結果・考察

（1）頭蓋（第54図）

頭蓋の形状、及び四肢骨のサイズから判断して女性とみなされる。また、歯の咬耗が軽微で、縫合にも癒合が見られないことから、比較的若い成年人骨と考えられる。

頭蓋の計測結果を主な比較群と共に第21表に示した。

まず脳頭蓋では、幅径の大きさが顕著で、頭型（頭長幅示数：83.9）は短頭型に入る。顔面部では、明らかな高顔傾向が窺える。顔高、上顔高はともに北部九州の古墳人や弥生人に近く、当時の南九州や西北九州弥生人とは大きな差が認められる。顔面の示数値にもその傾向は明らかである。また、鼻骨の彎曲は弱く（鼻骨彎曲示数：92.3）、この点でもいわゆる渡来系弥生人に近い傾向を示している。眼窩はやや低いが西北九州弥生人ほどではない。歯槽性の突顎は見られない。

残存歯を以下に示す。風習的抜歯痕は見られない。

/	/	/	○	P ¹	○	○	○	○	○	○	P ¹	○	/	/	/
×	×	×	×	×	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	C	P ₁	×	○	×	×

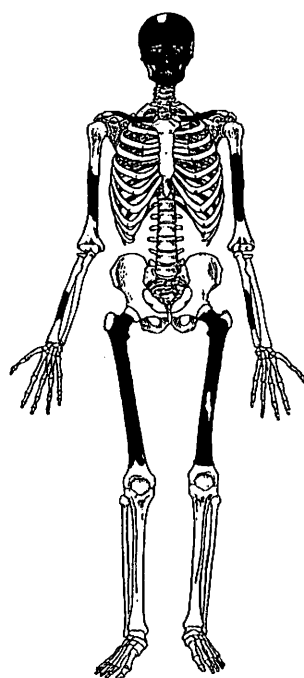
（○：歯槽解放、／：欠損、×：歯槽閉鎖）

（2）四肢骨

四肢骨の計測結果を第22・23表に示した。

上腕骨はこの時代の女性としてはやや太く頑丈である。断面に扁平傾向は見られない。大腿骨では粗線の発達のためやや矢状径が大きく、その断面示数は縄文人の平均値に近い。太さは北部九州古墳人などに比べてさほどではないが、上肢骨に見られた頑丈な傾向は下肢骨でも認められる。

以上、桐ノ木尾ばね古墳出土の女性人骨は、近隣の千崎古墳人と同様に、地理的には近い西九州や南九州の古墳人（池田1993）、あるいは西北九州弥生人等とはかなり異なり、むしろ北部九州のいわゆる渡来系弥生人やその影響を引き継いだ古墳人に共通した特徴が確認された。この事例の追加によって、少な



第53図 桐ノ木尾ばね古墳出土人骨残存部

第21表 主要頭蓋計測値の比較（女性）（桐ノ木尾ばね古墳出土人骨との比較）

	桐ノ木 (古墳)	北部九州 ¹⁾ (古墳)		西日本 ²⁾ (古墳)		北部九州 ¹⁾ (弥生)		西北九州 ³⁾ (弥生)		西九州 ¹⁾ (古墳)		津雲・吉胡 ⁵⁾ (縄文)		西南日本 ⁶⁾ (現代)	
		N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
1 頭蓋最大長	174	37	175.6	14	173.1	86	177.0	15	178.1	5	172.6	46	176.1	57	172.8
8 頭蓋最大幅	146	33	137.3	16	136.6	84	138.4	15	139.3	6	136.2	49	141.5	57	134.0
17 Ba - Br 高	-	30	129.6	13	128.2	66	130.7	7	127.3	2	132.0	21	129.7	57	131.3
8/1 頭長幅示数	83.9	28	78.5	10	79.1	72	78.1	15	78.2	5	79.4	41	80.3	57	77.6
17/1 頭長高示数	-	27	74.2	10	73.6	62	74.1	7	71.2	2	76.4	20	73.6	57	76.0
17/8 頭幅高示数	-	21	93.9	10	92.5	56	94.9	7	92.5	2	97.8	20	91.9	57	98.0
45 頬骨弓幅	-	27	131.2	3	121.7	61	131.3	6	13.2	5	129.4	10	132.6	57	123.9
46 中 顔 幅	96	31	100.4	8	98.4	67	99.8	11	95.9	5	94.4	23	99.7	57	93.4
47 顔 高	115	15	110.4	5	112.4	45	116.3	9	104.9	4	106.0	14	105.1	14	112.9
48 上 顔 高	68	33	67.7	14	65.1	66	70.1	12	60.9	3	61.0	17	62.0	55	68.2
47/45 顔示数 (K)	-	13	83.8	2	88.7	34	88.7	6	81.7	4	82.4	7	79.2	14	90.8
47/46 顔示数 (V)	119.8	12	109.2	-	-	39	116.7	9	109.5	4	113.7	13	106.8	14	119.0
48/45 上顔示数 (K)	-	23	51.7	3	55.0	49	53.7	6	47.6	3	47.6	7	48.0	55	55.0
48/46 上顔示数 (V)	70.8	27	67.7	8	67.0	57	70.2	11	63.5	3	63.7	14	62.3	55	72.9
51 眼窩幅 (左)	41	31	41.3	13	41.5	66	41.6	10	41.1	3	41.0	22	41.7	57	40.5
52 眼窩高 (左)	32	34	33.9	14	33.6	65	34.1	10	31.2	4	32.5	14	32.6	57	34.0
52/51 眼窩示数 (左)	78.0	31	82.2	12	81.5	62	82.0	10	75.9	3	80.0	13	78.0	57	83.9
54 鼻 幅	25	32	25.9	14	25.4	72	26.6	12	26.6	4	26.3	27	25.4	57	25.0
55 鼻 高	49	33	48.5	14	48.0	71	49.8	12	46.3	4	44.0	21	44.9	57	48.6
54/55 鼻 示 数	51.0	30	53.8	13	53.2	69	53.5	12	57.4	4	59.7	20	56.1	57	51.4

1) 中橋・永井 (1989)、2) 城 (1938) : 3) 内藤 (1971)、4) 池田 (1993)、5) 清野・宮本 (1926)・金高 (1928)、6) 原田 (1954)

第22表 上肢骨計測値（女性、左）（桐ノ木尾ばね古墳出土人骨との比較）

	桐ノ木 (古墳)	北部九州 (古墳)		西日本 ¹⁾ (古墳)		北部九州 ²⁾ (弥生)		大友 ³⁾ (弥生)		広田 ⁴⁾ (弥生)		津雲 ⁵⁾ (縄文)		九州 ⁶⁾ (現代)	
		N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
上腕骨															
1 最大長	-	5	281.2	1	255.0	11	283.2	4	262.3	3	253.3	21	264.4	36	271.7
2 全 長	-	5	275.4	-	-	8	282.3	4	257.8	3	251.3	19	259.6	36	268.6
5 中央最大径	22	20	20.1	4	18.3	35	21.0	20	21.0	2	22.0	40	19.7	36	19.8
6 中央最小径	17	20	15.1	4	13.5	36	15.3	20	15.8	2	15.5	41	14.0	36	14.8
7 骨体最小周	-	19	56.0	5	51.2	47	56.9	19	57.6	14	54.2	42	53.9	36	54.8
7a 中央周	64	20	58.6	-	-	33	60.7	19	61.8	2	63.0	40	56.5	36	56.9
6/5 骨体断面示数	77.3	19	75.6	4	75.0	35	73.2	20	75.9	2	70.5	40	71.3	36	75.3
7/1 長厚示数	-	5	19.9	1	22.3	11	19.8	11	22.4	2	23.4	21	20.4	106	20.9

1) 城 (1938)、2) 中橋・永井 (1989)、3) 松下 (1981)、4) 中橋 (2003)、5) 池田 (1988)、6) 専頭 (1957)・溝口 (1957)

第23表 下肢骨計測値（女性、左）（桐ノ木尾ばね古墳出土人骨との比較）

	桐ノ木 (古墳)	北部九州 (古墳)		西日本 ¹⁾ (古墳)		西九州 ²⁾ (古墳)		南九州 ³⁾ (古墳)		北部九州 ¹⁾ (弥生)		津雲 ⁴⁾ (縄文)		九州 ⁵⁾ (現代)	
		N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
大腿骨															
6 中央矢状径	26	27	24.9	23	24.5	12	24.4	16	25.0	112	25.7	45	25.2	13	23.6
7 中央横径	25	27	26.8	24	24.7	12	25.2	15	23.8	112	26.3	45	24.2	13	23.2
8 中央周	80	27	81.2	23	78.1	-	-	-	-	111	81.5	45	78.0	13	74.2
9 骨体上横径	30	23	30.6	19	28.1	-	-	-	-	86	30.5	42	28.4	13	27.5
10 骨体上矢状径	22	23	22.6	17	26.6	-	-	-	-	86	23.2	42	22.2	13	21.3
6/7 中央断面示数	104.0	26	93.2	23	100.0	12	97.4	15	105.3	112	98.3	45	104.5	13	102.0
10/9 上骨体断面示数	73.3	23	74.1	19	72.2	-	-	-	-	86	76.4	42	78.2	13	77.1

1) 城 (1938)、2) 池田 (1993)、3) 中橋・永井 (1989)、4) 池田 (1988)、5) 阿部 (1955)、鏑鍋 (1955)

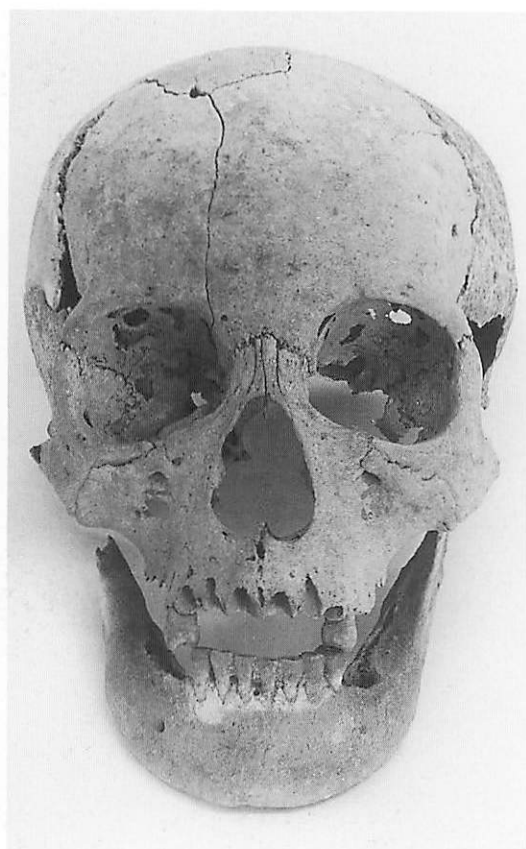
くとも天草諸島の一部では、古墳時代の前期～中期にかけての頃、おそらくは北部九州を起点とする新形質の遺伝的影響が及び始めていたことが確認出来たと言えよう。九州東部でも、平野部では同様に古墳時代に入ると新形質の拡散が指摘されているが、熊本県や長崎県ではどのような状況にあったのか、まだ定かではない。今回明らかになった傾向が時代的、地理的にどのような広がりを見せるのか、今後の興味深い課題となろう。

文献

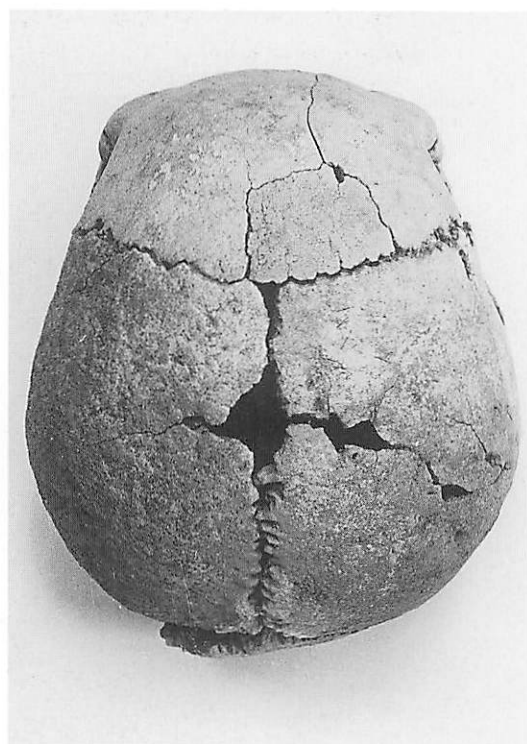
- 阿部英世 (1955) : 「現代九州人大腿骨の人類学的研究」、人類学研究 2。
原田忠昭 (1954) : 「現代西南日本人頭骨の人類学的研究」、人類学研究 1。
池田次郎 (1988) : 「吉備地方海岸部の縄文時代人骨」、考古学と関連科学 (鎌木義昌先生古希記念論集)。
池田次郎 (1993) : 「古墳人」、古墳時代の研究 1、雄山閣出版。
鐙鍋命達 (1955) : 「九州人下腿骨の研究」、人類学研究 2。
金高勘次 (1928) : 「吉胡貝塚人頭骨の人類学的研究」、人類学雑誌 43。
清野謙次・宮本博人 (1926) : 「津雲貝塚人骨の人類学的研究、第 2 部、頭蓋骨の研究」、人類学雑誌 41。
Martin-Saller (1957) : Lehrbuch der Anthropologie. Bd. I. Gustav Fischer Verlag. Stuttgart.
松下孝幸 (1981) : 「佐賀県大友遺跡出土の弥生時代人骨」、大友遺跡、佐賀県呼子町文化財調査報告書 1。
溝口静男 (1957) : 「現代九州日本人前腕骨の人類学的研究」人類学研究 4。
内藤芳篤 (1971) : 「西北九州出土の弥生時代人骨」、人類学雑誌 79。
内藤芳篤 (1985) : 「国家成立前後の日本人－古墳時代人骨を中心にして－、Ⅱ、南九州およびその離島」、季刊人類学 16 (3)。
中橋孝博 (1988) : 「古人骨の性判定法」、日本民族・文化の生成 (永井昌文教授退官記念論文集)、六興出版。
中橋孝博 (2003) : 「鹿児島県種子島広田遺跡出土人骨の形質人類学的所見」、種子島広田遺跡、鹿児島県立歴史資料センター黎明館。
Nakahashi, T. and M. Nagai (1986) : Sex assessment of fragmentary skeletal remains. J. Anthropol. Soc. Nippon, 94.
中橋孝博・永井昌文 (1989) : 「弥生人の形質、男女差、寿命」、弥生文化の研究 1、雄山閣出版。
専頭時義 (1957) : 「現代九州日本人上腕骨の人類学的研究」、人類学研究 4。
城 一郎 (1938) : 「古墳時代人骨の人類学的研究」、人類学輯報 1。
鈴木 尚 (1963) : 「日本人の骨」、岩波新書 477。
Yamaguchi, B. (1973) : Facial flatness measurements of the Ainu and Japanese crania. Bull. Natn. Sci. Mus. Series D, 6.



右側面



正面



上面

第54図 桐ノ木尾ばね古墳出土頭蓋骨